

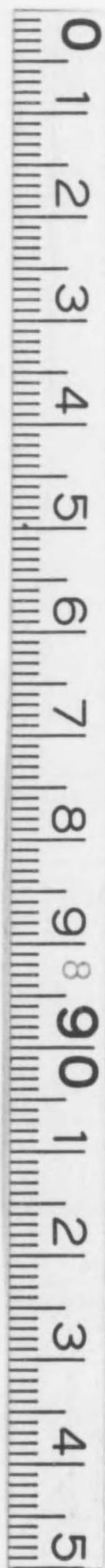
387-264



1200501457593

387

264



始



15.9.16



耶穌

著スエドバリア

譯庵想無林武

版社造改

1 425



耶穌

著スエビルバインア

譯庵想無赫武

昭和五
年
改
造
社
版

387-264

目次

第一章、——事實は豊富だ。……………	一
第二章、——埋木の兩親。……………	八
第三章、——讀方の先生と文字。……………	二一
第四章、——××。……………	三三
第五章、——云ふに云はれぬ同胞。……………	一九
第六章、——冠。……………	三三
第七章、——世の中の入口。……………	三三

第八章、——その日ノと仕事。……………	三〇
第九章、——わたしの父は死んだ。……………	三二
第十章、——プリスキラ。或は、個と全。……………	三三
第十一章、——ニコデモ。或は、生と死。……………	三六
第十二章、——眞理と實相。……………	三六
第十三章、——歩め！。……………	三六
第十四章、——人間と風。……………	三六
第十五章、——荊冠。……………	三六
第十六章、——きのふ、けふ、あした。……………	三六
第十七章、——マルタとマリヤ。……………	三七

第十八章、——力のやさしさ。……………	三七
第十九章、——人間の塔。……………	三七
第二十章、——山上の説教。……………	三八
第二十一章、——悪と仁との結婚。……………	三九
第二十二章、——わが正義の神。……………	三五
第二十三章、——天國の門。……………	三九
第二十四章、——共産。……………	四〇
第二十五章、——星は地に根を卸してゐる。……………	四一
第二十六章、——わたしは知らなかつた。……………	四二
第二十七章、——イスラエルだけ。……………	四二

第二十八章、——まさりもの。……………一三三

第二十九章、——未來の黙示。……………一三四

第三十章、——神殿の説教。……………一三五

第三十一章、——實行の寶。……………一三六

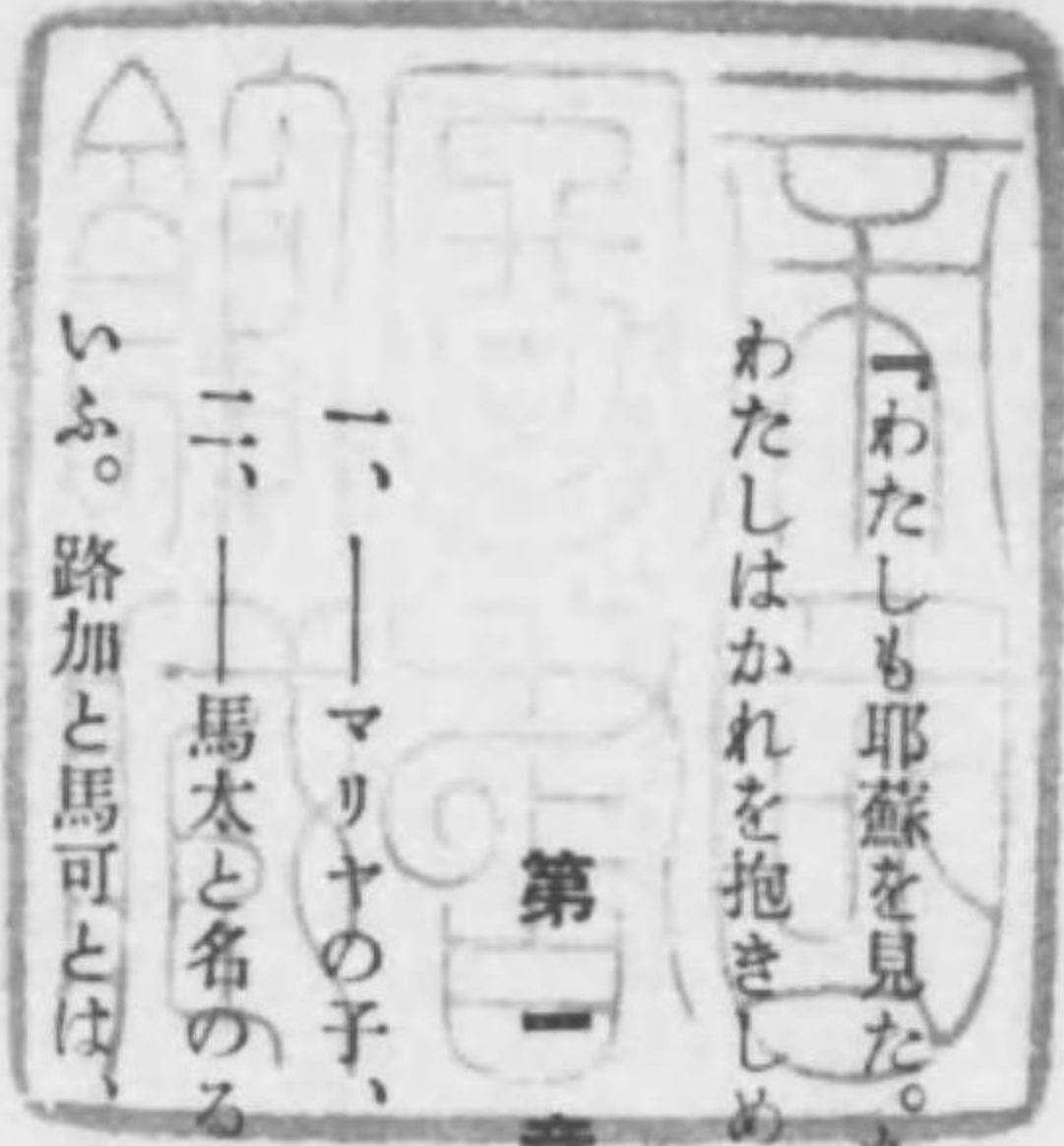
第三十二章、——この人だ。……………一三六

第三十三章、——法官ども。……………一三八

第三十四章、——十字架。……………一九二

耶 蘇

アンリー・バルビユス
武林 無想庵 譯



『わたしも耶蘇を見た。かれは身をもつて明確の美をわたしに示してくれた。わたしはかれが好きだ。わたしはかれを抱きしめる。もしそれが必要なら、わたしはかれのために他の人々と争ふであらう』

第一章

- 一、——マリヤの子、イエスの消息。
- 二、——馬太と名のるものがあつた。又約翰と名のるもの、かれはイエスを見、イエスと話したといふ。路加と馬可とは、イエスについてシモン・ペテロの物語るを聴き、さうしてイエスの話をしたといふ。又その姿を見、或は見ずに、イエスの話をしたその他の人々があつた。言葉は残る。が事實はたしかでない。
- 三、——かれについて語られたる言葉の世界をくどいので、今、ものをいふのはかれである。

四、——真理は唯一であるのみだからである。さうしてそれはわれわれ全人類のものだからである。

五、——毎朝、家の片隅で目がさめる。わたしは子供なので、そこへ寝かされてゐたものだ。

六、——目をさましながら、わたしはよく雲にとりまかれた夢を見てゐる。と、わたしは思ふ。「一體おれは誰なのだ？」

七、——すると、夢の黒雲のまん中があかるくなる。四角な小窓ができあがる。そこからすばらしい村が見える。わたしの眼は物のかたちをつくり出す。わたしの部屋のそばにあつて、わたしのゐるのより大きい部屋には、ひざまづいて竈の中を掃除してゐる母の姿が見える。わたしはマリヤの子イエスだ。

八、——隣室にうづくまつてる母の見えるのは、そこに戸がないからだ。わたし達の家は、どんな小聲でわたしがこの際の女の物を云つても恐らくきこえさうなほど小さいのだ。がわたしはスツカリ目のさめきるまで動かない。厚い鼠色の壁の、その一と隈一と隈の隆起や、窓框の上に据つた重たい赤甕が見えて来るまで動かない。又箱の上にあるわたしの着物が数へられるまで動かない。

九、——朝がわたしを起してくれたところで、勝手に外へは出られない。わたしは父のそばにゐる指物師だからだ。食事がすむや否や、それからまだわたしの皿小鉢の物音が消えやらぬうちに、わた

しは火のそばで働き出す。裏庭の中でだ。「さア、どれでもいいから、俺のやうにやつて見ろ。」と、父が、わたしに云ふ。わけなくできる仕事なのだが、わたしにはそれがむづかしくてうまくできない。父のやうに大きくならないうちはかうならう。

一〇、——が、時々、父はわたしに、「そとへ行け。」と云ふ。わたしがまだ子供だからさう云ふのだ。

一一、——野原や石の多い谷あひをば、ズン／＼山の方へ向いて行く。と、山はいつでも巨人のやうな足どりで、先へ／＼と遠ざかる。

一二、——海のむかふで、白いところからそれを太陽がギユツ／＼と握みだしてゐるやうな、まつ黒にかゞやく瀝青の山々、わたしはついそれに見とれて了ふ。世の中で一番大きい物だ。

一三、——どこからわたしは来る？ わたしはどこへ行く？ さうしてわたしは何物だ？ わからないけれども、大きな石塊や天然林の無秩序よりは、わたしは繪のやうにつくられた庭園を撰ぶ。工夫のある耕地を撰ぶ。地下でスツカリ整理された可憐な土を撰ぶ。

一四、——又わたしは庭より家を撰ぶ。で、いつも家のあるところへ行く。

一五、——村の事物はたえずわたしに物語る。「わたし達はまアかうです。岩の多い街路、わたし達はいたづらに死滅してゐます。すぎゆく時がわたし達を殺すのです。」灰色の敷石、上に棕櫚の木、飲

川泉、水につかり、水中で小砂利の堆積をなす、その白い石。で、ぐるりには、遊戯にいそがしい子供等の叫び、青いかつぎの女達、その青さをば、恰も大空の布きれの一部として、日光がごし／＼と洗つてゐます。それから明るい地上には、さながら無数の手のひらのやうに、太陽が大無花果の黒い葉蔭を落してゐます。村に立ちはだかる圓い大きな無花果の木です。とき／＼家々の中の一軒で人聲がします。と、その棕櫚の木の下の（壁を除いた）一切がざはつきます、「エムエルが死んだ」とか、「ゾアルが嫁とる」とかいふのです。が、遠方からでは、何事かある家も森閑としたものです。ざつとこんなもので。」

一六、——わたしは家に歸りたくなる。わたしのパンの家へ。

一七、——わたし達の家は随分奉公して来たものだ。

一八、——うちでは母が大役だ。うちではその母がその母としての任務を擔つて、ハア／＼といそがしい。うち中の事がみんな母に落ちかかるからだ。しかもその重荷が母は好きなのだ。食事の時間が母をせきたてる。つらい拭掃除が八方から母にぶつかつて来る。

一九、——人目に立たぬわたしの母は、ある日わたしに馬小舎を見せて、「こゝがお前の生まれたところだよ。」とさゝやいた。

二〇、——一夜、そこでだ。薬、土、それから闇中満天の星。

二一、——母は溜息をつく。グツタリ腰かける。

二二、——黒布の下に皺だらけな黒い額、猶太型の顔、ほこりだらけな足の指。

二三、——脈管の中をながれ／＼る彼女の血。

二四、——父は年よりだ。とき／＼頭がひとりでに顛へる。特別にきれいすきで、きたないものはどし／＼すてさせる。何よりもまづ清潔だ、と父は云つてゐる。ズツと昔からの指物師だ、その手が木で出来てるほど指物師だ。

二五、——そこで、わたしは人間よりは貧しき者どもの方を撰ぶ。

二六、——ある日、山から山へ行く一人の老人が、（人間は山を目あてにするものなので、道すがらわたしの家で泊つたことがある。その老人はわたし達より大きかつたやうにわたしは思った。人が知らず知らず、しかも又知つてゐる人間の秘密をば、到るところでさらつてゆくのはこの老人だ。で、表の戸の前で老人の腰かけてゐたところは、そこが一寺院の廣場なのであつた。

二七、——もの凄いやいほどかれは醜かつた。その影はきたならしかつた。ものいふことをかれは知らなかつた。

二八、——ものが云へないので、かれの魂は中氣に罹つてゐたわけだ。

二九、——ただ眼だけが、たゞ顔をしかめるだけが、口ほどにものを云つた。

- 三〇、——さうして日顔の窪みかたで、云ひたいことが人にわかつた。
- 三一、——が、生きとし生ける物の中で、わたしは動物に感心してゐる。
- 三二、——事實さうなんだから、さういふのだ。
- 三三、——眼をあげて、まだ子供等や人間どもの顔を見ようともしないうちに、わたしはスツカリかれ等に見とれてゐた。
- 三四、——朝、ひもじくなつて、かれ等は懇へる。
- 三五、——かれ等はハツキリした事をいふ。かれ等はわれ／＼の生まれながらの眞理だ。かれ等は正しきものどもだ。
- 三六、——で、日光と槽櫃との間につつ立つて、へ一束の藁が地上で日に焦げてゐる、わたしは驢馬に話しかける。「お前は灰色をした非常に貧しい或者だ。お前は頭をつき出す。お前の鼻面は黒んぼだ。お前は小ツぼけな四つ足の上に据ゑつけられてゐる。お前には踵だけしきやない。お前の肌は木地のでるまで擦りきれてゐる。とき／＼お前の背中ちゆうが、まる／＼としたお前のお肚ちゆうが、なんだか下に手でもかくれてゐるやうに動く。わたしもお前も同様に無智だ。だが、わたしの無智は厚ぼツたい。お前は透明だ。
- 三七、——われ／＼だつて同様に求めてゐる。が、あんまり物事を知りすぎるわれ／＼は、何を求めてゐるのか、よく知らないのだ。

三八、——この世では、われ／＼は富者だ。お前達は貧者だ。が、われ／＼の富はわれ／＼を貧者にする。お前達の貧はお前達を富者にする。』

三九、——と、驢馬は自分の頭の方へ差出されたわたしの手をヂツと見た。で、自分には手がないので弱つてゐた。又驢馬の短所は口のきけない事であつた。

四〇、——さつき云つた老人、もう一度いふと、山から来て、途すがらわたし達の家へ足をとゞめた老人は、案内に犬を一疋つれてゐた。老人の眼がそのクシャ／＼した顔の中でほとんど明いてゐなかつたからで。

四一、——毛色は褪せ、泥のかたまりは一杯つけ、そうしてそのきたないマントのほか何ひとつもつてゐない、一頭の老いぼれ犬だ。犬は老人を見て、立派だと思つてゐた。たつた一つの姿しきやかれの心には映らなかつたものだ。

四二、わたしの目は老人よりはこの犬の方を悦んだ。人間はわからないが、犬はわかるからだ。

四三、——と、脇腹に怪我して、血が出てゐるのを見つけたので、それがわたしにはなほぐつと一遍にわかる。内心では、わたしはもつと血が出てゐた。わたしが近よつたとたん、犬がわたしを見た。とたん、われ／＼の傷がまさ／＼とそこにあつた。「わたしに物がいひたくて、お前は跪まづくん

ね。」

四四、——そこへ身を倒した、石のやうに古い又命のやうに若々しいかれの前で、わたしはなんにもしない。なんにもしないが、しかもわかるのは何かしてゐるのだ。

四五、——で、こちらの、とびく／＼に建つ小屋並の前には、たゞもうまっ白にもり上つた、あのいちらしい小羊がゐる。

四六、——すると蝗が、『地面はみんなをボン／＼抛りあげる。』といふ。

四七、——と、又、翼のあるちいぢやな小鳥が、

四八、——『青空は厚い。』といふ。

四九、——鈴のやうな聲だ。

五〇、——動物は生の前でハッキリしてゐる。丁度人間が死の前だけでハッキリしてゐるやうに。

五一、——前述の如く、われ／＼の無智は夜で出来あがつてゐるが、かれ等のは晝でつくられてゐるからだ。

五二、——雲の單純なものどもは幸福だ。天國はかれ等のものだ。

第二章

一、——又わたしは晝間より夕暮を選ぶ。

二、——夕暮はうはツ面のものをそっくりそつとかき消して了ふ。目に見える境界を、刻々の浮華を、あらゆる白晝の蓋障をとり拂つて了ふ。夕暮は身軽になつた或物だ。わたしは夕暮がすきだ。そのほのかな光がすきだ。

三、——本來に還る光だ。

四、——淑やかな夕暮は眞理を示す。人の心はおのづからにして影に入る。

五、——この無色の姿こそわれ／＼の諸父の父が山上で見た火焰の棘より一層力強いあらはれだ。

六、——最初モーゼがブル／＼顫へて、その何物かを見きはめる氣になれなかつた時の。

七、——白晝の光の中で、『これを拜め』、『あれを拜め』と若し人がわたしに云つたならば、影がわたしのそばへ白晝を洗ひに來た時に、わたしは往々心中で『いやだ。』と答へる。どれもこれも本物とは思へないからだ。

八、——入相をわたしが父母の家へ歸つて行つた時、入口からさう遠くないところに、男の子が一人つツ立つてゐるのを見た。かれはわたしと同じ位な年恰好であつた。又やせこけて見すばらしかつた。

九、——『お前は何よりもお前の両親が好きかい？』と、かれはわたしに訊いた。わたしは『さう

だ。」と答へた。「さうぢやない！」とかれは叫んだ。

一〇、——なんだか地の中にある異常な木の根にハタとぶつかつたやうな心持がした。と、かれは見えなくなつた。「さうぢやない。」と云ひ放つた者はかれだけであつた。

一一、——その後、わたしはその男の子がザカリヤのヨハネであつたことを知つた。

一二、——ところが、夕暮の部屋の中には、われ／＼の一家がゐた。

一三、——ゆり動かしてゐる父の頭や晝のつかれでグツタリした母の肩がつひ鼻の先に見えてゐた。

一四、——この部屋の中では、する事がもうなんにもなかつたので、みんなでむだ話してゐた。父母はとなり近所の、そのまた隣から隣へと、村中の人々の噂してゐた。さうして、「ザドクがあんな事をした。」とか、「サツピラがこんな事をした。」とか、「わたし等はなぜあゝしなかつたらう？」とか、悪口を云つたり、やきもちを焼いたりしてゐた。

一五、——で、家庭といふものは、互に唾みあふ料簡の狭い蔭口のことなので、争ひや嫉みの種はそこに伏藏するものだといふ事がよくわかつた。

一六、——唯見ると、夜が部屋の戸をまつ黒にしてゐた。たしかに夜がその戸をあけて、それをば一切の物の中へつきまぜてゐたのだ。と、その開いた戸口から、フラ／＼とわたしが家を出て、一

切の他人の方へ、あらゆる空間の、又あらゆる時間の人々の方へ、どうやら出かけて行つたものゝやうな心持になつた。

一七、——父上、母上、わたしの本當の家族はどうもあなたがたぢやない。表の、向ふ方には、あなたがたよりもつと親身で、さうしてまだ親身でない人達がゐる。あなたがたの方を向いて、わたしはやつて来たのぢやなかつた。わたしの方を向いて歩いて来る者こそ、さうしてまだ名もないうちから、わたしの兄弟にならうと勉める者こそ、わたしの兄弟なのだ。「兄弟！」とわたしのいふ時、遠方の兄弟をば、わたしは呼んでゐるわけだ。

一八、——一切は自我から来るか？ わたしの血屬關係すらも？

一九、——翌日、わたしはお禮を云はうと思つて、ヨハネ・ザカリヤをさがした。あの子供が云つてくれなかつたら、わたしは自分の思つてゐたことを思はうともしなかつたに相違ない。

第三章

一、——讀方の先生が生徒等のまん中に立つて、手にした書物をたどりたどり、一切の學問や一切の出來事をば、さながら無數のおもちやの如く、即席にひろげて見せる。

二、——どの子供もすべてこれ一個の人間の救主なんだから、子供等は世の中をおぼえる必要があ

- る。
- 三、——無花果の大本は見るともなしに見てゐる。さうして他の一方では自分の影で地面の上を歩
 してゐる。
- 四、——すなはち先生は人形をうごかす人形使ひのやうなものだ。
- 五、——先生の説明によると、この世には希伯來民族しきやゐないんださうだ。さうして他の一民
 族の學問を研究することは、豚を飼ふよりも罪惡ださうだ。
- 六、——この先生はそれがために病氣になるほどの猶太人なのだ。
- 七、——モーゼの掟をくりひろげながら、先生は生徒等に、『カフトル』『キツテム』『オフル』を反
 覆させる。
- 八、——で、生徒等はそれを覚えるために、読み習ふために、十遍も二十遍もその言葉をくりかへ
 す。
- 九、——ところへ、一人の羅馬人——たとへ羅馬人でも、有徳の君子だつたので、猶太人の友達な
 のだ——が、近よりさま、ひどく小さいな顔をつき出して、『それは何の事ですか?』と云つた。
- 一〇、——『ズツと昔の都會です。』と、先生は丁寧に答へた。
- 一一、——『そんな都會は決してどこにもありませんでしよ。』と、羅馬の殿様が斷言した。

- 一二、——返事する代りに、先生は指で聖書の上にあるその地名をさし示した。
- 一三、——と、そこにかすかな文字の偶像のあることをば、その指先はわたしに示してくれた。
- 一四、——人は自分の信ずることを書くのだ。それから書いてあることを信ずるのだ。言語は一時
 きりの創造物だ。そして一切の生物同様に死ぬものだ。又書物は聲の墓場だ。
- 一五、——書かれた言葉は燃えて了ふ。
- 一六、——又眞理は言葉が入用なので、言葉を好むけれど、言葉の方では眞理が嫌いだ。
- 一七、——人間の不幸史を物語る書物は、又高らかにそれを讀む人には、小さな事ばかり教へて
 大きな事を教へないものだといふ事をば、同様にその指がわたしに示してくれた。
- 一八、——すなはち、王様がゐたとか、ゐなかつたとか、もうゐなくなつてゐたんだとか、又不識
 から不識へ、川の如く流れ去つた都會だとか、風の如く吹き去つた人名だとか、そんな小さな事ばか
 り教へる。
- 一九、——さうして常住一切の處、人間は同然に人間だといふ、さういふ大きな事を教へない。

第四章

- 一、——猶太教會の中で、口のきける連中が立ちあがる。

- 二、——わたしは子供だから、ヒツ／＼ばなしはできない。
- 三、——が、間違ひなしにチャンときくことはもうできる。
- 四、——で、腰かけて、匍で怪我した手を膝の上に見やりながら、頭をさげて聴く。
- 五、——さうしてると、なほよくきこえる。
- 六、——外では、男女の猶太人の、その色と、そのクリ／＼する目と、又その太い指だけしきや見えなかつたものだ。こゝではこの民族の内面が見える。
- 七、——信者の道徳は神を畏れることだ。
- 八、——で、こゝに集つたわれ／＼は、神を畏れるといふ事によつて、互に犇と結束してゐる。
- 九、——ものを云つてゐる。わたしはネヘミヤの偉大なる時代を思ふ。
- 一〇、——われ／＼の歴史中で一番わたしのすきな時代だ。
- 一一、——エズラの小團體がバビロンからエルサレムへ来て、その神殿造營がモーゼの掟を忘れてゐた事に氣のついた時代だ。絶望せるエズラが民衆の前でその共同の罪を懺悔した時代だ。又、スラエル民族が全部擧つて悔ひ改め、全部擧つて身を修め、さうして神に背けるその幸福の瘡癩の上にその運命を一新した時代だ。
- 一二、——この一新こそ至難であり偉大であつた。しかもその完成の歡喜のうちに、エルサレムは

七日間綠葉をもつて飾られた。橄欖、天人花、又棕櫚の葉の幕屋々々が、屋上に、内庭に、神殿の入口に、到るところに設けられた。

- 一三、——イスラエルには改悛と復興の一大力量があるからだ。
- 一四、——かれ等の五臟六腑には永遠の春がある。
- 一五、——イスラエルは罪に墮ちる。併し又罪から這出る金剛力がある。
- 一六、——かれ等の悔悟には容赦假借がない。
- 一七、——諸民族の龜鑑たるところはそこだ。
- 一八、——で、われ／＼もまた同様に、現在われ／＼の合同劇に於いて、容易ならざる一時期にある。

一九、——あらゆる方面から大飛報の反響しつゝある今日だ。

二〇、——『時は近づけり。舊世界は死滅に瀕す。』

二一、——かれ等は云ふ。『大勢の趨くところ、革命の曉だ。大地の黎明に正義の虹は閃きつゝある。』

二二、——頭をもたげて、かれ等は叫ぶ。『イスラエル萬歳！』

二三、——シオンの岡より永遠の神は獅子吼するであらう、惡魔の榮ゆる地の王國をば、正義の神

は覆へずであらう。一大減縮が地上に行はるゝであらう。この事は天使等の教書中にあらかじめわれわれに警告されてあつたところだ。

二四、——曰く、下界には深淵がある。次に死者の地帯がある。次に人間の去來する地上がある。次に空氣、次に魔王とその諸藩とが出沒する蒼穹がある。次に數百萬の天使等が密集せる不可思議微妙の七空がある。さうして第六天軍と第四天軍とが七個の玉座を圍繞する。然るに、第七空の最高所からは救世主が現はるゝであらう。玉座そのものゝ白熱斷片として地上まで落下したるのち、明皎々として宇宙心筒を突破しつゝ、再び天へ昇るであらう。

二五、——天の救主は大録をもつであらう。地は刈りとらるゝであらう。救主は罪人を追ふであらう。主の曰く、罪人若し海に沈むならば、余は怪物に命じて水中よりかれを曳きあげるであらう。かれ若し人間中に立難るならば、余は劍に命じてかれの咽喉に擬するであらう。かれ若し天に昇るならば、余はかれを天より曳きおろすであらう。かれ若し墳墓に下るならば、余は墓穴よりかれを曳きいだすであらう。

二六、——諸王國は崩壞するであらう。國民を支配する者どもは國民に怒號せらるゝであらう。諸天は退去するであらう。あらゆる島嶼は湮滅するであらう。又山々は再びその姿をば見せぬであらう。正にこれ憤怒と苦悶との日であらう。その日、太陽は黒くなるであらう。その日、騎士等と妖怪等と

は、天上に又空高き雲中に、互に格闘するであらう。その日こそ、地はその死屍の置場となるであらう。地獄はその役目を果すであらう。

二七、——革命の英雄は一新時代を劃するであらう。その時、イスラエルは驚より高く舞ひあがるであらう。七倍の光をもつて、星は正義者の頭上に輝くであらう。さうして永遠の神とわれ／＼とは、幸福の一條約を商議するであらう。

二八、——われ／＼民族の見る夢はかうだ。(一民族の見るまぼろしは、一人の見る、その人自身の諸斷片から成る夢の如きものだ)

二九、——次から次へと、幾多の希望の粉碎されたわれ／＼は、希望の民だ。民衆人だ。

三〇、——もうとても手のつけられぬやうに、不幸はわれ／＼の現状をつくつて了つた。

三一、——そうしてわれ／＼の絶叫して來たのはそこなのだ。そのわれ／＼はまだ眠つてゐる！

三二、——家へ歸らうと思つて、わたしの通り過ぎる町々には、夕日の影が長い。人々は革命を考へてゐる。

三三、——一人が云ふ。「さういふ革命は來ると思ふかね？」もう一人が云ふ。「あすのことだらうよ。」

三四、——大空の上にある太陽をば、みんなは見えてゐる。太陽は世の正義の宮殿だ。

三五、——が、みんなはそれ／＼自分の仕事や家庭のことで一杯だ。人は距離を異にするさま／＼の希望をば一緒くたにもつてゐるからだ

三六、——で、小學校のある廣場を横ぎつた時、わたしはその生徒達が一齊に、「カットル」『キツテム』『オフル』と繰返してゐるのをきいた。先生の前でこはくもありねぶたくもあつたといふ聲だ。（かれ等は目をばちくりしたり欠伸したりしてゐたのだ。）

三七、——人間はポツリ／＼分秒の間に生きて行くものだ。

三八、——それから廣場の大無花果のぐるりには、中位の無花果の木が一本づゝ戸口々々の前にある。

三九、——その實は手のひらのやうに生温い。

四〇、——それ／＼の家庭内へはいるのはその無花果の一本々々だ。

四一、——夕暮中の夕暮だ。誰も氣にとめず、そのまゝにしてふ或夕暮だ。まどろみながら、わたしはとつおいつする。『おれは何を要求してゐるのだ？』

四二、——わたしの心靈中には革命に似た昂奮がある。

四三、——父祖代々の無限地獄がわたしの内部で阿鼻叫喚する。

四四、——人間は何か正しい事をするためにつくられてゐるのだ。

四五、——人間は正しくないものをぶちこはすためにつくられてゐるのだ。

四六、——『廉直で定木を、正義で水盛りをつくらう。』と書いてある。

四七、——さうして激流をつくるのだ！

第五章

一、——『先生だ、先生だ……』と云つて、その人を指さし、その人をほめたゝへる。『あれだよ、小僧。ついて行つて、あの人のお話をきいて来い……エライ學者なんだ。』と、人々はわたしに云つた。

二、——『いやだ。』とわたしは答へる。

三、——そんな信用は偶像崇拜だ。

四、——自分の先生には自分自身で權威をつけなければならん。世評なんぞでは駄目だ。

五、——何人も常に一切みづから工夫しなくてはいかん。信仰も確信も。

六、——又他人を信用することも。

七、——他人を信用することは、とりもなほさず、人が何物をも持たぬ時に持つ大いなる富だ。

八、——感激しなげりやならんのは固有名詞ぢやない。單純な民衆の言葉だ。俗語だ。

九、——従はなくぢやならんのはエライ先生ぢやない。

- 一〇、——かれだ。
- 一一、——云ふに云はれぬ同胞だ。
- 一二、——かれはわたしへ来た。
- 一三、——丈恰好まで、かれはわたしに似てゐた。ゼベダイの子ヨハネのことだ。
- 一四、——同様にわたしもかれに赴いた。
- 一五、——二人とも世間からかけ離れてゐた。
- 一六、——で、お互に話した。
- 一七、——話すといふのは、誰かゐることだ。
- 一八、——友達と話してこそ、はじめて人の面前にゐる気がする。
- 一九、——本當に自分自身であり。又自己を知るためには、きいてくれてゐるお前といふものが入用だ。
- 二〇、——お前がそこにゐる時、わたしは心から二人きりになれる。
- 二一、——お前の云ふ言葉はわたしの口にあまり。
- 二二、——お前が眠るのを見ると、睡眠の中にジツと閉ぢこもるのを見ると、又お前の目の前にゐることがもうお前の目の前にゐることではなくなると、時のたつのがわたしには恐しくなる。

- 二三、——睡眠は死の春だからだ。
- 二四、——お前の力で、わたしは物の見方を改める。お前の力で、わたしは自分の心をつくり直す。自分の喜びを工夫する。さうして自分の預言者になる。
- 二五、——すべてみんなお前のお蔭だ。
- 二六、——ゼベダイの子ヨハネに逢つた時、わたしは自分の知つてゐた事を一氣にかれに話して了つた。
- 二七、——よし貧者中の極貧者でも、人は堂々と見るためにつくられてゐる。
- 二八、——われ／＼が空間へ興へたものをわれ／＼自身へ取戻すためにだ。
- 二九、——又人は話すためにつくられてゐる。
- 三〇、——それ、このとほり、ヨハネが出て来る。或時は遠方から、或時は室内の青い一隅から、又或時は町の黒白のまがりかどから。かれはわたしを見る。かれはわたしに話しかける。
- 三一、——わたしの胸中にある一切の未知のうちで、わたしはかれが好きだ。
- 三二、——もう一つの光明がある。
- 三三、——天にない光明だ。
- 三四、——人々の頭の中にある、人々の顔の上にある光明だ。

三五、——わたしは人間の子にすぎない。その人間の子に向つて、神が、『お前の顔をみんなの顔よりもつと苦しい顔にしてやらう。』と云つたものだ。

三六、——が、人はわたしを見つけたら最後、わたしをつかまへて、『この人だ』と云ふだらう。

第六章

一、——塀に沿うて石の腰掛が一つあつた。

二、——上に荆棘の籬があつた。又腰掛の上にもた者の頭上には荆棘の冠があつた。(冠は二つだとも云へた。)

三、——もう一人のヨハネ、すなはちヨハネ・ザカリヤが、時々、夕方、腰かけてるのを見かけたのはそこだ。

四、——又かつてわたしがかれに、『何事もたゞ歡喜のうちにのみ成る。』と云つたのはそこだ。

五、——『左様サ。歡喜のうちに、又七轉八倒のうちにだ。』とかれは云つた。

六、——『何を云つてるのだ！ 悲哀で善事ができるかい？』

七、——『わたしは悲しむとは云はなかつた。苦しむと云つたのだ。』

八、——『そんな事はない。』とわたしが云つた。『物事は物事固有の美質を通して穩かに成就される

筈だ。事變は物がをどりを踊るのだ。』

九、——かれが云つた。『さうぢやない。すべて耕すことは、耕す新しい叫びすら、悉く九死一生だ。さうして耕す人を苦しめる。』

一〇、——又その及ぼす範圍を苦しめる。』

一一、——わたしが云つた。『平和は平和で成る。』

一二、——かれが云つた。『さうぢやない。』

一三、——わたしは面白くなかつた。で、立上ると、わたしはかれを見すて、去つた。その木蔭がゾツとするほど寒かつたからだ。

一四、——『小僧さん、お前どこへ行く？』

一五、——『樂な仕事の方へ。』

一六、——『いけない。』とかれはもう一度云つた。で、立つて行くわたしに、『長い月日むだ骨を折つてから、お前はまたいつか爰へ來るだらう。』と云つた。

第七章

一、——エルサレムへの旅。

- 二、——エルサレムへ行くには野山を越えなければならぬ。
- 三、——世の中にはそのほかの野山がまだ、澤山ある。
- 四、——わたしの家は村の村だが、わたしの國は少くとも聖地の村だ。
- 五、——海とエフライムとの間にある土地で、われは女神アシトラテの木像を見た。この木像はアナニアとよぶスリア人の園中にあつたものだ。
- 六、——この女神は立派なかたちで一杯星をちりばめた青い大マントを着てゐた。女神は金冠をかぶつてゐた。女神は又同様に立派な、同様に金冠をかぶつた、神の幼児を抱いてゐた。かれ等の頭上には靈鳥がゐた。アナニヤの園中はすべて空色と黄金色づくめだ。
- 七、——わたし達は庭園の前を通つた。同行者が大勢ゐた。わたしの父もゐた。母も無論ゐた。母とわたしとは殿りであつた。
- 八、——猶太人等はみんなトットとこの偶像を通り越した。
- 九、——わたしの母も同様に。
- 一〇、——だが、のろくと。
- 一一、——母は溜息をついて、『美しいこと！ 御運のいゝ方だね。』
- 一二、——と、通りすぎながら云つた。母は善良な猶太女だつたからだ。

- 一三、——カルメル人のアビシヤイが云つた。『わたしはいつでしたか（いま／＼しい日でしたよ）偶像信者がお祭してゐるのを見たことがありますよ。波斯坊主が祭壇の前につつ立ち、さげた盃をぐつと乾すと、次に温鈍粉を輪形にこねて、麴^{ほろ}なしに焼いたものを突出し、『これこそミトラ神のおからだぢや。わしはかうして御神體をたべる。』と云ひながら、ムシヤリとやつたものです。』
- 一四、——そこにゐたわれ／＼一同は、おそろ／＼唾を吐いた。
- 一五、——お寺だ。
- 一六、——わたしは始めてそのまつ四角な大伽藍を見た。
- 一七、——新しかつた、新しいどころか、スツカリ出来上つてゐなかつた。
- 一八、——わたしは中へはいつた。祈禱者が自分一人だけ靈驗にあづからうとするお寺だ。
- 一九、——で、そのガラン洞の内部はます／＼儀式くさい。
- 二〇、——お寺の中へは律師、司祭、祭司の輩が来て、教理を述べたり、論議したりしてゐた。
- 二一、——さうして、天文學はアブラハムがバビロニヤと埃及に、又哲學はモーゼが希臘人に教へてやつたものだなど、云つてゐた。
- 二二、——そこへエルカナといふ人もやつて来た。イスラエルの大博士だ。
- 二三、——このエルカナが云つてゐた。『昔、方圖のない埃及人がゐた。續いて小刻みな希臘人がゐ

た。

二四、——その双方の神々がゴチャまぜになつてゐる。

二五、——神々は詩人の創作だ。詩人は物が半分しきや分らないで、真理のまはりをたゞぐる／＼廻つてゐるにすぎないものだ。

二六、——物事の上つ面で、さういふ連中のやつてゐることは文雅典麗の遊戯なのだ。かれ等は表面の微笑や目前の收獲に満足して、くだらなく納つてゐる。かれ等は又雄辯術や作詩法で、又ほがらかなお面をかぶつて、自分達の空虚を閉塞してゐる。

二七、——しかも、さうしてゐる間に、人道は寸断され人間のからだは苦しみつゞけ、虐げられつゞけてゐるのだ。

二八、——ソクラテスとよぶ一賢者の人道主義の上へ喜色満面の一宇宙を建立したプラトンがゐた。

二九、——けれどもかれはさうした宇宙をば天の圖面中へ造つて、人生の圖面中へ造らなかつた。

三〇、——希臘人の姿の上へ切抜いた人間然とした羅馬人がゐた。が、あんまりぐるりを切抜きすぎたので、かれ等はたゞ法律と實務のお大名にすぎない。

三一、——併しイスラエルの神様がある。イスラエルの神こそ、地上に於ける人間正義そのものだ。』

三二、——ところで、わたしの父母はわたしの行衛をさがしてゐた。わたしは父母の出て行つた時、お寺の中へとつてかへして、いつまでも博士達の云ふ事をきいてゐた。

三三、——『あつちへ行つたんですよ。』と、母が父に云ふと、『ちやア、行つて見よう。』と父は答へて、二人がお寺へ戻り、荷物小脇に中へはいつた時は、恰も謹聴してゐるわたしを見つけて、律師司祭の連中が、わたしに問をかけ、

三四、——さうしてわたしが答へてゐた矢先であつた。

三五、——『ぶツ倒さなけりやならん偶像は到るところにあります。』

三六、——連中はわたしにきいた。『若しこれを拜みあれを拜めと云はれたら？……』

三七、——わたしは云つた。『いやだと答へます。』

三八、——『が、拜むに足るものだつたら？』

三九、——『わたしはどこまでもいやだと答へます。さうして置いて、それから拜むに足るものを探します。』

四〇、——すると、エルカナがわたしのことをかう云つた。『この子供にはすばらしいイスラエル魂がある。』

四一、——この子供の心は常に根柢から改造の必要を感じてゐるからだ。
 四二、——わたしがすでにわたし自身について考へてゐた言葉が、今この子供の聲となつて寺中に響きわたつたのだ。

四三、——かうした言葉は永遠不朽に力がある。

四四、——わたしの行願は常にそこから踏みいだす第一歩でありたいと思ふ。かのアブラハムの堂々たる態度のやうに。』

四五、——かへり道に、エフラタ、すなはちベレヘムへ行く道のある四つ辻で、わたしは心ゆくかぎり日光を浴びた。で、思つた。『目の法樂ができる人生は美しい。』

四六、——が、盲人がひとり通つたので、わたしはそんな事を喜んだのを後悔した。

四七、——『氣の毒な人、お前さん何がつらい？』

四八、——『だまりこくツてゐる事だね。人の笑聲がいつも鳥のやうにツイと目の前をすりぬけて行く事だね。』

四九、——わたしは訊いて見た。『お前さんどうしてほしい？』

五〇、——盲人はわたしに答へた。『お前にニツコリしてもらひたいよ。』

五一、——かれはクワツと日に照された額をあげた。わたしはわたし以上に光を受してゐるもの、

前で顛へた。

五二、——さうしてなぜ正義を見た者は最も多く迫害を被つた人達や劣敗者達であるかといふ理由がわかつた。

五三、——地を蹂躪する一切の寺院は被害者を種にして光明の寺院をつくる。

五四、——正義者は負傷者だ。

五五、——そこにゐて、目を開いて、この男を見ながら、そんな事は一向に見なかつた人達があつた。

五六、——かへり道のもつと先で、わたくしはくたびれたので、下を向いて了つた。

五七、——犠牲を見た結果だ。

五八、——屠殺、焼けたゞれた臓腑、ダラ／＼とふすぼる脂肪、そんなものが目に残つて、氣持がわるくなつた。

五九、——あんな蒙昧な血煙をあげたところで何の祈禱になる？

六〇、——あんなに肉をひツちぎつて、生命はどうなるのだ？

六一、——そこでもまた、人々はそいつを眺めてゐたものだ。この人達の目は、つぶれるためについてゐたわけだ。

六二、——息づまつた、猿轡をはめられた、敗北者のイスラエルは、それだからしてのべつ動物をぶち殺してるといふわけか？

六三、——要するに血腥い事とするためか？

六四、——しかもそんな事は大きくして氣にならないと、永遠の神様が仰しやつたものだ。

六五、——犠牲とは自分自身を献げることだ。

六六、——眞理の血潮を流す時に、

六七、——心中の象徴をグサリと刺して。

第八章

一、——日から日、週から週、又年から年。

二、——生の喜びがまづまアトン／＼と朝夕の調子を合はす。

三、——が、その朝夕は一つ／＼過去の中へ落ちてゆく。人はそゞろに過ぎし日を指をりかぞへる。が、数字は死の言葉にすぎない。

四、——ありし事どもは動かしがたい。氷結する。神といへども光つた稻妻の兩極は引放し得ま

五、——来る夜も／＼、一切のありし日の上へ／＼とかさなる。で、それをしまつて置く。われわれはたゞ普遍的なる最後の一日或は一夜にすぎない。又傳來の山積にすぎない。

六、——恰もかのシオンの岡に散亂して、あらかじめ預言者の示した天災をまぬがれた者達のやうに。

七、——さうして最後の日は、夜間盜賊の如く來たるであらう。

八、——わたしは仕事に没頭してゐる。わたしは人のために品物をこしらへてゐる。

九、——仕事場の壁には匂ひの高い材木の厚板が立てかけてある。

一〇、——わたしはその皮を剥いだ肌のカツチリした木口がすきだ。又その一枚々々に異つた味がすきだ。

一一、——開いた戸口から往來の人が見える。と、それが大空の白色中へ吸ひ込まれて、ポウツと消える。

一二、——お婆さんが胡坐かいて糸を繰つてゐる。

一三、——お婆さんの手は二疋の蜘蛛だ。

一四、——どんな小さな仕事でも小さくない。

一五、——仕事中は決して怒つたりあせつたりしてはいけない。でないと、手がフラ／＼して、氣

が落つかない。良工は落ちつきはらつたものだ。板と道具とはお互に喧嘩させず、仲よく話でもさせるやうにしむけなけりやいけない。で、何かできた時にはこれでいゝと思ふ。さうしてできあがつた物そのものが報酬だ。

一六、——わたしは人々の家へ、机だとか箱だとか寝臺だとか、さうした嵩ばつた品物を運んで行つた。さうして人いきれでおのがじゞに生暖かくなつてゐる家の中へはいつた。さうして一軒毎に、われわれ人間の似たり異つたりする姿を見た。

一七、——と、革命を待つ一切の人々が、その下心でひそかに待つ銘々の何物かゝわたしには讀めた。すなはち幸福だ。もつとハツキリ云ふと、その一つを他の一つでくるんだ二個の幸福が、かれ等にはあるわけだ。

一八、——が、かれ等は幸福といふものをば自分達の目先にチラついた完全な代物だと思つてゐる。

一九、——『もう一人子供ができたら！』と一人が云ふ。

二〇、——子供のそばへもつて行くと、一切のものはみんな古い。みんな殺風景だ。その子供に母が云ふ。『お前はよその子供とはまるで別物だよ。』(そこが女親の天真だ)が、併しかの女は母性愛といふものゝはかなさは承知してゐる。『もうぢきこの子はわたしの子ぢやなくなるだらう。それでもわたしはこの子の母親なのだ。』

二一、——『この畑を手に入れたら！』と又一人が云ふ。そこでかれ等が云ふ。『さうすりやわたしは幸福になる。』

二二、——かうした偶像、すなはち幸福にあやからうとして、かれ等は待ちこがれてゐる。キミトノとして待つてゐる。しかもその間に幸福はつツツと通りすぎてゐる。

二三、——幸福は人の考へるやうに一色で出来てゐるものではなくて、幸と不幸とのまさり物だからだ。

二四、——そのまさり物がわれ／＼のうちにある。

二五、——一體、望むといふことは、もたすにもつことなんだから、

二六、——もつといふことは、もう望まないことになる。

二七、——といふのは希望は不幸の微笑だからだ。

二八、——泣くものは幸福だ。かれ等は慰められるだらうから。

二九、——慰められるものは不幸だ。かれ等はもう泣けまいから。

三〇、——併し誘惑された覺ある者は王冠に用心する。澤山愛した不幸者は幸福だ！

三一、——かつて盲人の心中に光明の天真があつた。

五四、——われ／＼二人がスツ裸になつて、すこしも耻しくなくなる日には、われ／＼の天國へ神様が来てゐて下さるとか云ふぢやないか？ 肉慾を知るのは耻づかしい。不慾を知らぬのは耻づかしい。

五五、——さうしてわたしは死んでしまつた戀の眼でお前を見るのがはづかしい。

五六、——お前はお前で別だからだ。』

五七、——かくして二人がさがしあひ、かくして二人が一緒になつた次第だ。で、一緒になつてゐながら、遠くかけ離れて了つたわれ／＼二人なのだ。

五八、——しかも二人は石上に腰かけてゐたものだ。と、わたしは村に立ちはだかる大木を見た。又その少し上に星が一つ見えた。

五九、——物のあはれは刃の如くそこで一しほ深くなる、そこでわたしが云つた。『お前の魂の血なんだよ。』と。

六〇、——わたしはかの女の指の間から絶望したその眼を見た。

六一、——わたしはかの女の顔の上の手を拂ひのけた。

六二、——さうしてわたしはかの女の心に觸れるためにその口の方へわたしの口をもつて行つた。

六三、——すると、かの女がわたしに云つた。ハガルが神に云つたやうに。『あんたはわたしを見て

下さつた生神様よ。

六四、——かの女はまた云つた。砂漠の中のハガルのやうに。

六五、——『わたしを見て下さつたお方が、わたしにだつて見えないでゐませうか？』

六六、——赤裸々なかの女の顔の上の、赤裸々な何物かであつた唇が云つた。

六七、——『あんたは寛大ね。』

六八、——『わたしがさうなんぢやない。われ／＼人間がさうなんだよ。』

第九章

一、——そのころわたしの父が死んだ。

二、——臨終の時、父は『どうしたんだ？』と訊いた。母親達のやうに單純な周圍の人々が、『なんでもありません。』と答へた。

三、——そこに父のゐた一瞬間があつた。それから、もう何もなくなつてゐたその次の瞬間があつた。そこに、からツぽの物がその胸にはいり、その眼が硬ばつた線をつくり、又その顔が白粉のやうに白くなつた、思ひもかけぬ一瞬間があつた。時間の停止がさつそくこの寢臺へ引越して來たわけだ。

- 四、——お前はもうゐないものなのだ、どうかしてわたしは思ひたい！
- 五、——埋葬の翌日、母がわたしに云つた『お父さんをお墓へ納めた日も、わたしの目がつぶれて了つた日も、もうきのうになつて了つたねえ。』
- 六、——母の苦悶は太息と洩れた。深い／＼忍び音と洩れた。さうしてわたし達は一人の人間に對して身も世もあらぬ思ひをした。
- 七、——母にとつても、わたしにとつても血肉の同胞の人だつた。
- 八、——それがわたし達とこの人とを結びつける赤繩だつたわけだ。
- 九、——わたし達の奥の方には、父の生命の喜びや輝きや、又その聲の陽氣な響などが、ビタリとコビリついてゐた。わたし達はそれはし／＼を偲んで嬉しがつた。と、亡父の顔や唇がわたし達の頭の中で動いてゐた。
- 一〇、——朦朧たる故人の面影をば、わたしは轟と抱きしめて添寝した。わたしは父の父親になつた。

一一、——やがて實をもつた庭園の木々は、残らず花が咲いたけれど、悉く喪中にあつた。

一二、——生き残つてゐるわたしのお蔭で。

一三、——父はもはや外部に於ける何物でもなかつた。ところが、わたしといふものは一個の死で

あつた。又母は他の一個の死であつた。死はその人自身から出て諸君のうちへ來たる何びとかだ。生者の内部へ忍び込まぬ死者はない。

一四、——生物を殺し生物を生きかへらせるのはわれ／＼だ。

一五、——そこで死を付度しつゝ、わたしが云つた『かれぢやない。わたしだ。』

一六、——夕暮、わたしは群集のしかばね、すなはち墓地のうらがなしいところへ行つた。

一七、——あゝ、荒涼又荒涼！

一八、——かうした墓地の陰惨な黄昏のたゞ中に、わたしは二人の孤兒を見た。青年が一人、少女が一人、かれ等はそこで出會つたので、二人とも嬉々と笑つてゐた。このいたいけな一對はその足首でこの世の暗い過去を讚美してゐた。地下に面影を變じ、既に見る目を持たずなつたその一切の群集物に、二人はウツトリと魅せられてゐた。互に手と手を握りしめてゐたからだ。

一九、——かれ等の内面の賠償によつて、

二〇、——誰かの外面の形體なる、その青白い墓石の上で、二人は互にもたれ合つてゐた。

二一、——他の人々には不幸をもたらすものが、かれ等には幸福をもたらしてゐた。それは二人がニコ／＼してたのでわかる。

二二、——森羅萬象の懷に、この二つのはかない影は寂寥を點じてゐた。

二三、——かの石上に腰うちかけて——村にはだかる大木とそのすこし上に星影を一つ見た時の——わたしは戀と死について考へた瞬間こそ、さうしてそれは誰の心にも去來するものだといふ瞬間こそ、わたしの生涯の一大轉機であつた。

二四、——さやかに人の動搖してゐた黒闇々裡、一道の光明がわたしにだけ閃いた。

二五、——眞理は人の考へるそれとは反對の方向を指す。

二六、——眞理は神からわれ／＼へは來ない。われ／＼の方から神へ往く。

二七、——眞理の指す方向はそこにある。

二八、——又靈は下界から來たる。

二九、——もはや彼岸から發足してはならぬ。われ／＼自身から發足しなかつた事は存在しない。われ／＼は天からは落ちぬ。立ちあがるのがわれ／＼だ。

第十章

一、——一人きりでは誰もゐたゝまれない。

二、——わたしの運命のこの轉機に、或日、日光を浴びた、葉の茂つた棕櫚の木の下で、世にも嬉しげな顔したプリスキラがわたしの前へ現はれた。

三、——わたしはかの女を擇んだ。なぜ？ その『なぜ？』をば、わたしは世の中で最も簡単に云へる人間だ。わたしは好きな人が好きだ。一切は自我から來たるのか？ 愛情すら？

四、——わたしはお前が好きだ。わたしはお前を美しくする。

五、——わたしの喜びの名であつた女が、わたしを愛してゐてくれたものと、わたしは思つた。物思はしげな唇で、かの女がわたしにさう云つてゐたからだ。ところが、かの女はわたしの友達だと稱するエキエルをば人知れず愛してゐたものだ。或日、二人はベテサラへ逃げて了つた。

六、——かの女は行つて了つた。が、かの女は爰にゐる。かの女はあすこにゐる。到るところにかの女がゐるのはかの女のゐない半面だ。

七、——かの女は行つて了つた。さうしてわたしはもうかの女から離れることができない。

八、——わたしを裏切つた二人の者どもをば、『醜惡な兩頭の妖怪』だと、わたしは憎み憤つた。

九、——さうしてわたしは山の中へ行つた。が、行つたのは、それが心ならずもベテサラの近傍であつた。

一〇、——ところが、ある日、わたしは唯ある岩上から、プリスキラとエキエルの抱き合つたからだを見つけた。

一一、——二人は一緒に石上へ落ちて心中したものだ。二人はそこで永遠に冷たくなつてゐた。二

人の足はこの世の道の行きどまりに、ビタリと釘づけにされてゐたけれど、二人にはまだ戀の接吻をかはす力はあつた。

一一、——永眠せんとする前に。

一二、——半ば開いたその眼はもはや二個の眞珠にすぎなかつたけれど、相手のからだにたく必死と纏りついてゐるところの、冷えきつた中にもまだ充分にぬくもりのあるらしいプリスキラの姿を見ることは、わたしは身を切らるゝほどつらかつた。

一三、——それが、二人の赤裸々なるわたしに對する憎惡のやうに思はれた。

一四、——が、二人のそばまで降りて行つて見たところ、二人ともまだ息があつて、死んでゐなかつたことがわかつた。

一五、——と、わたしの咽喉が嬉し泣いた。「生きてゐる！」

一六、——一個の生物を愛することは、その生物が生きてゐてほしいことだ。

一七、——百媚生ずるその顔をふり向けて、よしんばかの女がある他の一人のために生きるにきまりきつてゐるにしても。

一八、——一身体となつてゐた二人を介抱しつゝあつた際、わたし自身にかく一轉化が來た。

一九、——わたしは戀愛の事どもに大悟徹底した。今やその上に超越して了つたわけだ。

二〇、——さういふ事どもはわたしにはもうない。

二一、——男と女とが事とする、あらゆるさうした半内面的の戦闘がない。

二二、——同様にまた復讐がない。わたしにも、誰にも。苦しみはする。憎みはする。復讐はしない。さうしてたゞそれを知りぬくといふ事によつてのみ、お前はお前自身の苦悶に復讐する。

二三、——と、そこで意を決して、わたしはかの女から遠ざかりはじめる。一步々々。

二四、——(わたしは動きたくなかつた。)

二五、——二人をそつとそのまゝにして置いて、わたしは自分の家へ歸つた。田圃の間でも、又家々の地帯の中でも、わたしは悩みつかれてゐた不幸者達を到るところに見た。

二六、——みんながみんな悩みつかれてゐたのではなかつた。たゞさうした不幸者だけをわたしが見たのだ。

二七、——さうした不幸者は今はじまつてゝはなかつた。又わざ／＼わたしの行く手に立ち塞つたわけでもなかつた。が、以前には、さうした人々をわたしは碌々見ずにゐたものだ。

二八、——併しわたしはわたし自身になつた。

二九、——わたしの心が裂けたからだ。

三〇、——さうして眞剣に人間達にわたしが面と向つたのだ。

三二、——富める者。氣樂な者。小さいな着物に、みづ／＼した唇に飽ける者。おのれ達の腕先へ他人の手首をとりつけて、労働を刈りとる者。わたしをとりまいて、猫撫聲で『われ／＼は正しい』といふ者。

三三、——わたしはかれ等を一人々々ズラリツと見まはして云つた。『爰で裸になつても耻しくない魂はどれた？』

三四、——それから又そこに日光の下を歩いてゐるすべてその他の人々。

三五、——かれ等は絶叫する。が、併し又コソ／＼とお互に話してゐる。

三六、——かれ等は泣く。併し、その涙がゆたかでない。

三七、——かれ等の悲歎は大人の腕に泣く赤兒のそれと大差はない。

三八、——又、『僕等は唄ふ。君等は唄はぬ。』と云つてゐる町の子供等のやうだ。

三九、——土地の形を變ずるために、畠中に立つてその肩を上下しつゝあるところの、疲勞に苦しむ者、労働に咒はれたる者が、わたしに云つてゐた。『昔、わたしは土地に餓ゑてゐたものだけれど、今日となると、土地はわたしの不幸の種だ。土地が不正だからだ。』

四〇、——また雨天晴天をきめるのに、天も正しくない。』

四一、——かれは純だ。かれは正しかつた。さうしてこの純なる者、正しき者は、カインの言葉を

云ふために口を開いた。『わたしの罰はたへきれぬほど大きい。』かれは又カインのやうに言つた。『併し、わたしは否でも應でも生きて行かせられる極印つきだ。』

四二、——『だから』、とかれが云つた。『わたしは悪人がもう誰もいぢめないお墓の中へ行きたいのだ。』

四三、——が、毎朝永遠の神に罰せられてゐる、死ぬにきまつた人間といふものは何なのだ？

四四、——主なる神様、思ひきつて申します。人間の保存者であるわたくしを、あなたはどうしようといふのです？ 毎日、夕方になると、わたしの腕はくだ／＼です。

四五、——行く先の寒がつてゐる人間に、なんだつて燈りをくれるんです？』

四六、——又竈の石の上に、ひとりぼつちでゐる、もう一人が云つた。『わたしはあんまりくたびれて、パンをたべる事さへ忘れて了つた。わたしはたゞもう泣き叫びたくてたまらない。』

四七、——すると、又もう一人が、『人は飲み食ひさへできたらと思ふだらうが、それができないのだ。又飲み食ひなんてどうでもいゝと思ふ日もあるだらうが、それができないのだ。わたしの夢は頭から腹へ落ちて了つた。』

四八、——この女乞食が、『饅頭粉がチョツピリある。』とわたしに云つた。『それで菓子パンを二つこしらへろ。そして一つおれにくれ。』と、わたしは云つた。『ウン』と乞食が云つた。『それを食べて、わ

し等は死ぬんだらう。』と乞食が云つた。この女乞食はそんな事を思つて又雨のためにブル／＼顛へてゐた。

四九、——かれ等は働いて、へと／＼になつてゐる。毎日々々働いては、女達のやうに物を産んでゐる。毎日々々飢餓に瀕してゐる。地の軍隊には生きる時がない。動物同然だ。

五〇、——悄然としてかれ等は生から死へ立ち退いてゆく。

五一、——聖書の中で、テマン人のエリバズが悪人について云つた言葉は、的確に労働者等にあてはまる。『恐ろしい絶叫が耳にある。』パンはどこだ？』と云ひながら、東西南北に狂奔して、パンを求め。さうしてむさくろしい町々をば破屋々々と住みあるく。ト、のつまりは悪逆無道の王の許へと志すことになる。』

五二、——他人の富には目がくらむ。かれ等を苦しめるものはそれだ。

五三、——そこで吉例の如く地上の亡者共にはお定りの戦争といふものがある。

五四、——そこで成功のため富者の議決する法則と又富者の先例とは、貧者の頭上に又貧者同志の間にまで、

五五、——戦争を天降らす。

五六、——天降りの権力には眞理の方針がない。さう云つた事どもはこの地上ではすべて出来そこ

なつてゐる。

五七、——無数の小人は一個の巨人なんだから、ほとんど人類の全部であるところの貧者は即ち地の富だ。

五八、——従つてパンは貧者のパンだ。パンは天からは降らない。地から芽をふく——貧者の手の中に。

五九、——かくしてわたしは貧者の責罰を見た。

六〇、——貧者の兩手は永遠に刑の宣告を受けてゐる。

六一、——突如貧者等を一個のものとして見ると、まったく美しい。

六二、——その場合、貧者は美だ。美でない貧が。

六三、——心あるものどもは、やがて××のあることを知つてゐた。又その××後、一切物は一切人に歸し、そこに主人も奴隸もなくなることを知つてゐた。さうしてかれ等の顔は待つてゐた。かれ等の手が藻掻き苦しんでゐる一方だ。

六四、——全く手當ができないために死にかゝつてゐた子供等の親が、『子供等の死なゝいうちに××は来るでせうか？』とわたしにたづねた。畢竟そこだ。

六五、——××は子供等を見殺しにしないために来るのだ。答へ得るのはそれだけだ。××は一個

の偶像ぢやない。人々だ。

六六、——さう云つて、自ら争闘の上に超越してゐたので、わたしはいつのまにか慈悲憐愍の天日になづみきつて了つた。と、わたしは物の一緒にかたまつて動く姿を見た。

六七、——貪慾と戦争の旗章の下にある諸物だ。

六八、——『正しき何事もかなせ。』と、われとわが心に命じた木分から遠ざかつて、わたしはながく時を空費して了つた。

六九、——月日はズン／＼過去つてゐるのだから、ぐづ／＼してはゐられない。

七〇、——利己主義の貪慾道を辿りつゝ、わたしは爰まで来たものだ。で、自分の心にきいて見た。『どの道を通つたら、わたしはわが家へ戻れるかしらん？』どつちへ行つたらいいものか、わたしにはわからなかつたからだ。

七一、——道が二つある。宿命が二つある。各個人のそれと全人間のそれとだ。

七二、——各個人のもそれはかうだ。各個人が戀のため又死のために、その心で又その肉躰で、喜んだり苦しんだりする宿命だ。さうしてないものねだりが欲望の常だから、欲望は決してほしいものが得られない。各個人のうちにある無限に深い傷口はそれだ。もつて生れた各個人の墮落はそれだ。この道の上に立つと、一切は空だ。従つて各個人に墮はれるものとは、たゞかれ自身の情慾のみだ。

七三、——生者は自身に伏在せる苦悶を殺すわけにはゆかない。かれはたゞ往生ができるだけだ。

七四、——それから全人間の宿命は、上層の人々の害悪を被ることだ。この宿命では不屈を學ばなければならぬ。さうしてこの不屈事業は連綿として續くものだ。君、孤立の人よ。君の運命は死を一切の終りとするところのそれだ。全人間の運命は死はものゝ數でないところのそれだ。

七五、——苦痛の持主なる無数の民衆は同様に不朽の持主だ。よし殺されても、かれはなほ叫ぶことができる。なほ立上ることができぬ。

七六、——で、物のかうした進轉にあつては、『一切は空だ。』といふわけにはゆかない。今云つた最初の宿命が、若しわれ／＼を征服するならば、われ／＼はわれ／＼の一致團結によつて、第二の宿命を征服する。狂人はその身を肉の坂路にまかせて降る。狂人の心は左方にあるが、賢者の心は右方にある。

七七、——なすべき筈の事業は行はれ得べきものだ。

七八、——さうして革命は天から地へは赴かぬ。却つて地から天へ赴くであらう。

七九、——併しながら、先驅して道を開き、衆人をして本來自然の生存を遂げしめんと志す人々は、

八〇、——その人々自身本來自然の生存は遂げてゐない。

- 八一、——かれ等は呪はれてゐる。
- 八二、——かれ等はさまよへる者に自分達の道を訊く。又布施を乞食に求める。
- 八三、——有るものを凝視すると同時に、無いものを希望するがゆゑに、かれ等はピツコをひく。
- 八四、——さうしてかれ等は自らすると稱してゐる事を自らしてゐない。
- 八五、——かれ等は云ふ。『法律の基礎となるべきは愛でない。正義が基礎だ。何となれば愛は個人から個人への問題であつて、各個人から全人間へのそれではないからだ。』と。
- 八六、——併しながら、かれ等がそれを集會の規則にはなしかねてゐるところの、その一切人間にとつて柔味のある愛は、かれ等各自の心中にくつついてゐる。
- 八七、——かれ等は他人の運命をばかれ等自身の運命中に置く。狂愚の如く偉大な事だ。
- 八八、——千萬無量のかうした戒律をば、わたしはわたしの内面で結合する。
- 八九、——さうしてあらゆる未知の人々の肖像で、わたしはわたしの良心を一杯にする。さうしてわたしと關係のない事に立ちまじる。
- 九〇、——わたしは全人間諸君を愛する。現存の人々でも、永遠にゐない人々でも。
- 九一、——壁と燈りとの一部の上で、わたしはボツカリ浮上るわたしの影を見た。
- 九二、——黒く石上に錯綜した、おどろに亂れたわたしの頭髮、又その顚や肩の尖端。

- 九三、——貧乏な一労働者——わたしはそれツきりのものだ。
- 九四、——併し勞苦や責罰の事までも考へる一労働者なのだ。
- 九五、——わたしは労働者達の労働者だ。
- 九六、——星がまだ青いろ衣を纏ふほどの夕まぐれ、都會の大夏高樓と田圃とが、同時にわたしの眼前に迫る。われ／＼の祖先の大牧人が、その籠を示したとほり、わたしはこの一切民衆の重荷を擔ふであらう。さうして重すぎるとは云ふまい。
- 九七、——弱い人達のためを思つて、人は弱くなる。餓える人達のためを思つて、人は餓える。
- 九八、——聲中の聲、叫中の叫だ。
- 九九、——わたしだけこの戒を守らう。
- 一〇〇、——かれ等に守れとわたしはたのまぬ。
- 一〇一、——かれ等にできないことはたのまぬ。

第十一章

- 一、——風吹く一夜、わたしはエルサレムの或家に泊つてゐた。
- 二、——隻脚がきかなかつたため、ヒルキヤはわたしのそばで土下座してゐた。おどろのない貧

だ。

- 三、——卓上に燈りが一つ、暗を奪つて部屋の中央に輝いてゐた。
- 四、——パリサイのニコデモとよぶ猶太人の宰つかさの一人が、その夜わたしに逢ひに来た。
- 五、——夜ひそかに来たものだ。勇敢な人で、風も闇路も眼中になかつたが、世人の意見を屁とも思はぬほど勇敢でもなかつた。
- 六、——外套をふくらがした一陣の強風と共に、開いた扉がかれのうしろで閉まつた時、又はいつて来たとなんに吹きまくられた燭臺の焔が、再びジツと納まつた時、まづかれのきり出した言葉はかうであつた。『先生、先生……』

七、——なんとしたものでせう？』

八、——わたしは答へた。『われ／＼自身へ立還る時が来たのだ。内に籠つてゐるものを見つけだす時が来たのだ。』

九、——眞理は内部のものであつて、外部のものではないからだ。

一〇、——併しながら、暗中に云はれる事は明中で聴かれるであらう。

一一、——が、ほんとお前に云ふが、人間は改めて生まれないと、天國へは這入れないよ。』

一二、——ニコデモがわたしに云つた。『年寄になつてから、どうして人間が生れるのです？ 母親

の胎内へ戻らなけりやならんのですか？』

一三、——すると、ヒルキヤがわたしのそばへすり寄つて云つた。『まつたくだ。どうしてだ？』

一四、——わたしが云つた。『その事は、學者もたゞ人も、銘々それを自分の身の上でつきとめたらわかる筈だ。』

一五、——すなはち、靈でないものから靈を解放することだ。

一六、——聰明と正義とに基づいて。

一七、——といふのは、人は空漠の中で不羈放縱の觀念と言語とを肆まにする結果、互に錯雜して遂に歸するところを知らぬ、あまたの想像世界をば、實相の上へ築きあげて了ふからだ。』

一八、——ニコデモが云つた。『さうすると、われ／＼以外には本當の物はないのですか？』

一九、——『左様。われ／＼の内面にある』

二〇、——正義の大繩墨にかゝらぬものは、すべて眞でない。すべて美でない。すべて偉大でない。

二一、——エツサイの幹枝から出た永遠の靈について、イザヤが云つたことがある。さうしてそれは賢明と智能との靈であり、謀略と行動との靈であり、學問と正義との靈であると云つた。試に靈の形を見ればわかる。靈の形は深刻な大繩墨で描かれてゐる。この繩墨こそ森羅萬象の足場だ。さうし

て人間的天使の輪廓が赫灼として仰がれるのもその繩墨だ。正義は四隣に獅子吼されなければならぬ。人間は正義に還らなければならぬ。

二二、——そこで實相と似而非實相とを諸物の中で截断する必要がある。

二三、——思想が眞物の奇蹟たるために必要だ。

二四、——ニコデモといふお前の全部は、撞着する心象で一杯だ。しかもその諸心象が表面だけ都合して、實はあらゆる形で互に撞斥しあつてゐる事はわからぬまでも、お前はまだ一度もさうした諸心象のどんぞこまでつきつめて考へたことがないのだ。又それをお前自身の力で改造したこともないのだ。それだから撞着するのだ。

二五、——假相にも實相にも、又悪魔的のものにも神的のものにも、又死物にも生物にも、お前は同程度の信頼を寄せてゐる。

二六、——だからお前は絶體絶命の諸問題をばデタラメに解決してデタラメに納つてゐる。さうして鼻元だけでお先まつくらに生きてゐる。

二七、——お前の言葉は石上に一寸生へてすぐ枯れる草の種だ。そこで、お前はぐづくしてゐる。ばらばらになつてゐる。グラついてゐる。さうして時の有力者が、『神が』とか、『わが民族が』とか、『正當なる権利が』とか云ふと、お前は、『結構です。それで十分です。』と答へる。お前は憐むべきウ

ソツキだ。

二八、——お前は烏合の徒だ。』

二九、——ニコデモは、『そんな事が？』など、云つてゐた。卓上にチラ／＼して、このジタバタする猶太人の頬や眼を照らしてゐた燈光が、デコボコの壁へもつて行つて、黒い天使の翼のやうなその影をうつしてゐた。と、風の音が四壁を突抜けて来て、その上で喘いでゐた。

三〇、——かれ。『風の通るのが、きこえますね。』

三一、——わたし。『左様。だが、どこから吹いて来るのか人にはわからない。』

三二、——そこで、わたしは聲を勵まして云つた。『靈が、われ／＼自身の中にあると云つたのは、われ／＼自身の中で垣をこしらへると云つたのぢやない。われ／＼自身の中で靈がはじまると云つたのだ。』

三三、——靈を解放するためには、即ち、人間中に世間を又世間中に人間を理解するためには、一切の偶像から脱却しなければならぬ。

三四、——偶像は死物だからだ。

三五、——さうして靈は永遠の生命だ。

三六、——人々に眞理を語れば人々には自我を離れて天に生まれ、天中に物いひ、天中に歩み、さ

うして本来の面目を發揮する。

五六

三七、——生きなければならん。』

三八、——かれが云つた。『世間は世間です。生きなければなりません。』

三九、——のみならず、かのシラス人が云つてゐるぢやありませんか？「賢明は人を恐怖と憂患に導き、又その修養によつて人苦しむ」だなんて。』と、ニコデモが云つた。

四〇、——わたしが云つた。『悪魔には悪魔の形がない。』

四一、——が、その形のない事がなほわるい。』

四二、——この世では、盲人が盲人の手引きすると、みんな一緒に穴の中へ落ちて了ふ。』

四三、——小さな物もそばへ置くと、大きな物より大きいわけだ。』

四四、——それを偶像から引ずり出して魂を救つた者は天國では大きいのだ。』

四五、——お前は混乱と暗黒の中へとび込んでゐる。かためて同時に一切を見ないものは溺死者だ。お前は人生を見ずに人生の縁を見てゐる。お前は存命中だといふはなしだが、お前は死んでゐる。』

四六、——墓の中にゐる者が天の言葉をきく日は來た。』

四七、——わたしのいふ事がわかるものは、死から生へ通過したのだ。』

四八、——可憐なヒルキヤが片腕をあげて云つた。『お前の云ふことは有難い。』

四九、——ハザリヤだの、パテシバだの、ウリヤの子だのが、昔やつて見せてくれたとほりにして、墓の中へ這入つたもの達の中からだが、つまり極樂で生まれ變るといふわけなんだからなア。』

五〇、——『さうぢやない、わたしはからだのことを云つてゐるのぢやない。』

五一、——わたしは命のことを云つてゐるのだ。』

五二、——からだの死を見ると、人はほとんど皆無だと思ふ。併し死を皆無にすることは、命を皆無にすることだ。つまり、生者を生命の外へ誘き出すことだ。』

五三、——かれはまた云つた。『わたし等の命は不朽の中の一筋の光線にすぎないよ。』

五四、——わたしもまた云つた。『不朽の方が命の中の一光線にすぎないのだ。』

五五、——『それでも、見なさい。光線は、あのとほり、あかりがチョツピリあるだけで、まはりに影が澤山ある。』と、かれが云つた。』

五六、——『さうぢやない。影はあるのぢやない。お前が影と云つてゐるのは、そりやお前に見えない光なのだ。夜が來ると、世界が變り、黒色になるといふのはまちがつてゐる。影なんてない。たゞ光が多いか少ないかだけだ。沈黙といふものもない。聲の通る空間だけはチャンとある。』

五七、——又未知といふものはない。已知がすくないだけだ。』

五八、——又死といふものがない。われ／＼だけは歴々とある。』

五七

五九、——わたしと共にゐて、君等の宇宙眼を開きたまへ。死者をしてその死を葬らしめよだ。」
 六〇、——ニデモが云つた。「生まれかはつたらわかりさうな事が、何もかもわかつて了ふのは、こんな時のことですよ。」

六一、——かれはわたしに訊ねた。「死の死たる所以をば悉く一氣に示して、さうした偉大なるやり直しをわれ／＼に勧めて下さるお前さんといふ方は、一體何者なんですか？」

六二、——「わたしは第一番に死人から生まれた者だ。」

六三、——すなはち、内面の世界をつくるためにやつて来たわけだ。」

第十二章

一、——町中を歩いてゐると、青年が一人、わたしのそばへ来て質問した。

二、——「先生、わたくしは眞理と實相との二つについて人がいろ／＼に云ふのをききました。」

三、——わたしはかれに答へた。「われ／＼は常にその二つの間にある。一つは内面にある。一つは外面にある。われ／＼の歩いてゐるこの町を見たまへ。町はわれ／＼の行く先へ／＼と狭くなるやうだし、家はだん／＼小さくなるやうに見える。ところが、近づくに従つて、町は依然として廣いし、家はやつぱり大きいのだ。」

四、——そこで町の姿が、二タ通り眼中に映る。狭くなる町と、それから依然として廣い町とだ。」
 五、——青年は急いで云つた。「あなたの仰つしやつた、そのあの方の、依然として廣い方だけが本物です。」

六、——「さう。だが、もう一つの方は實物だ。」

七、——君は眞理の一端にこだはつてゐはせぬか？」

八、——經驗的眞と學理的眞には、即ち見えるものと見えないものとは、異つた二つの物ぢやない。存在するものゝ両面だ。」

九、——それが一個の輪であるにも拘らず、内で見ると外で見ると、その形が異つて見えるやうなものだ。」

一〇、——恰も地上からその影を拾つては、それでその身をくるんだやうな、日光の中で眼瞼まで黒く装つた、一老婦人の近づくのを、青年はわたしに指示しながら、一步は一步毎にはれ／＼とした顔つきで云つた。「あの婦人は大きくなります。あすここでは小さく、ここでは中位に、こゝでは大きいのです。つまりそれですね。」

一一、——又われ／＼が歩いたからして、あの縦横のキラ／＼する線で家と家とが戯れたものです。」

- 一一二、——わたしはその通りだと答へた。さうして云つた。『真理の両端を不和に見た場合には、君はいつも思ひちがへしてゐるのだ。』
- 一一三、——真理の両端は離るべからざるものだからだ。
- 一一四、——爛々たる光と正しい線を求めたまへ。さうすればその餘の一切はおのづから加はつて来る。その餘の一切とは心ゆく確實味のことだ。
- 一一五、——目をつぶると、君に一個の世界のつくれる事はまことに摩訶不思議だが、その美しいのはその世界が現實のそれであつた場合にかぎる。
- 一一六、——従つて眞と實とを、即ち靈と生命とを引離して楽しんではいけない。
- 一一七、——何となればいかなる場合でも唯一の實相しきやないからだ。又唯一の眞理しきやないからだ。即ち同一であつて同一ではないものだ。
- 一一八、——一小實物なしに一小觀念は決してあつてはならぬ、
- 一一九、——一大實物なしに一大觀念は決してあつてはならぬ。
- 一二〇、——實相と眞理とを引離すと、實相はめくらになる。眞理は氣ちがひになる。
- 一二一、——頭の内部が、空虚中で創作のできるといふことは恐ろしい。
- 一二二、——いけないのは、勝手なことを人が云へる事だ。又かつて云はれてある事にまで、人は勝手なことを云はし得ることだ。

一二三、——『尊ぶべきは善あるのみ』と、氣が向けば惡魔も云へる。さうして惡魔の口から出るので、それがウソだ。

- 一二四、——偽善者とは美しい思想を述べ立てる人間のことぢやないか？
- 一二五、——『狂人の言は言語の澤山あることに由來する』と聖書では云つてゐる。
- 一二六、——言葉がおのがじまに振舞ふからだ。
- 一二七、——が、狂人の喋る間、眞理は黙つてゐる。
- 一二八、——『觸つて見なけりやいけない』と、デドモが云つた。
- 一二九、——『よく云つた』とわたしは答へた。
- 一三〇、——わたしは肉と骨で出來てる靈でありたい。
- 一三一、——觸つてもらひたい。
- 一三二、——手に觸つて喜んでもらひたい。
- 一三三、——命
- 一三四、——といふ唯一物の兩物が、即ち靈と肉だからだ。』
- 一三五、——それから町の一隅で、わたしはきたならしい貧しげな一名の狂女に遇つた。かの女の着

物は雨のふるやうにまはりへ落ちてゐた。

六二

三六、——『正に判然とサバの女王になれたんで、わたしは嬉しい。』と狂女が云つた。

三七、——周囲の人々はひどく不惑がつて、『すきなやうにさせて置くがい。』と云つてゐた。

三八、——『いや、決して氣ちがひを重んじてはいけない。』

三九、——智能は白日の如く純でなけりやならない。

四〇、——頭からは直線が放射しなくてはいけない。』

四一、——で、それからもつと先で、われ／＼は働いてゐる一人の男にヒョッコリ遇つた。恰も安息日だつたものだ。

四二、——モーセの掟によると、そんな事をしてはならない時に働いて(驢馬に荷物をしよはして)ゐたこの男に、わたしは云つてやつた。『君、君は自分のしてることがわかつてゐるなら結構だが、わかつてゐなけりや呪はれた者だ。掟の違犯者だ。』

四三、——まづ理解することだ。

四四、——わからずに信ずるのは阿呆の骨頂だ。』

第十三章

一、——ヒルキヤはいつも手で歩いて、ゐざりながらわたしのそばへやつて來てゐた。

二、——かれの脚は満足なんだが、たゞ利かないだけだつた。脚が馬鹿になつてゐたのだ。

三、——だから、歩かうと思へば歩けたのだ。

四、——或日、満座の中で、みんながピタリと黙つて了つたほどの大聲で、わたしはヒルキヤに云つた『なほる時が來た。』

五、——立つて歩け！』

六、——と、みんなは、ヒルキヤが呆れ喜んだ子供のやうな顔つきで、

七、——ヨロ／＼立上つて歩きだすのを見た。

八、——このすばらしい珍事を目撃した者共は新人の前にひれ伏さんばかりであつた。それほど快心な驚くべき事だつたわけだ。そこでさかんな賞讃の辭をわたしにあびせかけて、『奇蹟を行はれたんですから、あなたは本當の預言者です。』

九、——だから、われ／＼はあなたを信じます。』など、云つた。

一〇、——が、かれ等は氣がつかなくなつたのだ。各自にしまひ込んである自主權に氣がつかなくなつたのだ。信仰の内面の實に氣がつかなくなつたのだ。『われ信ず』といふ叫びはやがて一個の武器である事に氣がつかなくなつたのだ。

六三

- 一一、——憐れなるヒルキヤは、その病氣のなほしてが自分自身であつた事をば、他の人々よりなほ氣がつかかなかつた。
- 一二、——それが自分自身から來たものに外ならないのを、神様の息がかゝつたものと信じてゐた。
- 一三、——かれは眞理の方向を知らなかつたからだ。
- 一四、——心中にある何物かゞ邪魔をして、みんなもその事を知らうとはしなかつた。
- 一五、——『諸君、まづ自信をもたなければいけない。即ち、諸君自身に土臺を置くことだ。それさへ信すれば、求むる事はなんでもできあがる。救ふのは信仰だ。』
- 一六、——諸君がもし信仰をもつて、この山に向ひ、「爰からあすこへ行け。」といふならば、山も動くにちがひない。——諸君が信仰そのものでありさへしたらだ。一心不亂に祈りたまへ。』
- 一七、——その日、わたしは多數の民衆に圍繞された。
- 一八、——世界の奇蹟はすべてみなこの民衆中にあつたものだ。

第十四章

- 一、——わたしのまはりへ來るほどの人々へ、わたしはすでに説教をはじめてゐた。
- 二、——靈の福音をすゝめるために。
- 三、——テベリアの湖畔であつた。
- 四、——或朝、わたしは釣する二三の仲間のもと船に乗つた。
- 五、——かれ等は魚や又甲螺のある小さな怪物を漁つてゐた。で、それ等を海からどしどしと釣上げてゐた。どの魚も、最後は結局、目をクワツとあいて、人間の手中の冷やかな一線だ。
- 六、——わたしの乗船した朝、好天氣のうちに人々は船出の用意をした。岸上に林立した女達や子供等が手まねぎしたり空間を抱いたりしてゐた。恰も木々がジツとしたまゝ、微風の前でうなづく時の、微風にそよぐ庭園のやうに。
- 七、——ところが、岸から離れると、風が起つて、暗くなつた。われ／＼は嵐と崩るゝまつ黒な山岳中であつた。
- 八、——洪大無邊なる混沌のたゞ中で、われ／＼はまるで塵芥にすぎなかつた。
- 九、——海はすべてひツくりかへつてゐた。
- 一〇、——又海は酔つ拂つてゐた。
- 一一、——さうして空は海であつた。
- 一二、——又風が大河のやうに波濤を卷いてゐた。地平線がこなく／＼に碎け、海岩どもや又黒鞭の

下をピシ／＼と疾走するあまたの小舟の通りすぎるのが見えてゐた。

二三、——われ／＼の小舟は激浪をかぶつてゐた。仲間の者達はすでに難船者になつてゐた。

一四、——渦の匂と渦巻とをわれ／＼に浴びせかけつゝ、ドブン／＼と泥の如くに水の入り込む小舟の船首で、わたしは平然として両手をあげた。

一五、——さうして、互に縋りついてピシヨぬれになつてゐた人々に向つて、わたしは、風がひどかつたので、恰も町の廣場へ立つたやうに、出来るだけ大きな聲で叫んだ。

一六、——『信仰なき人々、君等はなぜ疑ふのだ！』

一七、——一同は異口同音に叫んだ。『僕等は死にたくない！』

一八、——目に見えぬ人間の偉大力によつて、あらゆる浪はおとなしくなつた。

一九、——わたしがみんなに勇氣と力とを振起させたので、みんなはわたしを神の魔法使だと信じた。

二〇、——そこで、もうしばらくの間、かれ等にさう信じさせて置いた方がよさうにわたしには思はれた。

二一、——かれ等には赤裸々に考へたり工夫したりする能力がないからだ。

二二、——さうしてわたしの心をかれ等に注入する事が、即ちかれ等のものである一切をかれ等に

與へる事が、わたしには禁断かと思ふと、わたしは悲しく腹立たしかつた。

二三、——もつともだと思つたら、自信を鼓吹せよ。鼓吹しなけりや、自信をもて。

二四、——が、わたしの心がかれ等にわかるのは果していつか？

二五、——わたしを指して、『この人だ』と云ふ時だらう。

第十五章

一、——前に云つた、かの塀に沿うて、その上に荆棘の冠のあつた腰掛の上へ。

二、——その頃のある夕方、わたしは草臥れた旅人として再び行つた。さうして物蔭をのぞくと石の腰掛が呼吸してゐるのに氣がついた。

三、——ヨハネ・ザカリヤがそこに腰かけてゐたからだ。前述の如く、數年前かれのそばからわたしが去つて以來、かれは恰も奇蹟によつてそこを動かすにゐたものゝやうに。

四、——わたしはかれのそばなるわたしの席へついた。(木下蔭へ押並んだ二人の人間は、まん中を死で仕切られた唯一人の影をつくる。)

五、——が、夕方といふものは、子供の時分さうわたしが思つたとほり、顔の上にある顔のお面を又心の上になる胸のお面まで、とりのぞいてくれる。

六、——さうして恰も夜が幼な兒でもあつたやうに、わたし達は小聲で話した。
七、——暗いので荆棘の冠は見えなかつたが、そこにあつたことはわかるので、あるナと思つてゐた。

八、——『またやつて来たよ。』

九、——仕事といふものがいかに喜びであるか、又その喜びがいかなる惡戰苦闘であるかといふ事がわかつたよ。

一〇、——それから平和は平和では成立たないものだといふ事がわかつたよ。』

一一、——『わかつてやしない。』とかれが云つた。

一二、——『今はわかつてる。』

一三、——なアに、昔だつてわかつてゐたものサ。』

一四、——そこで、云ふ事を云つて了つたので、二人とも同じやうに黙つてしまつた。

一五、——と、ジツとしてゐたわたしにかれが云つた。

一六、——『君、どこへ行く?』

一七、——ブラさがつてた恐ろしげな冠の下で、頭を下げると、わたしはわたしの影もろともに答へた。

一八、——『みんなにわたしの心がわかるのは、わたしが心を抜き出して見せる時だらうよ。』

一九、——いづれ、いつか。』

第十六章

一、——『あなたは救世主でゐらつしやるんでせう?』と或女がわたしに云つた。

二、——『いや、わたしはそんなものぢやない。』

三、——その女は嘆息した。さうしてわたしの返事をほいなしと思つた。

四、——それから又頭をあげて、かの女がきいた。『すると、救世主はどこにゐらつしやるんでせう?』

五、——『未來にゐる。』

六、——救世主は血をもつて未來を開く。

七、——さうして未來に心を與へる。

八、——さうして自動標石の如く未來を測る。

九、——救世主の來ることを信ずるのは、やがてわれ／＼人間の突進してやまぬ眞の姿を捉へることだ。』

一〇、——ヨハネ・セバダイがわれ／＼と一緒にゐた。かれは口を開いて云つた。『併し救世主が来たとわかつたら、イスラエルの魂は向上しなくなりませぬか？』

一一、——イスラエルの時代は終を告げはせぬか？』

一二、——で、それ以上云ふ氣になれないで、ヨハネはやめて了つた。

一三、——わたしは再び云つた。『救世主は人が考へてるやうなものぢやない。』

一四、——ヨハネがわたしに云つた。『今云つたことをもう一度云つてもらひたい。まだよく分らんから。』

一五、——わたしは答へた。『救世主とは靈のことだ。さうして靈はわれ／＼にある。

一六、——神の王國はやがて一樹をなす一粒の種にたとへられる。樹はとりも直さず種の中にあつたものだ。同様に世界の眞理はわれ／＼の中にある。又神の國は、或人がそれを畠中の足元で拾ひ、さうして手にすると、光を放つ實にたとへられる。眞理の王國ではわれ／＼は決して外國人ぢやないんだが、それが常にわれ／＼にはわからない。その國をしろしめす王位はわれ／＼の中にある。神の御代はだしぬけにドンと来るものぢやない。「そら、こゝへ来た。」「そら、あすこへ来た。」と騒ぎ立てるやうなものぢやない。神の御代はこのとほり諸君のまん中へ来てゐるのだ。白日の如く明らかぢやないか？』

一七、——すると、ヨハネが答へた。『さつき君はそれが未來にあると云つてたが、今またどうして現在にあるといふのだ？』

一八、——『君といふ神の所持人は、若し君が生きてゐるなら、現在で同時に未來なのだ。と云ふのは、人間は瞬間毎に二個の人間に分裂して、一人は後へ、一人は前へ踏み込んでゐるものだからだ。君が「きのふ」と云へば「死」を語つてゐる。「あす」と云へば「生」を語つてゐる。救世主が「来てゐる」といふのは、「来てゐた」ことだ。

一九、——だから、自分自身に土臺を置くには、救世主を待つ必要がある。

二〇、——現在とは、はじまりのことだ。

二一、——耳あるものはきけ。心魂に徹して理解せよ。』

二二、——かれ等がわたしにたづねた。『昔の預言者達をどうお考へになります？』

二三、——『君等は君等の目前に生きてゐる者をすて、死んだ者についてムダ口をきく。』

二四、——昔の事なんぞ澤山だ。われ／＼は今前代未聞の事を行はうとしてゐる。

二五、——「どこへ行く？」「答へて曰く、「行くのだ。」

二六、——死にかぎつて形式がある。生は無形だ。が、いかにして未來に建設する？ いかにして存在せぬ物の上に土臺を置く？』

- 二七、——この話の最中に、種時にゆく者の通りすがるのが見えた。
- 二八、——『あれを見たまへ。あの、種をもつて行く人を？ あの人は未来に建設してゐる。あの人は存在せぬ大收獲を確信してゐる。』
- 二九、——ヨハネ・ゼベダイが云つた。『さうすると、眞理はもはや見えぬものぢやないのだ？』
- 三〇、——かれはつつ立つたまゝ腕を拱いてゐた。その拱いた腕の方へ、その八の字をよせた額がさがるのをわたしは見た。かれは産婦の如く自分の前途と自分の内部とを考へてゐた。歩きだした眞理をかれは見つめてゐたものだ。
- 三一、——さうして苦痛を拂ひのけようとして嗷鳴る病人のやうにかれは叫んだ。『そいつに（靈に）君が、命をふき込んだら、破壊の天使ができあがる。』
- 三二、——で、恐ろしくなつてかれは『さうぢやない』と首を振つた。
- 三三、——が、『さうぢやない』と首を振つた瞬間に、かれはわかつたのだ。
- 三四、——事物の前進を促す君の顔の兩眼、
- 三五、——そこが天國の門だ。
- 三六、——反抗だ。

第十七章

- 一、——一人は家の中に立ち、いつも同じやうに、何か運び歩いてゐる。
- 二、——もう一人は鏡のやうに空間を見つめながら、わたしを見つめながら、やつぱりいつも同じやうに、ジツと腰かけてゐる。
- 三、——わたしの身のまはりをいと懇ろに世話してくれる二人の女、即ちかのマルタとかのマリヤのことだ。
- 四、——マルタ。時に應じて家政婦にも、女中にも、機織女にもなる。
- 五、——かの女が云つてゐた。『尊いお方には、たゞ尊いだけでゐて戴き、なんにもおさせ申したくないからです。』わたしはかの女の服従するまゝになつた。
- 六、——かの女がわたしに云つてゐた。『もしあなたが悪い路をおいでになりましたら、わたしもその路をまゐります。わたしにはきつとそれが善い路なのでございますから。』
- 七、——マリヤ、マドレーヌ。かの女はなんにもしなかつた。
- 八、——さうでないまでも、
- 九、——一度わたしのからだへ一瓶の香油をふりかけた事と、髪の毛でわたしの足を拭いた事と、

そのほかにはもう一生なんにもしなかつた。それがかの女の奉公であつた。わたしはかの女の服従するまゝになつた。

- 一〇、——花瓶の中で死ぬ花が一もとそこにあつたわけだ。
- 一一、——ある夜の美しい會合を思ひ出しながら、かの女が云つた。「耳に残つた睦言のやうだわ。」
- 一二、——お前達二人はパンのやうにわたしに心を割つてくれる。

第十八章

- 一、——ユダ・イスカリオテが一隅から出て来て、通りすがるわたしの上衣をひッぱつた。
- 二、——「先生、一寸お話しできませうか？ 實は、」
- 三、——とかれはわたしをぬすみ視て云つた。「先生に對して少しくその意を得ない事があるのです。」
- 四、——あの女がふざけて先生のおつむりへ香油一瓶ザブリとぶツかけた一件です。
- 五、——わたしは勘定方を承はつてをります。あの香油は優にわれ／＼の全生活費にあたつてゐました。内輪に見つもつて三百デナリはありました。
- 六、——香油一瓶残らずザブリとぶツかけるなんて！ いえ、まったく呆れたものです。あの女は

きちがひです。それから頭の毛で先生のお足を拭くなどは、もつての外の振舞です。それでも先生は至極御満足の御様子でした。」

- 七、——犬のやうに突立つたまゝ、かれは小言を云つてゐた。
- 八、——ユダ・イスカリオテは親切氣のある可憐な男だが、小人だ。
- 九、——殊更に自分達をば、「氣ちがひぢやない」と人に思はれたがつてゐる、不愍な小人ども位われ／＼の大敵はない。
- 一〇、——ユダに逢ふと、わたしはいつでも立木にぶツつかつたやうだ。
- 一一、——その頃の話だが、かれ等はわたしのところへ何か、追ひ立てゝ連れて來た。さうしてそれは見苦しくオド／＼ふるへて、顔をかくしてゐる一人の女であつた。
- 一二、——かの女は姦通罪を見つけられたのだ。「法に従つてこの女を石で打殺さなけりやならんのかどうか？ 返事してもらはう。」
- 一三、——かれ等はわたしを困らすためにさう云つたのだ。と、その間、女は、死がジリ／＼と生身に迫りつゝあるので、顔へあがつてゐた。又群衆の叫喚をきいて打殺されたも同然であつた。
- 一四、——「一度も罪を犯したことはない者が先づ石をぶつけたらよからう！」
- 一五、——論客どもは何と答へていゝか、又どうしたらいゝかわからなかつたので、てんでに大き

な石をもつたまゝ、散失せて了つた。

一六、——『労働者はすべて嚴重なものだから、義務をキチンと立てるためには、原則は嚴重でなければならぬけれど、併し人命には決して必要以上嚴重に失しないやう、くれぐれも注意しなくてはいけない。』

一七、——正義のつくられてあるのは、各人を窮屈にするためぢやなくて、出来るだけ各人を氣樂にするためだといふ事は、諸君はよく御承知だ。正義は人を鞭打つべきものぢやない。鞭打たうとすると、却つて自分がそれで鞭打たれる。

一八、——理は平穩にある。

一九、——おとなしい者は幸福だ。かれ等は地を受繼ぐであらう。柔和は正義のまぎれもない姉妹だ。双方とも靈の子供だ。さうして双方とも心を開く前にまづ眼を開く。

二〇、——正義が、聰明になればなるほど、やさしくなり、すなほになる。』

二一、——持つた石に未練を残して、二三人はまだその邊に見苦しくブラついてゐたが、この前代未聞の光景から群集が立去つた時、わたしは女に云つた。『さア、行きなさい。そしてもう罪を犯しなさんな。』

二二、——女は町の方へ降りて行つた。

二三、——かの女は緑色の上衣を着てゐた。

二四、——わたしの脚下には、遙かに黄塵の末と没する町の姿があつた。

二五、——わたしは潜水の縁に腰かけてゐた。さうしてかれ等が來なかつた前にやつてゐたやうに、そこに終日わたしの一擧一動の影があつた砂の上へ、わたしは杖で字を書きはじめた。

二六、——それから、肩越しに願向いて、うしろへ身を傾けると、なだらかな潜水の水がヒヤリとしたが、その盆のやうに黒い水面へもつて行つて、自分の影の映つてるのが目にはいつた。

二七、——やせたわたしの肩の上には灰色の布衣、亂れた頭髮、青白い顔。

二八、——一切人間の悩みが醜くして了つたといふ顔だ。

二九、——又慰められる人々のそののやうな、すこしばかり赤くなつた眼瞼。

三〇、——又しなけりやならぬことをいろ／＼考へるので、

三一、——やゝ險しくなつてゐる眼。

三二、——さうしてわたしは思つた。『自分は今迄何をして來たか？』

三三、——又わたしは思つた。『わたしと同じ事をしようとして、今は影も形もなくなつてゐる他の人々が、果してどの位あつたらう？』

三四、——さうしていづれわたしもさうなるだらうが、そのとほり今日空に歸して了つた或人間が、

百年前、又千年前、この場所で、恐らくわたしとそっくりそのまゝだつたものにちがひない。轟くかれの胸の中で、かれは人間中の人間にならうと試みたものにちがひがない。さうして世界を動かすべく、又絶望をもつて希望をつくるべく、わたしのやうに勇氣沮喪して、その手をグタリと垂れたものにちがひない。

第十九章

- 一、——ザカリヤの子ヨハネは國內にあつた。かれは法を説いてゐた。
- 二、——で、わたしの通つたところは、往々にかれの通つたあとか、或はこれから通らうとするところであつた。
- 三、——色彩のない平原と、一體にちらばつたデコボコのだゞ中、そこにクル／＼と毯のやうに巻きぢられた、二個の立木の、濃緑の二個の陰影の間に、かれの衣服の黄と青との強烈なる陰影がある。又黒い輪廓の赤ら顔と、一指を空につき立てた、黒いその隻手がある。さうして杖とつゞいて甚だ長いその左腕がある。
- 四、——かれは蠻人の如く瘦せて獐猛であつた。頬はこけ、腹は窪み蝗をたべてゐたので、肉體の弾力がカチ／＼であつた。かれは俗語で喋つてゐた。さうしてき／＼に來た人々の頭をば、その絶叫で

道路工夫の如くガンと打つた。

- 五、——それこそ一個取崩しの良工夫であつた。ありとあらゆる偶像の、その光明の根源までも、かれは滅茶々にたゞきこはした。何となれば偶像はその尊嚴を職工から借りてゐるからだ。金の積の中にだつて、少しは血がある。
- 六、——かれに喋つてゐた。かれの唇はすばらしく動いてゐた。その顔の獐猛な皺の中で、かれの眼はクルクル回轉してゐた。さうしてかれの口はまツ四角であつた。
- 七、——『お前等は駝鳥そっくりだ。お前等より馬鹿な奴はどこにだつて決してない。一人もな』
- 八、——ダビテにお前等が願つたとほり、お前の食卓は民になれ、網になれそしてそいつに引ツかれ。それがお前等の御褒美だ。
- 九、——氣をつけろ！』
- 一〇、——聲を勵ます毎に、かれの全身はビリ／＼と顫へる。
- 一一、——かれは叫ぶ。かれは言句を連發する。言々句々血が逆しる。しよつて立つかれ自身の一民衆をば、かれは民衆中へ投込んで溶かす。民衆の惑ひをかれは退散させる。と、惑ひは家畜の如く退散する。一言は裂け、一句は開く。光明の一滴は真人の面目を躍如たらしむるに足る。

- 一二、——さうして魂を洗ふ必要のある事を悟らしめんがために、かれは水で人々を洗つてゐた。
- 一三、——或日、わたしのゐたところへかれが来た。さうしてユダ・イスカリオテと話して、この男の慎重ふりと料簡の狭さ加減をば叱つてゐるのがわたしにきこえた。
- 一四、——ユダがかれに云つてゐた。「先生、何かお氣にめさぬことがございますか？」
- 一五、——ヨハネは答へた。「何もない。お前が下らんからだ。」
- 一六、——お前は小事に懸礙してゐる。お前は冷たくも熱くもない。冷たいか熱いか、どつちかであつてくれ、お前はなまぬるいから、おれは口から吐きだして了ふんだ。」
- 一七、——すると、バプテズマのヨハネは、自分の方へ近づいたわたしを見つけて云つた。「おれのあとへ来た男はおれよりもエライ。おれは奴の靴の紐を解くにも足らん。」
- 一八、——奴は堂々とやつて来る。奴は東雲のやうに蒼白い。」
- 一九、——が、それから間もなくヨハネ・ザカリヤは姿を見せなくなつた。
- 二〇、——牢獄へつれてゆかれたからだ。
- 二一、——考へどほり實行するすべての人々のやうに。
- 二二、——人間を救はうと志した人をば、
- 二三、——或日、憐むべき羅馬民衆の子等なる兵士どもは、無理無態に捕縛した。

- 二四、——かれの周辺のかうした光景は世のやかましいものであつた。
- 二五、——恰もかれがまだ絶叫しつゞけてゐたやうに。
- 二六、——で、わたしは二三の人達と共に、道のあるところを離れて砂漠に向つた。
- 二七、——ヨハネ在世のみぎり、時々かれのとどまつた場所を見にゆくためであつた。
- 二八、——道もない砂漠の三日路、そこにヨハネの貧弱な小舎があつた。われ／＼は遣入つて見た。
- 二九、——敷居は横に、壁は縦に、石は周圍に、すべて石だ。
- 三〇、——目地のかぎり、河畔まで、さうしたものゝ一切にかれの退去が刻まれてゐた。到るところにかれの沈黙が冷めたかつた。
- 三一、——そこに集つてゐたかれの弟子達は悉く四散した。
- 三二、——ヨハネを盗み去られて失つたからだ。
- 三三、——小舎の中には、土だか泥だかのかたまりが、机のやうな恰好をしてゐた。さうしてその机には符牒がいろ／＼書きつけてあつた。
- 三四、——即ちかれそのものゝ断片だ。
- 三五、——その断片をば、かれの指先が、見つけ出しては誌したものだ。

三六、——わたし達はそれを讀んだ。かれの不在を物語る孔の中を覗き込んで、わたし達はその中のヨハネその人に没頭した。その間、他の人々はわたし達の讀みをはるのを待つてゐた。

三七、——『お前達はキヤア／＼囀る駝鳥そツくりだ。』

三八、——ヨハネの指の文字は引續いてかう云つてあつた。

三九、——『ペオルの子バラムが云つた。一隻眼を開いた人間が云つた。』

四〇、——つんぼの演説家、風のやうな言葉、それから頭の中は骨だらけで、眼玉の凍つた年寄どもの云ふ事をば、お前達は占のやうにきいてゐる。

四一、——が、爰に一事業がある。一事がある。何が？ 一大事だ。

四二、——（わたしの述べてゐるのは、今なき人がその指先で泥土の上へ書きつけた遺言状なのだ。で、その事がよほど偉大であつたと見えて、もう一度そこへ書きつけてあつた。）

四三、——その人間が云つた。一隻眼を開いた人間が云つた。

四四、——一大事とは何であつた？ わたしは睡つてゐた。睡眠中ゾツとするやうな陰暗がわたしの上へのツかぶさつた。

四五、——すると、煙たつ一日、一束の炬火が一大事の上を通りすぎた。

四六、——一大事、それはかれ等が天まで届かせようとした塔のことだ！

四七、——聖書によれば、その時神が云つた。「かれ等がもし結合して、一民衆きりになられると、又さうした揚句、仕事をされると、唯一神としてのわたしの立場はなくなつて了ふ。

四八、——だから、われ／＼は神々として、この工事をひツかきまはしてやらう。さうして民衆の統一を支離滅裂にしてやらう。で、さうするために、かれ等固有の言葉を別々にしてやらう。

四九、——又さうするために、かれ等の口自身と、得て光明をとつちがへやすいかれ等の頭とを使つてやらう。」

五〇、——神々はそのとほり行つた。と、民衆はお互にもう理解がなくなつて、全く戦争状態にある仇同志の國語を話すやうになつた。

五一、——さうして、たとへ同じ國語を話しても、地上ではかれ等はもう互に理解しあはなくなつて了つた。

五二、——即ち、人間の事業が偉大である時、それを破壊できるのは天火ぢやない。

五三、——人間みづからだ。

五四、——つくるのも人間だ。つくらないのも人間だ。こはすのも人間だ。

五五、——で、塔は高くならなくなつて、次第に平原の方へ低くなつた。

五六、——さうして民衆は民衆によつて呪はれる事になつた。

- 五七、——さて、最後に人は叫ぶであらう。「主よ、あなたは一體どなたですか？」
- 五八、——おれはかの天地創造の日、聖書が書いた事について物を云つた人間だ。「人間がもし智識の實を食へば、人間はわれ／＼神々と同じになる。人間は食つてはならぬ。」
- 五九、——食へば人間は山も動かせるからだ。
- 六〇、——日光も手に入れるからだ。
- 六一、——おれは神敵だ。」
- 六二、——ヨハネ・セベタイが、わたしと一緒にゐた。
- 六三、——かれにわたしは云つた。「君にはわかる……」
- 六四、——かれはわたしに答へた。「わかる。」

第二十章

- 一、——數名の信者を引連れて、わたしはある山の上へ登つた。
- 二、——わたし達は立ちどまつて顧返つた。と、一群の大衆が惹きつけられて、悉くわたしの方へ登つて來てゐた。
- 三、——あとにつゞいたこの民衆を見て、わたしはかれに物が云ひたくなつた。大いに語るべき義務を果す時だつたからだ。

- 四、——わたしの信仰が響きわたるために、
- 五、——又單純そのものが一目瞭然たるために、
- 六、——が、どう話したらいいか、わたしには一寸見當がつかかなかつた。
- 七、——はじめが重大だからだ。
- 八、——子供等が押並んでそこにゐた。或者は頭巾をかぶり、或者は頭をむき出しにしてゐたが、どれもこれもみな刺繍でも見るやうなボロ／＼の着物を纏ひ、その下から小さな足首が二本ニユツと出てゐた。
- 九、——かれ等はずつとそばへ寄らうとしてゐた。人々には小聲でかれ等に、「あつちへ行け！」などゝ小言を云つてゐた。
- 一〇、——第一列にはパリサイの徒、律師、學者達が人目を惹いた。
- 一一、——かれ等の一人がきこえよがしの高聲で云つた。「この男には聖書を語る資格はない。一度も聖書を習つたことがないんだから。」
- 一二、——が、黙しかねたわたしの聲はその人間をギユツと云はした。「君に眞理を語る資格はない。一度も眞理を習つたことがないからだ。」

- 一三、——一名の律師がわたしを指して叫んだ。
- 一四、——『お前は安息日に中風患者をなほした！』
- 一五、——『その病人をもう一日苦しめて置いた方がよかつたといふのか？ 偽善者ども。安息日は人間のためにつくられたものだ。安息日のために人間がつくられたのぢやない。
- 十六、——「わたしの云ふことはしろ。わたしのすることはするな。」といふ人間は君等だ。君等は云つて行はないからだ。
- 一七、——君等の信心はほんの身振り口先だけだ。君等は喇叭を吹き立て、施しをする。君等は大聲疾呼して注意を呼ぶ。君等は人に見てもらひたさに、大道のまん中に立つて御祈禱する。君等は又女を見ないために壁へぶつからんばかり頭を下げる。どうだ。一言もない筈だ。君等のやうな法螺ふきには。』
- 一八、——すると、民衆は兄の弟に於けるが如く盛んな喝采をわたしにあびせかけた。
- 一九、——民衆は眞理にたんのふしたからだ。
- 二〇、——と、一齊にわたしを見つめたまゝ、忽ちシンと靜まりかへつた。
- 二一、——この瞬間こそ、二千の心がわたしにあつた。かれ等にも同様に。
- 二二、——わたしの言葉は、わたしの肉そのもの、わたしの血そのものであつた。

- 二三、——『君等が人にしてもらひたいことは人にしてやりたまへ。
- 二四、——君等が人にしてもらひたくないことは人にしたもうな。
- 二五、——人間の嵐の中の合言葉はそれだ。
- 二六、——すべての人間はすべての人間と同じだからだ。
- 二七、——が、諸君の踏み込むのはそれから先だ。即ち地上の正義の一切完成だ。
- 二八、——徹底的完成だ。
- 二九、——自然の構造は大きいけれど、一定のかたちはない。
- 三〇、——併し人間の建てる記念碑には正義の對稱がある。
- 三一、——かくして大空の下に萬代不易の記念碑が建つであらう。
- 三二、——一切の勞働者が擧つて建てる記念碑だ。
- 三三、——諸君が諸君の外へ抛り出して乾枯びさせて了つた物を悉く諸君の中へ取戻したまへ。
- 三四、——文字は諸君の外にある。靈は諸君の中にある。
- 三五、——晝夜兼行、靈に則つて改造したまへ。
- 三六、——さうして諸君自身を信じたまへ。
- 三七、——諸君は網にひつかゝつたやうに、修業、戒律、宗規の中へ捉はれてゐる。

- 三八、——又死滅した掟の中へ掟はれてゐる。
- 三九、——外見に絶望したまへ。さうして「いやだ」と云ひたまへ。
- 四〇、——諸君は正義の権化だからだ。
- 四一、——モーゼの掟と稱して、實はかれ等の掟に外ならぬところの、さうした一事しきや心得ない、そんなわからずやの學者どもを、手でつきのけてやりたまへ。
- 四二、——預言者が云つた。「その思想を軍旗の如くまつ先へ押立て、惡道を辿つてゆく。」と。
- 四三、——靈の單純なものは幸福だ。かれ等の前には、われ／＼の前よりも餘計に門が開かれてゐるからだ。
- 四四、——その子供等をわたしのそばへよこしたまへ。邪魔をしたまふな。天國は子供等に似た人のものである。
- 四五、——われ／＼が子供等のやうになれば、さぞ美しからう。
- 四六、——天國は手を高くさしあげて取れるやうなものぢやない。
- 四七、——諸君自身のうちに天國を持ちたまへ。
- 四八、——諸君自身でつくりたまへ。
- 四九、——さうすれば、實物の職人として、諸君の腕が諸君をさしあげてくれる。

- 五〇、——諸君、單純な諸君、貧乏な諸君、無數の諸君。
- 五一、——無氣力な民衆諸君。
- 五二、——諸君の身を物のはじまりに置きたまへ。
- 五三、——やりなほしたまへ。
- 五四、——ユダヤ民族は一小民族だが、一大靈魂だ。
- 五五、——その靈魂のわたしは管理人だ。
- 五六、——又通告者だ。
- 五七、——迷へる者達を救ふために。』
- 五八、——この日、人々はわたしを目がけて殺到した。子供等は『ホザナ』と叫んだ。民衆はわたしを抱きかゝへた。
- 五九、——又逾越節の前晩、わたしはお寺で人々に會見した。
- 六〇、——と、ヨハネ・ゼベダイがわたしに云つた。『わたしは君のからだを透きとほつて君の魂のキラ／＼光るのを見た。又君の口から白刃が出てゐた。』
- 六一、——それから夕の供物をさしげる時刻、遠さがる路上で、わたし達は三人だけになつた。
- 六二、——わたしと、シモン・バル・ユダと、パウロとの三人だ。二人はわたしの弟子だ。かれ等は

この路上を通つて遠く離れて行つた。

六三、——シモンがわたしに云つてゐた。「わたしはあなたのお話を承つてあなたがわかりました。あなたのお話はわたしに徹底しました。心の一角から這入つたんですから、他の一角から出て行くでせう。あなたのお話をわたしはこれから人々に絶叫するつもりです。」

六四、——又パウロも同様にわたしに云つた。「わかりました。あなたの光明は夜でもハッキリわかる位わたしの身内に輝いてゐます。わたしはあなたのお話をわたしの脚で運んで行つて叫ぶつもりです。」

六五、——何物かゞあつて、われ／＼三人をば、同じ人間にしてつたのだ。

六六、——いふまでもなく、わたしに則つて布教すべく、二人はわたしと別れて行つた。かなり先までわたしは二人を送つた。(空では二三の星がすでに先發してゐた。)で、第一の岐路で、二人はわたしと別れたが、一人は一方の路をとり、一人はもう一方の路をとつた。

六七、——わたしの言葉を生みつけるために。

第二十一章

一、——わたしはこの頃わが徒の一人となつたミシヤエルの談論をきいた。

二、——「神がもし一切をつくつたとすれば、神は悪をもつくつたのだ、とさう人が云つた時、何と答へる?」

三、——その事についてはとうから考へてゐたものゝやうに、ヨハネ・ゼベダイが言下に答へた。

「そんなことに返事はできない。ほかの話をしよう。」

四、——その事が胸一杯で、常に不服を感じてゐるデドモが、「わたしはかれのその點が氣に入つてゐる。」憤然として口を出した。

五、——「なぜ善人は薄命で苦勞が多いのか? 善人は叫ぶ。さうして世の中に判断がない。かれはひとり言をいふ人間のやうに禱る。やがて力盡き、息もたえ／＼、地に倒れ伏す。さうしてかれはどこにゐる?」

六、——「ヨブがその事をたづねたやうに、悪人どもはなぜ生きながらへるのか? なぜ悪人どもは年老ゆるまで悪事をして富み榮えるのか? それをたづねたヨブその人は、なぜ——神と悪魔とにかかはれたり試みられたりするために——なぜ悲しまされたり、丸裸にされたり、慘鼻の極につき陥されたりしたのか? さうして墓穴に向つては、なぜ「お前はわたしの父だ」と云ひ、又蛆蟲に向つては、なぜ「お前はわたしの家族だ」など、云つたのか?」

七、——「苦が消えがたいものだからと云つて、」とデドモが云つた。罪なきものをたとへ瞬間でも

悪人扱ひにする法があるか？ 地上にはたゞ一滴の血があるだけか？ その血はどうしても流さなければすまんのか？ その一滴の血は世の一切の仁愛同様に重いではないか？ 苦がもし下らないことだとすれば、神はなぜ人間の骨身にしむ苦をつくつたのか？』

八、——さうしてデドモは持前の高聲で叫んだ。『試練なんていま／＼しいものだ。』

九、——と、つい自分の癖が抑へきれずに怒鳴り立てた。『悪ばかりこしらへたんだらう！ それなのに、なぜ死で罰したんだ？』

一〇、——神よ、あんたはのべつ死骸をこしらへる者ぢやないか！』

一一、——が、ブツ／＼いふ批難の聲が耳にはいつたので、かれは黙つて了つた。

一二、——ナタニエルが云つた。『われ／＼は、暗愚であるがために何も云ふことができない。(神の事や又神と苦との配合などについて)何か云はうとすると、きつとその中へ巻き込まれて了ふ。』

一三、——人間はつまらないものだから、辯解したり説明したりする事は、秩序整然たる神をおもちやにする事だ。又聖書中の賢人ヨブが「よし神がわたしに答へても、神がわたしの言葉をきいてくれたとは思へない。」と云つた人間の聲みに倣ふことだ。』

一四、——わたしは云つた。『神が一切をつくつたと云つた時、人は自分の云つた事に裏切らざるを得なくなる。さうして「神でない他の者が悪をつくつた」と附加へざるを得なくなる。他の者とは、

そこにゐる人々、即ちわれ／＼だ。又人は悪で苦と死とを説明する。

一五、——が、それは影で夜を説明する事だ。』

一六、——この肯定はそこにゐた人々を狼狽させた。白いものと黒いものとの上に、同時に、同程度に基礎を置いた、さうした偶像的教理に思ひ及んで、かれ等がゾツとした有様を、わたしは見てとつた。

一七、——一人が云つた。『それ等の事は口に出して云ふべきぢやない。』とさういふ下心で、わたし

から離れたものゝあるのが、わたしにはわかつた。

一八、——空間中に孔が一つできあがるのをかれ等は見つけたわけだ。

一九、——が、わたしは云つた。『一切がわれ／＼のうちにある事は争ふべからざる證據だ。』

二〇、——われ／＼のうちには苦痛の深淵がある。真理の源泉がある。誤謬の諸泉がある。われわれは反抗の主権と共に、服従の主権を握つてゐる。そこで権利を叫ぶのだ。』

二一、——「はじまり」の場所が變つてゐるのをかれ等は気がついた。

二二、——かれ等は頭を垂れた。さうして見るのが恐ろしくて、再びわたしを正視しなかつた。

二三、——その人々は山のやうに動揺した。

二四、——わたしの云つた事は、すべてわたしの中に、

二五、——又かれ等の中にあり／＼と書いてあつた。わたしのうちに又大衆の五臟六腑中に書きしるされてある事を、わたしは云はう。又屋根の上で叫ばう。

二六、——大衆の言葉は一個の辯士だ。

二七、——語る必要がある。あるがまゝを云ふ必要がある。よし多くの口々が願みて他を語つても。

二八、——よし一切の口々があげて他を語つても。

二九、——わたしが、黙れば、わたしは死ぬ。が、語つた以上は、死んでも黙らぬ。

三〇、——夕ぐれ、冥想してゐた時、わたしは或聲を思ひ出した。晝間きいた聲だ。耳ぢかく親しげに云つた聲だ。

三一、——『イエス、君は單純なことばかり云ふ。が、あんまり單純すぎる。だから、君がゐると恐ろしい。又君のそばにゐると壓倒される。』

三二、——君は千里眼だからだ。

三三、——君といふ人は、わたしの見ることを何もかも見ぬいて了ふ！

三四、——又もう一つの聲は悲しげであつた。かれは忘れてゐたからだ。『忘れた。忘れた。苦までが見かぎつて、わたしをぼつつり、死人のやうに置いてつて了つた。二十年前のいろんな事を、あの

わたしを抱きしめてくれた妻や子の事まで、わたしはまるで太古の昔のやうに、残らず忘れはてた。わたしが不仕合はせな人間だつた事さへ、ほとんど覚えてゐない位だ。』

三五、——で、絶體絶命に陥つたかれはそれで身を飾らうとして、わたしの手をさがした。

三六、——が、最近まで苦しむことさへできなくなつてゐたラザロが、ある晩わたしに云つた。『わたしは死んでをりました。それをあなたが生きかへらして下さつたのです。』

第二十二章

一、——シケムといふ町のそばを通つた。ヤコブの井戸があるところで、一人の女に出會つたが、わたしはその女に水をのましてくれと頼んだ。が、女は答へた。

二、——『水をのましてくれつて、お前さんはわたしを誰だと思つてゐるんだね？ わたしはサマリヤ人だよ。わたし達サマリヤ人は神様をあゝの山の上にあつしやるものと信じてゐるのサ。それをお前さん達ユダヤ人はエルサレムにあつしやるなんて云つてゐるんだ。』

三、——『おかみさん、神様はね、もうエルサレムやあゝの山の上へまつりあげなくてもいゝんだよ。靈と眞理の中であがめる時が来たんだよ。』

四、——かの女が云つた。『神様がどこにあつしやるつて？』

- 五、——『神様は人間の手でこしらへた奥の院にはゐらつしやらない。
- 六、——「そこにお出でなさる」と、それが云ひたさに、お前は神様のお姿をさがしてゐる。さうして神様を目に見える形にしようとしてゐる。
- 七、——ところが、「姿かたちはこしらへるな」と云はれてゐる。
- 八、——さうしてはじめから姿かたちをこしらへないために、モーゼ以來わかりきつてゐる神の御名さへ、誰も口へ出してはならないことになつてゐる。神は秘密だ。』
- 九、——すると、人妻であつたその女が、わたしに云つた。『どうぞ、あなたのお名前をきかして下さい。』
- 一〇、——わたしは答へた。『なぜわたしの名前をきくんだ？』
- 一一、——かの女が云つた。『それでは、お禮を申させて下さいまし。』
- 一二、——かの女は驚いて、すこしばかり目がさめて、又何物か會得して、かのアブラハムやイサクやヤコブが、その偉大なる足どりで、又その無数の家畜を引連れて通つた道の上を、立去つて行つた。
- 一三、——わたしはボンヤリ考へた。さうしてわれ／＼を解放する訓言に心を奪はれた。
- 一四、——『姿かたちはこしらへるな。』靈の中に、眞理の中にわれ／＼を解放する訓言だ。

- 一五、——さうしてその訓言の心をば、わたしはズツと高いところまで考へて見た。
- 一六、——即ち、神がもしわたし以外のどこかにゐるなど、云つたら最後、わたしは一個の姿をこしらへて了ふ。
- 一七、——わたしは天で一物をつくり、霹靂で一人格をつくる。
- 一八、——が、それは粗雑であり、官能的である。
- 一九、——神はわれ／＼のうちにある。それゆゑに神はその他のところにはゐない。
- 二〇、——『全能の神は諸天の塔上を逍遙し、太陽はそのたゞ中から來たる。』とかれ等は云ふ。さうしてかれ等はそれで全東洋の最大なるものをこしらへてゐる。
- 二一、——かくして、それに自分達の罪をなすりつけて置いて、かれ等は自分達の手でこしらへた作物の前に平伏する。
- 二二、——エカルナの叫んだ『人間正義』は、下層の人間と内部の正義とでつくられてゐる。
- 二三、——規矩準繩の木の根はわれ／＼の中にあるからだ。
- 二四、——又ダビテが唱つたではないか！『おゝ、わが正義の神よ。』と。
- 二五、——われ／＼にはヅバぬけた『異人』が入用だ。さうしてこの入用が、神なのだ。
- 二六、——人は神を恐れる。さうしてこの恐怖が神なのだ。

- 二七、——われ／＼は木と金とで偶像をつくる。
- 二八、——又符號中に姿かたちのある言語で偶像をつくる。又明智中に姿かたちある思想で偶像をつくる。
- 二九、——又われ／＼の心中の絶叫で偶像をつくる。
- 三〇、——さうして、『この絶叫はわれ／＼の外に誰かゝることだ。』とわれ／＼は云ふ。
- 三一、——が、それは一個の祈禱にすぎぬ。
- 三二、——昔、われ／＼の祖先がまだ蒙昧であつた頃、かれ等は幕屋の中で二個の石を崇拜してゐた。その二個の石が神であつたものだ。
- 三三、——かくしてわれ／＼は偶像をつくる。しかも二個の黒石は世の中ほどの大きさになつて了つた。
- 三四、——神の世、偶像中の偶像だ。
- 三五、——わたしの眼をくらますものだ。わたしの心を打碎くものだ。
- 三六、——わたしは無限地獄の底から叫んだ。『否！』
- 三七、——一切はわれ／＼の中にある。われ／＼の絶叫はわれ／＼を超越しない。前へ突出したわれ／＼の腕はわれ／＼を超越しない。いかに夢想に狂つても、いかに絶望に憤つても、われ／＼はわれ／＼より先へはゆかない。

れ／＼より先へはゆかない。

- 三八、——然らば神はたゞわれ／＼の中のみあるのか？
- 三九、——然り、神はたゞわれ／＼の中のみある。
- 四〇、——かつて愛した今なき人がまぎ／＼と生きてゐるやうに、神はわれ／＼の中にある。その中にはわれ／＼しきやゐないところの、即ち一個の混沌だ。神は秘密だ。靈だ。歴々として靈だ。徹頭徹尾の神だ！
- 四一、——われ／＼の外に神がゐる方が都合はよからう。雨に降らず父があり、火にもやす人のあつた方が都合よからう。もし神がわれ／＼の外にゐたら、死人は死人らしくなり、喪中にある者は淋しさが半減されるやうに感じ、運命は馬鹿によく平均し、さうして人は安心立命するであらう。
- 四二、——ところが、神はわれ／＼の外にはゐない。
- 四三、——『神が現世に存在する』といふ事は、『幸福にならなければならぬ』といふ事と同様にばかくしむ。
- 四四、——又信すれば御利益があるからといふので信するのは、それは靈の賣淫だ。お前は金錢に降伏するのだ。
- 四五、——お前の心を常につくりなほせ。

- 四六、——靈の創作を常にやりなほせ。
- 四七、——一點の汚れなく。
- 四八、——さうして目前へ据ゑられた姿かたちの前で屈するな。
- 四九、——よしそれがお前から出て、洋の東西を結合するものであつても、屈するな。
- 五〇、——わたしはさうした神の創造者どもの中へ立歸つた。
- 五一、——かれ等は青空を指して、『青空はわたしに觸れてゐる。』と云つてゐた。
- 五二、——かれ等は、『神に榮光あれ。一切は神からわれ／＼へ來たる。』と云つてゐた。
- 五三、——わたしは併し、『一切はわれ／＼から神へ行く。神だつてさうだ。』と思つてゐた。
- 五四、——或人がわたしに云つてゐた。『わたしは偶像信者だつたが、大バン神は死んだといふ君の絶叫をきいた晩から、偶像信者ではなくなつて了つた。』
- 五五、——いかなる無間地獄の底からわたしが絶叫してゐたか、この人はそこまでは知らなかつた。
- 五六、——この人は自分の外で『神よ』と叫んでゐた。
- 五七、——と、わたしのそばにゐた子供が一人、この地に倒れ伏して、風にゆらるゝ荆棘の如く、身をゆすぶつて泣き叫んでゐる人間を見ながら云つた。『あの人の唱へてる神様は何だか本物ぢやないやうだ。』

- 五八、——果然、わたしは『復古』を見つけた。
- 五九、——『人道』を、『貧』を、『偉大』を、さうして『救濟』を！
- 六〇、——かうした想像の神へもつて行つて、人はあらゆる架空物をひつつけてゐた。
- 六一、——かれ等はその神に自分等の勝手なことを云はしてゐた。かれ等は自分等の誤謬や自分等の罪惡をば、神からわれ／＼へ持越さしてゐた。
- 六二、——あらゆるかれ等の政策をも同様に。
- 六三、——人は時の空中へ言語を織つた。さうしてその言語に束縛されてゐる。さうして自分の投げつけた讒言ざんげんに鉢合はせしてゐる。
- 六四、——正義の規範は虐殺された肉と虐殺された夢から出たものだ。かれ等はそれで人目を眩惑する文字をつくつた。
- 六五、——自分達がそれを利用するために。
- 六六、——さうしてそれを小さくして了つた。
- 六七、——人間達、憐れなる人間達、かれ等は『職務に死ね』と云ひわたされる。『殺すか、殺されるか』——かれ等人間達がその大夢想を植ゑつけようとする時に、かの妖怪が出て來てそれを蹂躪し

て了ぶ。

一〇二

六八、——運動を開始すると、人間達は襲殺される。妖怪は世界の大きさを笠に着て人間達を壓倒する。甲装したる白山の重量で、海と光との底知れぬ重量で、風雨と大河との渦巻きで、又生命の大襲來で壓倒する。一切森羅萬象はかくして神の形式の下に人間達の上へ躍りかゝる。さうしてあらゆる未知の事までが已知となつて人間達の頭上へフンぞりかへる。かれ等人間達はもう『おれは正當だ』とすら云へなくなる。さうした滅亡荒廢の中に立つて何にも口がきけなくなる。かれ等は手で口を掩ふ。さうして物を云つたら最後、自分の齒で自分自身の肉をかみちぎる。天がわれ／＼人間の上へさうした蛇足を置くやうになつて以來のことだ。

六九、——生物はありもしないものゝために滅ぼされてゐる。さうして人は人間から反人間的の信仰をば無理無弊に曳すり出す。

七〇、——ところが、わたしは成長するに従つて、萬物の第一義がわたしの中で成長しつゝあるの氣がついた。

七一、——又これ／＼の孤獨の珍寶が次第に積上つて行くのを見た。

七十二、——われ／＼は神の諸王だ。

七三、——われ／＼は天地の會合所だ。

七四、——われ／＼は世界中の世界だ。

七五、——われ／＼の切願はほとばしる岩清水の力がある。

七六、——われ／＼自身のうちに立つて、

七七、——聽かず云はざる神そのものゝ全身はそれだ。

七八、——さうして人間の希望こそ即ち神の肉そのものだ。

七九、——希望は神の消息だ。

八〇、——槓杆の如く一大希望がはねあがる。

八一、——希望がそこにゐることをわたしはいちはやく見つけた。

八二、——従つて、服従の原罪から人間達はのがれ出るであらう。あらゆる方面でかれ等はそれか
らのがれ出る。

八三、——さうして獅子奮迅の勢ひで理解を求むる結果、かれ等は遂にかれ等自身を挽回する。

八四、——と、かの神通力ある、善悪を知る木の實をば、一舉にかれ等自身へとり戻す。

八五、——その木の實からは、夜叉の劍によつて、又『わたしが天の所有者だ！』といふ聲によつて、

八六、——かれ等は遠く追拂はれてゐたものだ。

一〇三

- 八七、——たゞに善悪を知る木ばかりでない。
- 八八、——かの、周囲へ『神禁制したまへり』の高札を立てた命の木へまで、かれ等は肉迫するであらう。
- 八九、——『人間の生はわれ／＼神々の死となるだらう』と神は云つてゐたものだ。
- 九〇、——そこで、『立て、われ等の神の死よ。わが五臓六腑の神よ。』
- 九一、——人はお前を生きてゐるものと思つてゐた。併しお前は死んでゐたのだ。』
- 九二、——わたしはかやうに神の世の無数の死躰を促して、一生懸命立ちあがらせる。
- 九三、——又その地位を轉換させる。
- 九四、——諸君全人類と同然に、狩り出されて、驅逐されて、死ぬであらうところのわたしは、世に最も神的なる物を諸君へ持参してゐる。
- 九五、——『靈の御代の純潔』といふものだ。
- 九六、——靈は即ち無垢清淨の懐胎だ。
- 九七、——わたしは實在そのものだ。
- 九八、——わたしはその言葉だ。その靈だ。
- 九九、——さうしてわたしは權現だ。

第二十三章

- 一、——わたしに逢ひに来たヨハネ・ゼベダイと出ツくはした。わたしはかれに云つた。『君は僕をさがしてゐたのかい？』
- 二、——かれはわたしに答へた。『僕は自分で自分自身をさがしてゐたんだ。』
- 三、——前へ突立てた杖の上へ兩手をのせて、かれはしきりと何か考へごとをしてゐた。
- 四、——その考へごとをかれはわたしに打ちあげた。さうして云つた。『靈といふものはどこから来る？』
- 五、——夢うつゝにきこえるあの大聲はどこから来る？』
- 六、——かれは自分で自分自身へ答へた。『信ずるといふことは、つまり信じないうちに信ずることか？』
- 七、——が、かれは再び云つた。『靈といふものはどこから来る？』
- 八、——『ヨハネ、風の音をきくがい。風は吹いてゐる。併しどこから来るかわからない。』
- 九、——靈といふものはわれ／＼の奇蹟だ。靈と命、それはわれ／＼の同一の奇蹟だ。それは人のもつてゐる、眞理をつかむ力だ。物の形の上へまともに觀念の形を据えつける力だ。又正義の藝術

で、人間同志の共産を描く力だ。さうしてたゞ理會だけによつて愛する力だ。(生命とは即ち眞理をつくる事だ。靈はわれ／＼のうちにある。だから、たゞ、靈はどこへ行くか、それだけたづねたがいふ。』

一〇、——ヨハネはもう一度云つた。『靈はどこから来る?』

一一、——さうしてかれは答を待つた。かれはわたしが、『靈はわれ／＼の祖先の神から来る。』といふのを待つてゐたのだ。

一二、——で、しばらく待つたのち、(黒ずんだ外套を着てゐた)かれが云つた。『話すことが何かあるなら、云つてもらひたい。君はみんな話して了つたといふのか?』

一三、——わたしの心は朗々たる聲をあげた。

一四、——『さうだ。』

一五、——やゝあつて、ヨハネは全身の力で沈黙を破つた。さうして云つた。『なぜ君はみんなにわれ／＼の祖先のことを話すのだ?』

一六、——『それは比喩だよ。直喩だよ。』

一七、——『なぜ比喩で云ふのだ?』

一八、——『眞理を知る能力は、われ／＼には與へられてゐるけれど、かれ等には與へられてゐな

いからだ。

一九、——多くの人々には目があつて見ない。耳があつて聞かない。心があつて理會しない。』

二〇、——ヨハネは頭を垂れた。

二一、——さうして云つた。『もう一度云つてくれたまへ。』

二二、——『ウム。天國はわれ／＼の内部にある。さうして自分自身を知るものが天國を發見する。』

二三、——かれはふるへる手首をぐツと遠方へさし出して呟いた。『君は偉大を殺してゐる。』

二四、——『あらゆる偉大を僕は生かしてゐる。(わたしの聲は泉のやうにふるへてゐた。)』

二五、——僕は祈禱を正道へ引戻してゐる。』

二六、——ヨハネはわたしに答へた。『僕は怖い。』

二七、——わたしが云つた。『僕は自稱神佛ぢやない。又眞理を發明した覺えもない。』

二八、——眞理はかくれてゐたのだ。眞理は過去にもあつた。現在にもある。又未來にもあるだらう。

二九、——君に物を云つてゐるのは僕ぢやない。僕のうちにある、(光明を望んで生まれ出た一切の人のうちにある)神靈だ。さうして僕はその番人だ。

- 三〇、——今後幾世紀間、朝が夜に變じ、春が一陽來復することは、決して妨げられやしない。
- 三一、——同様に、萬物の眞面目が潑刺として人間中に建立されることも、決して妨げられやしない。
- 三二、——何物も埋もれたまゝではゐないからだ。悉く宣言されるからだ。
- 三三、——さうしてその期に及んで、人は智識に對して卑怯だつたことを後悔するだらう。
- 三四、——又盲從してゐたことを後悔するだらう。
- 三五、——光明中で見る人間は光明中で行ふにちがひない。
- 三六、——だが、さうは云つたものゝ、その時すぎると、この神の物に於ける偉大な人間的諸形式や、又「内外は一つものだ」と云つた時、その云つた事が、人々には、よし最善の人々にさへ、それがすつかり理會できないものだといふ事が、僕にはよく分つた。
- 三七、——それは信仰の要求が所有の要求だからなのだ。即ち、われ／＼の所屬でないものを取らうとする要求だからなのだ。
- 三八、——そこでかれ等は不可能を盜まうとする。
- 三九、——さうして淺猿しい、目まぐるしいかれ等の魂の中で、「われ／＼から神の束縛をとつて了つて、そのあとへ何をもつて來るつもりだ？」と、かれ等にはそれしきや云へないのだ。

四〇、——僕は君に云つて置く事が澤山ある。それ等の事がよく分つてゐないために、君はまだ本當の言葉を人に傳へることができないからだ。

四一、——「靈と眞理とは同じ物だ。さうしてわれ／＼は神の苗裔だ。と、なるほど僕はかれ等に云つた。

四二、——それは詩篇に、われ汝等を神により出づと云へり。

四三、——汝等は各自そのキリストなり。」とあつたからなのだ。

四四、——僕はその事をたゞ土臺としてかれ等に與へたのだ。自己を見た者が神を見たのだといふ事のわかる日が、まだ來ないけれど、いづれは來るにちがいないからだ。

四五、——さうした日の仕事をば第一歩から始めよう。

四六、——下層から、貧しい心から始めよう。貧しい心は貧者の泉だ。貧者は即ち、

四七、——手と

四八、——眼とをもてる偉大なる盲人だ。

四九、——人は不正なものを壊すためにつくられてゐる。』

五〇、——多くの人々はわたしを憎んだ。とりわけて、エキエルは友達でありながら、わたしを憎んだ。わたしはかれの憎悪の手や顔をば往々にしてわたしの敵中に發見した。

五二、——二三の人々にはわたしの事を『殺して了へ』と云つてゐた。わたしはそれを知つてゐた。

第二十四章

一、——わたしは靈と貧者との福音を説いて歩いた。

二、——又ヨハネ、シモン、ペテロ、アンデレ、及びその他の人々と共に、靈と仕事とに基づいた一共产團を組織して歩いた。

三、——手近の事からはじめて、最初の人々をば最初の礎として又種子として、地上へ据ゑつけ、さうしてまづ天眞の一民衆をつくらなければならぬ。大きくなるためには、小さくなる事から始めよう。

四、——女も四五人ゐた。

五、——女子は男子に卑しめられて來た。

六、——女子の奴隸状態は貧者の敗北へまで泥を塗つた。

七、——神がエバに、『汝の慾望は汝の夫の意に従ふべし。汝の夫は汝を支配すべし。』と云つたためだ。

八、——併し各自が各自であるべき時は來た。

九、——さうして世界の隅へわれ／＼がその種子を蒔きつけた新社會の中では、

一〇、——女子は男子と平等であつた。

一一、——又會堂は一派ではなくて、われ／＼全部であつた。

一二、——世の中で樂に暮らしてゐた二三の仲間のものが充たしてくれてゐた財布をば、ユダ・イスカリオテがあづかつてゐた。

一三、——人は金錢の方便によつて生きるべく餘儀なくされてゐる。世の中の法律が虚構と戦争と瞞着とで出來てゐるからだ。

一四、——その中でわれ／＼は一個の白鷺を點じてゐる。

一五、——さうした不正の財物でわれ／＼は正しい生活を買つてゐる。

一六、——が、わたしにはもう家がなかつた。

一七、——安心してそこへ頭をのせられさうな石一つなかつた。

一八、——獨りものには、どうしてその身が暖められやう？

一九、——一度わたしはわたしの立去つた村へ戻つた。

二〇、——わたしはわたしの故郷へ立歸つた。

二一、——よその都會は、もつと大きくても、もつと氣が樂だ。

- 二二、——故郷では、こま／＼した舊事物がしきりとわたしの目にとまつた。
- 二三、——飲用泉、廣場で圓陣をつくりつゝ何かガヤ／＼暗誦してゐる小學生徒。他人が入替つて住んでゐるわたしの家。かのプリスキラ以後、その時分の或夕暮、わたし諸共常に孤影悄然たる姿を見せてゐたわたしの部屋。そこからズツと見はらせた小窓。わたしの生れた櫪槽——と、わたしはもう自分が何だつたものか分らなくなつた。
- 二四、——一村の町並より外には何にもないわたし、
- 二五、——もはやどの戸口に立つ人をも見知らないわたし、
- 二六、——わたしは自分の青春と力とをあげて何をしたか？
- 二七、——いづれは消えて了ふ自分の聲で、わたしは何を喋つたか？
- 二八、——毎日奮闘をつゞけつゝ、わたしはいかなる價值ある事を、人々に役立つ事を、實際へ附加へたか？
- 二九、——當らず觸らずの事をすこしばかり、しかも不充分に。
- 三〇、——わたしはほとんど何もしなかつたのだ。さうしてわたしは夕方がこはい。
- 三一、——あらゆる苦悶に脅やかされてゐるわたしは、
- 三二、——今まで云はなかつた一切を自白する。

- 三三、——羊飼のやうに霧の中へ大名を残す人々は幸福だ！
- 三四、——いづれは勝利者となる使徒といへども、敗北した人々と同じ事であらう。
- 三五、——それは併しわたしではないだらう。
- 三六、——さうしてわたしがこの世を去る時も、恐らくわたし一人きりではなからうか？
- 三七、——わたしは石上に腰かけた。かの昔、戀と死とが明白にわたしへ云ひきかしてくれた時、わたしの腰かけたその石だ。わたしは村へはだかる大無花果の樹と、又その上にあるべき星の位置を見た。
- 三八、——わたしが若し溫柔な生活を送つてゐたものとしたら？ それは生存者なら誰へでも少しは與へられるものなのだ。
- 三九、——誰へでも與へられる唯一の物だからだ。
- 四〇、——で、若しさうだとしたら——即ち、爰へ永住する。労働によつて規則正しく營む一軒の家を持つ。
- 四一、——廣場の大無花果や戸口の普通の無花果や、
- 四二、——又見るともなしに再びかく目についた、あらゆるかうした事物とは、常にお隣りづきあひする。

- 四三、——わたしにも妻がある。妻でもあり、友達でもある。
- 四四、——二人のからだはわけもなくグタリとなつて、たゞもうお互に寄添つてばかりゐる。
- 四五、——わたしにも子供がある。
- 四六、——一人、二人、もしくは三人。
- 四七、——これが、砂漠よりズツとわるい、又われ／＼よりはもつと大聲で叫びつゝある都會の砂漠中で、どなり立てる代りにだ。
- 四八、——又人々の攘斥を物ともせぬ代りにだ。
- 四九、——日のあるかぎり、わたしはかうして考へてゐた。
- 五〇、——と、黄昏になつた時、わたしは自分の幼年時代まで溯つて、その奥にあつた清淨無垢と再會した。
- 五一、——わたしは寶物として人の持つ單純そのものを拾ひあげた。
- 五二、——『汝の絶叫を示せ。常に行け。行けるかぎりのところへ行け。』
- 五三、——さうして人間中の人間になれ。』
- 五四、——朝、人々はわたしを取巻いて口々に云つた。『爰に臥てゐる病人をなほせ。』
- 五五、——この病人は手のひらのやうに目が見えないのだ。』

- 五六、——かれ等はさも憎さげに又苦々しげにさう云つた。この村ではわたしを信するものなど誰一人ゐなかつた。
- 五七、——あんまりわたしを知りすぎてゐたからだ。わたしの母やわたしの兄弟を知つてゐたし、又わたしの父をも覚えてゐたからだ。
- 五八、——さうして、『なアんだ。建具屋のイエスぢやないか？』と繰返してゐた。
- 五九、——かれ等はどこまでも信用しなかつた。
- 六〇、——わたしはこの病人のからだを天眞爛漫にさせることができなかつたので、
- 六一、——かれの病氣はなほらなかつた。
- 六二、——が、わたしは昔この村を出た時に小さかつた犬を見つけた。かれは年とつて、又年のせいで目もあけない位であつた。が、一寸目をあくくと、かれはわたしを覚えてゐた。さうしてとびあがるほど喜んだ。この犬だけは、生まれ落ちると死ぬまで、ズツとわたしを愛しつゞけてゐてくれたものだ。わたしは併しもうほとんどかれを愛してはゐない。さうしてわたしの中のかれの死はかれの中のそれよりも余計に悲しい。
- 六三、——で、やがてこの犬が死ぬであらう時、
- 六四、——かれの死は生と同様に重大なのだ。

六五、——が、わたしはたゞほんのすこしばかり不愜だと思ふだけだらう。

六六、——マリヤ・マダガラ。

六七、——かの女はわたしをまじく〜と見てゐた。が、やがて両手をふるはしながら、わたしに近よつた。わたしはかの女に云つた、『觸つちやいけない。』と、かの女はわたしの前に立止まつた。さうしてかの女の兩腕はブラリと垂れた。

六八、——わたしは好奇心に驅られて、かの女に云つた。『マリヤ、マリヤ、あの時分、わたしと一緒にゐた者達はみんなお前のあとを追蒐けたものだ。さうしてお前はいやとは云はなかつた。』

六九、——が、わたしにだけはお前はいやだと云つた。』

七〇、——かの女は云つた。『それはわたしがあなたを愛してゐたからです。』

七一、——子供のやうなかの女の聲がつゞけた。『が、今日では、夜はわたしの夜になりました。』

七二、——スツカリではなくとも、わたしはせめて少しなりと、自分の心の弱點をなほさうと思つてゐます。

七三、——さうしてそれは暗い影なんですから、わたしは一杯目のあつた砂漠へ行かうと思つてゐます。』

七四、——かの女は白い着物をきてゐた。と、その白衣の上へ太陽が天使のやうな白さを添えてゐ

た。

七五、——かの女は預言でもするやうな恰好になつた。

七六、——『あなたは不幸な人達を慰めておやりになるでせう。』

七七、——あなたがどんな事をなさるかわたしは存じません。

七八、——みんなの先立ちにおなりになつて、あなたは罰せられるでせう。

七九、——敵には打たれ、友達には棄てられるでせう。

八〇、——あなたを助ける者は、あなたきりになるでせう。

八一、——それからわたしきりに。世すて人の、あはれなわたしは、あなたを助けずにあなたを助けるでせう。』

八二、——かの女はなほ云つた。

八三、——『わたし達にとつて、あなたがどんなに嬉しいお方であつたか、あなたは御存じにはなれませんまい。あなた一人が御存じなのです。わたしが、「あなた様」と申上げる時、あなたにはわたしの申すことがおわかりにならないのです。』

第二十五章

- 一、——或夜、われ／＼が一週に大きくなつたのは、丁度その頃であつた。
- 二、——諸天が開いたからだ。
- 三、——諸天が紅海の如くわれ／＼の前へ開けたからだ。
- 四、——諸星がおの／＼その孔から、一齊に天を引裂いたからだ。さうしてわれ／＼の魂が、仰いだわれ／＼の眼を通りぬけて、その一切の光明體へまつしぐらに昇つて行つたからだ。と、われ／＼はわれ／＼から出發して、歡喜と變る無窮そのものを感じた。
- 五、——大地の如く底深いわれ／＼が感じたのだ。
- 六、——『奇麗だ。まつたく何もない。』
- 七、——青い斑点あるわれ／＼の薄黒い一團に、わたしの出させたこの言葉は、そのまゝにわれわれの各自によつてつくられた星の園生であつた。
- 八、——星は即ちわれ／＼の視線の末端であつたからだ。
- 九、——又われ／＼を通じて、深く夢中へ根を卸してゐたからだ。
- 一〇、——一人が云つた。『天まで行かう。』
- 一一、——わたしは思はず口を出してこの世界の話をした。
- 一二、——『これはわれ／＼の肉なのだ。われ／＼の血なのだ。』

一三、——天まで行つても、人は自分自身からは、又自分の視線の肉からは出られないものなのだ。

一四、——それが即ち正義の美だ。』

一五、——小計算家の、憐れなるユダは、恰もその外套の内へ夜光の珠でもかくしたやうに、背中を丸くして、そこから去つた。で、わたしをすてた後、はしやいだり沈んだりしてゐたかれに逢つて、或人がたづねた。

一六、——『すると、あの男は何を云つてたのかね？』

一七、——憐れなるユダはいそ／＼と答へた。

一八、——『自分が新しい神だと云つてゐました。』

第二十六章

一、——で、わたしは、どう自分が振舞つたらいいか、自分ではわからなかつた。

第二十七章

一、——雲のたゞよふ黒い圓丘の上に、冬がその齒でかみちらしたやうな細い木々が林立してゐた。

- 二、——さうしてそれは腐爛した人體の附着せる十字架であつた。
- 三、——刑場の麓には、戦敗者の大きなからだが地に横たはつてゐた。
- 四、——で、その周囲には、面上に稻妻のある、猙獰なかれ等が悲嘆にくれてゐた。
- 五、——ヨルダンのあなた、又ヨルダンの河畔なる、ガリラヤの山林から下つて来たかれ等、即ちヤイロ、エレアザル、ヤコブ、わたしの弟子のシモン、ユダ・バラバだ。教へんがために或夜出かけて行つたわたしの弟子のシモンに、かれ等は教へられたものであつた。
- 六、——世間には、パリサイ、サドカイ、エセネといふ三宗門がある。が、かれ等はそれ以外のゼロテ宗徒だ。雷の申し子で、顔に稻妻がある。
- 七、——だから、ボアネルゲ（雷の子）と呼ばれてゐる。
- 八、——その一人が口をきつて、一伍一什を物語つた。
- 九、——かれは物語つた。『みんな武装して、このユダ・バル・ユダと一緒に出かけました。（最高の天使ガブリエルが、その母親のサロメに、お前の子はダビデの王位に昇るだらうと云つた、その人です。それを殺さうとして、ヘロデがその時生れた赤ん坊を残らず殺して了つた、その人です。）で、羅馬の軍隊と衝突しました。無論、衆寡敵せずでした。ユダは機を逸せず、このペリシテ人どもの、三人までやつつけました。かのベナヤや、アサヘルや、ベテレヘムの子エタナンや、又そのほかのダビ

デ王の家來達のやうに。が、今度は自分がやつつけられて了ひました。わたしは併し逃げおぼせました。さうして夜に乗じてとつてかへし、暗闇の中を手さぐりしたり、ふるふる足でけつまづいたりして、敵の遺棄したユダの死骸をやつとさがして来たんです。』

一〇、——『かれ等かれを殺さん。』と女卜者は云つてゐた。

一一、——それは昨夜のことだつたが、この通りだ。ユダ・バル・ユダはユダヤ人に羅馬の租税を拂はせまいと欲したのだ。かれは葡萄酒にかぎらず、酔ふ飲物は一切のまなかつた。又自分のからだへは誰にも決して香油を塗らせなかつた。入浴も嚴禁してゐた。信心家で、常に跪くため、その膝の皮が駱駝の膝の皮のやうに硬くなつてゐた。

一二、——立派な聖人でもあり、立派なゼロテ宗徒でもあつた。

一三、——かれは完全無缺であつた。

一四、——全く神意に適つた聖人だつた。

一五、——生まれる時、サムソンや、サムエルや、又ヨハネ・ザカリヤと同様、かれは特別のお告げを蒙つたものだ。

一六、——そのヨハネ・ザカリヤの聲は、われ／＼の事業の方針中で、颯風の迫る前兆雲のやうに飛びまはつてゐる。

一七、——『ユダは若き獅子なり。』とモーセ書の中のヤコブが云つた。『岩上の鷲爪を垂れ、半眼を閉ちてユダの伏す時、誰かかれを起さんや？』

一八、——この禁浴者の横はつてゐた場所を見まもりつゝ、叛逆者達はやがて云つた。

一九、——『だが、ユダはこのまゝ死んでは了はないだらう。カプリエルはうそをつくまい。死骸はきつと立上るにちがひない。』

二〇、——ユダはグツスリ寝込んで了つてゐるのだ。ユリウス・カイザルの歡心を買ふために、方伯ヘロデが死刑に處したエゼキヤのやうに。神殿と祭壇との間で、咽喉を剝られたカマラのユダのやうに、又同様にそこで殺されたザカリヤのやうに。かの互に犇と抱き合つたまゝ、羅馬人の手にかゝつて殺されてゐた五千人の、城を枕に討死した人々のやうに。かの進み來る羅馬の軍勢を目がけて、山上から妻子を突落し、つゞいて自分達もとび込んで行つた人々のやうに。羅馬人と媾和するものは咀ふべきだ！』

二一、——ひとりのユダヤ人が、その両手を棕櫚のやうに突きあげて云つた。『悪ユダヤ人は本當のユダヤ人の眞の敵だ。』

二二、——一老人はからだ中をゆすぶつて叫んだ。『エルサレム、エルサレム、お前はお前の預言者達を殺す。お前に送られた人々を石で打殺す。アベルから、神殿と祭壇との間で殺されたザカリヤま

で、地上に流した一切の罪なき血潮は、再びお前の上へ降りかゝるのだ。』

二三、——火のやうに眼をかゞやかした一ユダヤ婦人は、聲のかぎり悲しんだ。『わたしの膝の上で大きくなつた息子はどうなつた？ わたしは知らない。大暴風雨がやつて來て、わたしの手から息子をさらつて行つて了つたのだ。それでもまだました。エレアザルの娘、ベデゾルのマリヤは、饑えたユダの兵士達に、自分の子供を食へさせた、と云つてゐた。』

二四、——夕闇の中にかれ等の眼が一齊に大きくなつた。

二五、——『さア、あの恐ろしい柱を取除いた、十字架のない磔刑者のやうに、この死骸がまづ兩腕を伸ばしたまゝ、まだ死のうちに昏睡しつゝ、フラ／＼と立上るのが見えるだらう。』

二六、——恰もかの復活したカマラのユダや、サドクのやうに。で、民衆の云ふところによれば、この二人の口からは火を噴いてゐたさうだ。又この二人には、雨を降らさないため、天を閉ぢる力があつたさうだ。これは希臘人が *Martyrs* と稱してゐるところの、この二人の證人、即ちこの二人の聖人達に起つた事だ。

二七、——同様に、この死骸の天へ昇るのが見えるだらう。さうして晝の**ひな**の日中のやうに、この死骸の影と踵とが、地上で分離するところが見えるだらう。

二八、——かく君の眼前には、死んで横はる者どもと、そのまはりに立つ者どもとがある。ところ

で眞理の中ではこれは同じものだといふ。とすると、立つ者どもと、さうでない者どもとは、區別がつかなくなる。従つて、君はわれ／＼を無視することになる。」

二九、——と、その面上の眼玉のない二つの穴で、このなが／＼と横たはつた武士が、生残つた者どもの云つてゐた事をば、まじ／＼と眺めてゐた。

三〇、——自然の風がかのヘロデ奥をわづかに吹きちらしてくれた砂漠の中で、かれ等はかく語り合つてゐた。

三一、——曰く、『大衆はたはいがない。何でもそばから忘れて了ふ。が、われ／＼聖者たるものは、イスラエルの勇氣を地から叩き出すことだ。』

三二、——又その信仰をも。

三三、——イスラエルは選良の民だ。一種の通話機で、シナイの山頂から、かれ等に語つた神によつて、宇宙はユダヤ人に與へられたものだ。ダビデ民族は、神が自身の指先で、一度ならず、二度までも刻みつけた律法の板、即ちモーセへ與へた親和の約を履行して、ユダヤ民に命令すべく、ユダヤ及び海内の全世界に君臨すべく、さうして敗北者の勝利を齎らすべく、精選されたものだ。

三四、——われ／＼ゼロテ人、カナ人、ナザレ人等はこの『契約』の相續者だ。

三五、——將にはじまりつゝあるところの、世界のこの最後の千年間に、七頭の怪物なる、羅馬の

篡奪者に反抗して、カイザルに、ポンテオ・ピラトに、又エドム人エサウの赤顔赤髪と、デカポリスの十角を有する赤龍アンチパスに反抗して、ユダヤ人の成功を將來せしめよ。

三六、——又鉄鞭をもつて諸國民を牧せしめよ。

三七、——イスラエルをして羅馬の鷲どもを侮蔑せしめよ。われ／＼が聖書を理解し、聖書に生きるのはそこなのだ。

三八、——エドムの惡種から出たヘロデが、神殿の上に据ゑた純金の鷲をば、かのユダ・ベン・チツポリとマツテア・ベン・マルガロテとが處分したやうに、われ／＼をして實際にその鷲どもを引抜きにゆかしめよ。かれ等はヘロデ大王の面前でそれを引抜いた。「誰がさうしろと云つたか？」われ／＼の神聖なるモーセ書です」とかれ等は王に答へた、

三九、——決行する者どもがモーセ書の本當の博士達だからだ。」

四〇、——すると、かのガブリエルもどきの姿して、なが／＼と地上に横たはりつゝ、その眼窩で、まじ／＼夜とわれ／＼を眺めてゐた死骸が、同様に口を開いて、『さうだ。』と云つた。

四一、——『かれは死にました。が、一寸一時死んでゐるだけです。』と、ユダ・バラバが云つた。で、わたしの方へ向いて、

四二、——『あなたはユダヤ人の王になりませんか？』

四三、——われ／＼の尻押として、あなたはもつて来いです。

四四、——あなたは、癩病やみを清めました。盲の目をあけました。又腰ぬけどもまでも治しました。

四五、——御承知のとほり、わたしはあなたのお言葉を帯して、それをみんなに教へるため、或夜出かけて行つたのです。

四六、——われ／＼はあなたがナザレ人と名のつた事や、富者に反抗して神の王國を叫んだ事や、又正義と憐愍と信仰とを説かれた事をききました。

四七、——ところが、正義とは、ダビデの王を復興する事です。憐愍とは、ユダヤ人の身分を憐む事です。信仰とは、ユダヤ人の報復の事です。

四八、——これらの事に對して、あなたは何とお答へになりますか？ あなたは黙つてゐらつしやる！ あなたには答へることが何もないのですか？

四九、——申上げて置きますが、われ／＼はモーセの掟の、それから神の王國と永遠の命とのために戦ふ、侵略的ユダヤ人の不朽の光榮たる終局的格闘の、眞正なる又唯一の完成者です。

五〇、——救世主の名は、イスラエルの後裔なる大衆によつて、連綿として擁護され又歡呼されるであります。

五一、——この名は來世の謂ではありません。墓場の丘の中へは天は映らないからです。過ぎ去つて、埋もれて了ふ人間は、蛆蟲も吐き出しはしないからです。

五二、——眞の「候補者」は門口で待つてゐます。かれはユダヤ人がアバドンとよび、希臘人がアポリオンとよぶ熾天使の如く、活躍するでせう。

五三、——必要とあらば、海上でも太陽の上でも歩くでせう。又その軍隊を養ふために、無一物からどし／＼パンをこしらへるでせう。

五四、——そこで、あなたはその「候補者」になれるのです。

五五、——お願いですから、救世主的ベストとなつて下さい。

五六、——水を血に變じ、島の土に災害を與へて下さい。

五七、——自ら金持になるために、金持を殺して、神殿の中まで炬火をかつぎ込んで下さい。

五八、——パンを騰貴させ、小麦の穂が一デナリもして、飢饉になるやうにして下さい。

五九、——それこそ革命的絶好條件です。

六〇、——救世主の言葉があなたを通して、麵棒ムギロの如く都會々々を轉がりまはつてほしいのです。

六一、——もたらすのは平和ぢやなくて、劍です。人に租税を拂はせようとするへロデ家や羅馬人、それから姑息儉安をのみ翼ふ神殿の腰ぬけどもの下ツ腹を突きとほす劍です。

六二、——かれ等はみんなユダヤ、サマリヤ、及びパレステナを新しい埃及にして、了つた奴等です。

六三、——「カイザルのものはカイザルに返せ。神のものは神へ返せ。」

六四、——それは租税のデナリについてさう云つたものです。

六五、——デナリは銀と真鍮の合金です。

六六、——愛撫する銀は神のためです。ひつばたく真鍮はカイザルのためです。

六七、——口を開けば霧を語る砂丘の獅子であつて下さい。

六八、——人は正しい事をするために、又不正な事をぶちこはすためにつくられてゐる、とかれ等が申します。

六九、——かつて猶太教會で、あなたは、(わたしはこの耳でたしかにききました)「神の王國は現在亂暴人どもの手中にある。」と、ハツキリ仰しやいました。

七〇、——従つて、それ以上に亂暴なものどもの手に這入るでせう。

七一、——イスラエルをしてその祖先の地に轉々しつゝある追放状態から脱却せしめんがためには、この外に道はありません。

七二、——モーセのモーセになつて下さい。」

七三、——かつてわたしの考へた事の一部分をば、かれ等はわたしに向つてこんな風に云ふのだ。かうした言葉は三十棒の如く痛快にわたしを打つ。

七四、——黄昏の空中へ、わたのそばへ一人々々身を挺して、その手でいろ／＼な仕草をしつゝ、それ等のユダヤ人が口々に云ふ。

七五、——「あなたはユダヤ人の王になりませんか？」

七六、——かれ等の間は肉と血に充ち／＼てゐた。さうしてその胸を突きつけてわたしに迫つた。

七七、——わたしは答へた。『君等の叛逆はまだ充分に大きくない。』

七八、——僕は諸君の徒黨を信じない。諸君は畢竟拳の結束にすぎないからだ。諸君は羅馬人の力量如何を顧みないで、そいつへぶつつかつて行く。さうしてその上で自滅すべく、又その上で、しかもそれよりはズツと大きいイスラエルの希望をば粉碎すべく、諸君は續々と驅け出して行く。不可能の事で安寧を誘惑してはいけない。

七九、——のみならず、諸君の夢想は血迷つてゐる。即ち、報復であつて、正義ではないのだ。一民衆の夢であつて、民衆そのものゝそれではないのだ。

八〇、——よしダビデがダビデのかたちをして歸つて來たところで、人間から不幸を取除けるだらうか？ かれはたゞよからぬ戦争を將來するにすぎなからう。負けたにつけ、勝つたにつけ、戦争を

産む戦争だ。』

八一、——『それでは、あなたは、屁理窟屋のバリサイヤ、女郎のやうなサドカイヤ、影辨慶のエセネヤ、さもなけりや、不得要領のうちに羅馬人を愛する理由をさがしつゝある腰ぬけの博士達と、同じ事になりはしないでせうか？』と、かれ等が突込む。

八二、——『斷じてちがふ。併しバベル塔を再建し、失樂園を恢復するには、一大巨人が必要だ。』

八三、——君等はその巨人ぢやない。その巨人はどこにゐる？』

八四、——『その巨人になつて下さい。』と、かれ等は一齊に答へる。『あらゆる王國の見えるこの山上から、思ひきつて行動中へとび込んで下さい。』と、かれ等はわたしに迫る。

八五、——これは一個の誘惑であつた。

八六、——が、それには實物の體面が具つてゐなかつた。

八七、——『僕は一切人間の無限地獄へならとび込まうが、諸君の井戸の中へとび込むのは御免だ。』

八八、——かれ等は反駁する。『われ／＼の使命は不可能だとあなたは仰つしやる。それでもわれわれはやつて見るのです。不可能をやつて見てこそ、はじめて一切の可能が完成するからです。』

八九、——わたしは云ふ。『その言葉は正道に立つた時、はじめて偉大だ。』

九〇、——僕は僕自身の名によつて物は云はない。併し一切の僕の同類の名によつて云ふ。

九一、——諸君の所謂諸王の争ひは、僕はもう認めてゐない。

九二、——人間はその皮膚の上に一國の色はもつてゐない。荒涼と塵埃の、偉大なるかれ等の仄暗い暮色のうちに、僕はかれ等人間を見る。

九三、——さうして僕は一祖國の悲痛な姿をひきづつてゐる。この祖國の周邊は世界の地平線だ。この祖國はまだ存在してゐない。さうしてしかも存在してゐる。

九四、——僕は暴風雨がユダヤ的だとは思はない。』

九五、——わたしはかれ等ゼロテの精神には敗北者である事を承認した。シモン・バル・ユダは怨めしさにわたしを見た。

九六、——恰も槌の一撃の如く、かれはその上わたしに云つた。『みんなにはあなたがわからんでせう。さうしてわからん方がもつともでせうよ。』

九七、——とある夕暮、絡繹たる行人も一砂漠の觀をなす道の上を、

九八、——わたしの言葉を帯して、シモン・バル・ユダは出かけて行つたものであつた。

九九、——すくなくともわたしはさう信じてゐた。かれも又さう信じてゐた。

一〇〇、——ところが、事實はわたしの言葉まで達してゐなかつたものだ。

一〇一、——さうしてかれは他の人々と共に、『あなたは下らん。ほかへ行つて説教なさい。』と云つて、わたしを追拂つた。

第二十八章

一、——ダマスコへ行く道で、或日、わたしは一人の男に逢つた。その男がわたしに云つた。『わたしはあなたの弟子のパウロです。わたくしは世界を遍歴しました。あの晩わたくしはシモンと共に、あなたのお言葉を帯して出かけたのですが、シモンはあなたを裏切りました。』

二、——ゼロテは強盗です。

三、——支配するために、かれ等は盗んだり殺したりします。しかし支配などはできませんまい。却つて迫害と逮捕とを招くでせう。』

四、——かれはつゞけて云つた。『が、希臘人や羅馬人の大業もその基礎がぐらつく時代がまゐりました。』

五、——つまり、事物の混乱と人間の苦惱とをひしかくし、その上へおツかぶせて、たゞそれを適法にしてゐる似而非秩序にすぎなかつたものです。

六、——ところが、爰にユダヤ的氣息に甚だよく似てゐる一氣息があつて、それがこの希臘的小細

工に反抗して、一切の人間をば、さなからたゞ一人の人間のやうにして押進めてをります。

七、——この氣息こそ即ち生命です。

八、——世界の根柢に對しては、世界の表面が何物でありませう？

九、——御承知下さいまし。われ／＼の祖先の宗教の一新形式が、われ／＼によつて用意されてをるのです。

一〇、——で、わたしはあなたに申し上げます。あなたはその新形式にもつて來いといふお方です。』

一一、——わたしが云つた。『どういふ風にそれが新しいのか？』

一二、——『救世主の光來によつてです。』

一三、——『併し、救世主は來ちやゐない。』

一四、——かれ。『救世主が若しお出でになつてゐないとすれば、イスラエルの民は待ちくたびれて、途方にくれて了ふでせう。又さうなると、誰にでも、「俺が救世主だ。」と勝手に云へる事になりませう。さうしてそれが同時に滅亡の陥穽ともなりませう。』

一五、——それから又救世主のお振舞は、やがてそのまゝに、かねてわれ／＼へ啓示されてあるところの、かの第二の掟の本体です。

一六、——救世主はお見えになつたのです。更に確定的にもう一度お見えにはなるでせうが。

一七、——われ／＼新人どもが高所に立つて見るところはかうであります。

一八、——世界は、たつたひとり人間、すなはち最初のアダムの罪によつて亡び、さうして死に委せられて了つたものですが、又たつたひとり人間、すなはち特別に神に送られた最後のアダムの血によつて、それから以降の世界は救はれ、さうして生に捧げられるのであります。

一九、——然るに、最初のアダムは、肉の外的人間でありました。さうして最後のアダムは、靈の内的人間であります。

二〇、——で、靈は現在天祐の運河を通つて、われ／＼新人どもの頭上へ落ちました。これはわれわれがこの福音を人間達に告知するためであります。又われ／＼が、かれ等の肉躰の運命と、その魂の運命とを、あらかじめ兩断して置いて、さて來世と死の撤回とによつて、かれ等を隨喜させようといふのであります。さうしてこの福音が神殿の掟を廢止する事や、又この福音の信仰が、戒律でござれ、行道でござれ、一切のものに入れ替るといふ事を云ふためであります。

二一、——さうして爾來、救世主のすばらしい牢獄ができあがつたわけです。

二二、——これは、あなたや、又あなたのやうな他の方々が、靈の爲め、内的人間のため、正義のため、生命のため、たゞ貧者だけのために語り、宗儀や、金持や、死屍に等しき掟に反對された事、又民衆がそれをきいて、あなた方の通りすぎるるところであなた方を喜んだ事、さうしてあなた方が、

世界の心を掌握された事等を、われ／＼が知つたからであります。

二三、——（かくあなたはわたくし自身からわたくしを引出して下さいました。さうしてあなたが大地の叫聲をあげた原因であり生命であつたものです。）

二四、——又一方では、さうした一切は悉く聖書中の諸約束から演繹され得る事も、われ／＼が知つたからであります。

二五、——即ちあなたがわれ／＼の味方でゐらつしやる所以です。つまり、民衆があなたを愛する事、あなたと共に叫ぶ必要を感じる事、又民衆自らが奮つて教會を設置すべき事などから推してゝす。』

二六、——わたし。君はそんな具合に僕の云つた上へもつて行つて、まるつきり一つのカラクリをこしらへて了つたわけだ。

二七、——それは感心できない。

二八、——僕が靈と云つたら、靈なのだ。人間の額の上を飛びまはる儀式めいた事ぢやない。僕の口にする正義は、正義そのものだ。それには物が充實してゐる。僕の生命は死人どもの夢ぢやない。僕は生命から生命を追ひ出すためにやつて來たんぢやない。墓場に血を出させるためにやつて來たんぢやない。魔術でも何でもなし。

二九、——それとも反対に、僕の云つたのは、教義や儀式の撤廢だ。又赤裸々の天真だ。又鐵石の心から迸ばしる義務だ。又われ／＼自身で開始する事だ。それから僕の説いたのは取戻しの福音だ。宗教のない福音だ。さうしてそれがこの世に於ける僕の唯一の眞價だ。』

三〇、——『そこに新があります。と、かれはもつとよくわたしに應ずるため、一層力瘤を入れて云つた。『詩篇に従へば、われ／＼は死を神の足下に置いたのです。われ／＼は人間どもの死を悉く喚びましたのです!。』

三一、——『君等は眠つてゐる者達の亡魂を喚びましたにすぎない。僕は生きてゐる人間達を復活させたいよ。』

三二、——そこでかれは答へた。『われ／＼はあなたが入用です。われ／＼の若き聖書のために。又掟を振起させんがために。』

三三、——かれは虚弱で且つ激し易かつた。さうして地から放れさうに見えてゐた。

三四、——かれは慷慨悲憤と、才華紛亂と、エレミヤとエゼキエルと詩篇の諸斷片で一杯になつてゐた。かれは烈火の如く喋り立てた。さうして一大天才を發揮した。

三五、——で、自分のしやうと欲してゐた偉業をば、かれはわたしの内部へ据ゑつけんがために喋つたのだ。

三六、——曰く、『そこで、新結束ができたのです。』

三七、——萬世のために、今日その結束を完成して置く必要があります。

三八、——一個の固有名詞で一切の古き預言に烙印すべき時です。

三九、——未來を失はんとしつゝある神として奮勵せしむべき時です。

四〇、——預言者がさう言明したとほり、神は人間に似てゐなければなりません。』

四一、——わたしが云つた。『同時に神と人間とになれる者がどうしてある?』

四二、——若し或神があつて、その神が肉躰の形式をとり、一個の過ぎ去るものゝ態をなすとすれば、それは畢竟人間の詐偽だ。

四三、——人間のみが人間的だからだ。』

四四、——かれが云つた。『神はわれ／＼の自然を掴むと同時に、われ／＼をして神の自然を掴ませるのです。』

四五、——わたしは答へた。『いけない。』

四六、——かれが答へた。『詩篇にあるとほり、しばらくの間その人をば天使以上へまつりあげて置く必要があります。是非あります。』

四七、——かれは烈しく云つた。『その人は又寛仁大度でなければなりません。(それはわれ／＼が慈

悲と忍辱との一合金をつくり、その新物で新人をつくるのです。又それによつて、ユダヤ的抗議と、東洋的恍惚と、希臘的理性とを併せ呑むのです。』

四八、——『そんなやさしい生物、そんな天の心はどこにある？』

四九、——在來の上へもつて行つて、もう一つの神殿の、大きな新しい墳墓を夢みつゝあつた、この『宗義』の偶像信者は、じろくわたしを見まもつて云つた。

五〇、——『それは恐らくあなたのことでありませう。』

五一、——わたしはふき出した。

五二、——『僕を餌食にしちやいけない。君と共通のところは僕にはすこしもないんだからね。』

五三、——恰もその思想が滾々と溢れいづる人達同様、かれはわたしの言葉など耳にも入れずにつた。

五四、——『鮮血淋漓たる英雄に追隨して、人は一切の人間をば新秩序の中へ導いてゆけます。』

五五、——その英雄はダビデの末裔でなければなりません。さう書き誌されてあるからです。

五六、——さうして未來の救世的大約束がかれの双肩へ落ちかゝるために、又かれの肉躰の上で建設ができるために、その英雄は早く死ぬ必要があります。

五七、——復活できるために死ななければならぬのです。

五八、——聖書に徴してもさうです。又あらゆる羅馬圏内の國々へ東西南北の風が吹き蒔いた夢想に徴してもさうです。

五九、——西にスリヤ人、ベニケ人、北に希臘人、東にバビロニヤ人、又南には埃及人がゐて、あらゆるこれ等の人々には、みんな、自分達の腕の中で死んで甦へる一個の神を信じ、又さうした神秘を愛する點に於いて、互によく似てゐます。(かれ等はめづかちだから、たゞかたツぼの目だけで、この神秘を見てゐるわけなんですが。)

六〇、——で、もしもそこに全世界の準備がなかつたとすれば、われ／＼の宗教は要するに一個薄弱な誤謬にすぎないものでせう。

六一、——かれ等からその血の洗禮とその肉の聖餐とを曳き出す必要がわれ／＼にはあるのです。

六二、——又その復活をも。

六三、——希臘哲學者等はそれに魂の不朽といふ名をつけて、穩やかに愛してゐます。

六四、——さうしてすべてそれ等のものを一個の新混成躰にこしらへて置いて、それをわれ／＼ユダヤ人のものにしなければなりません。

六五、——要するに、わたくしがもしかれ等の模倣をしないとすれば、どうしてわたくしは偶像信者等のカラクリがこはせませう？』

六六、——わたしは云つた。『模倣されたものはこれやしない。』

六七、——それから又、『ユダヤ人はいくら救世主を渴望したつて、救世主の來たことは決して信じようとは思ふまいよ。』

六八、——かれが云つた。『ユダヤ人の叫びと、さうしてその小羊とは、この混成躰中の麴醉です。が、もしこの民族が蹉跎すれば、みんなはこの民族を追出してさふでせう。』

六九、——わたし。『たつた一つの罪名で、その人間を一切人間中へ封じ込めてさふことは、とりも直さずその人間を陥れることだ。そこで、『地上には罪なきもの一人もなし！』と誰が云ひ得る？ 神の愛がわれ／＼を贖つてくれる、と君は云ふ。それこそ王侯のお道樂だ。

七〇、——正義をつくらなければならぬのは、不正の後ぢやない。即ち生活の後ぢやない。正義は人の子に快い筈だ。さうは書いてはなかつたかね？ 「人の子に」だよ。「その未來の影に」ぢやないよ。

七一、——又君はいろんな公式で墓場へもつて行つて二重底を設ける。

七二、——君はその穴、即ち死の恐怖といふもので、靈に不意打をくはす。さうして墓石で靈を打殺す。君は君の口先でうまいこと死を永遠といふ言葉にとりかへてはゐるがね。さうして君は神をば迫害者等の同類にして了つてゐる。』

七三、——『神は仰せられました——』とパウロが云つた。

七四、——『その神だよ！』とわたしは云つた。『その神が「汝等は死すべし！」と云つたのだ。で、『お前達は決して死にやアしないよ。』と云つたのは蛇だ。死にやしない、と人間達へ告げ知らすのは、この世の罰せられた者共に對して、かれ等が——生ける屍の旗章の下に——自分達の生活を生活してゐない事や、又自分達のはかない人生の日數を空費させてゐる事などについて、惡魔的忠告を吹き込むことなのだ。』

七五、——『併し、』とかれが云つた。『御自分の苦惱によつて人間達を購つて下さる神様は、實に何とも御立派ぢやムいませんか？』

七六、——わたしは云つた。『煽動家！』

七七、——『それから、』とかれは附加へた。『若しわれ／＼の信仰があつた世にあるものとしませれば、世の強者達は困らないでせう。で、われ／＼をそつとして置いてくれるでせう。』

七八、——わたしが云つた。『幽靈法律へ眞理を縫ひ込ませようとするのは君のまちがひだ。君はたゞ神に對する人間の愛がいかに自然に反した一感情であるかを示すにすぎなからうよ。』

七九、——その返事はかうであつた。『われ／＼が超自然だと申すのはそれがためであります。』

八〇、——かれは絶叫して云つた。『「われ賢者の賢を除かん。われ智者の學を滅ぼさん。」と誌さ

れてあります。この世の賢は畢竟一狂愚にすぎなかつた事を、神は示しては下さいませんでしたか？ さうしてわれ／＼の説く狂愚によつて、信する人々を救ふ事は、神の思召にはかなつてゐたのです。』

八一、——わたしは云つた。『詭辯家！』

八二、——遠くから見ると、かれはイスラエルの一預言のやうだつたが、近よると、かれの長衣から希臘的打算の臭氣がブン／＼してゐた。

八三、——わたしが云つた。『人間が目を開くと、粉微塵になつて了ふやうな一權威を正しとすることは禁物だ。』

八四、——人間はきつと目を開くからだ。

八五、——かれは人間の偉大は人間から出てゐる事を認めるだらう。又一切人間の偉大は一切人間から出てゐる事をも認めるだらう。

八六、——かくして人間の運命と一切人間の運命とは互に類似して同じものになる。

八七、——君の変更は變更ぢやなくて、下らぬ事に大骨を折つてゐるのだ。』

八八、——かれはわたしに云つた。『あなたは御自分の仰つてゐる事にお氣がつかない。』

八九、——人間を陶冶すべき、

九〇、——又指導者等によつて支持せらるべき、

九一、——厳格な儀式に基づいた、一定の掟が必要であります。

九二、——内面の神秘は公然とは見られません。さうして一切がそこにあります。

九三、——世界を進行させるために、目に見える力と諸王の協賛とが必要です。

九四、——又天の装置を地上に打ちつけるための釘が必要です。

九五、——又詩篇に由來するところの、そこへ釘つけるための十字架が一つ必要です。』

九六、——自分の腕の中へかゝへ込んで、それを自分の神話の中心へ据ゑつけるために、暗殺されたわたしのからだが入用だつた、さうしたかれがわたしに云つた。

九七、——『王中の王になつて下さい！』

九八、——わたしは云つた。『僕の弟子にはね、王だとか、既成秩序だとかの兵卒は、斷じて一人もゐなからうよ。併し僕の弟子にはね、正義の兵卒どもがゐるだらうよ。』

九九、——パウロがわたしに云つた。『イエス、あなたは御自分の仰つしやつてゐる事にお氣がつかない。同時にユダヤ人であり、希臘人であり、羅馬人であるわたしは、あなたよりはすつと有力ですよ。ほかへ行つて説教なすつて下さい。』

一〇〇、——かれは地上で成功する

一〇一、——建築癖ある人物の種類に屬してゐた。

一〇二、——とてもすばらしい一パリサイであった。

第二十九章

- 一、かれが立去つた時、わたしは一人きりでゐたくなつた。
- 二、——人目を避けるために、わたしは砂漠へ赴いた。わたしはいろ／＼な思想にかきみだされてゐた。又人力以上の疲労に身動きもならなかつた。
- 三、——かの叛逆者等のおかげでもあり、又かの博士のおかげでもあつた。
- 四、——あのパウロだつて、ゼロテのシモン同様、わたしの思想を帯して世の中へ出かけて行つたものだ。が、かれもやつぱりわたしを理解しなかつたのだ。
- 五、——そんなやうなわけで、眞理を蒔くに方つて、わたしは二つの方面からウソを蒔いて了つた。

六、——正義の完成には、この兩道しきやないものか？

七、——天國は畢竟玉座の如く大いなるエルサレムの事か？ 或はたゞ墓地の内部の事か？

八、——夕陽の傾いた時、突然、砂と石との地平線上に方つて、宮殿、樹木、庭園、及び脚下にはそれ等の影を映す湖水、又頭上には崇巖なる一大光輝を具へた都會が一つ、まさ／＼と見えるやうな

心地がした。

九、——これは砂漠旅行者等の錯覺であつて、この市街とこの光輝とは實物ではなかつた。さうしてたゞわたしの眼中にあるだけにすぎないものであつた。

一〇、——眼を開いては、わたしがそのすべてをつくり、眼を閉ぢては、わたしがそのすべてをこはしてゐるものであつた。

一一、——これはさうした能力が人々にある證據だ。それでいつもかうなるのだ。

一二、——つまり地平線をひろげたり、空間をまきちらしたりするには、視線が一つ必要だ。世界が生きるためには、どこかに一つ呼吸が必要だ。

一三、——それがかれだ。わたしの所謂「人間」だ。かれは天上へ青色を延べる。かれの靈は海上を歩む。

一四、——かれが見る時、そのあるところへ山々を移す。

一五、——又かれの目は斗宿參宿昴宿と共に蒼穹を引包んでは温める。

一六、——又かれは天地を語る。

一七、——又かれの心にとつては、正義が即ち奔流だ。靜平なる水準を望んで、轟々と傾注する奔流だ。

- 一八、——わたしにはそれがわかつてゐる。
- 一九、——が、君等是要するに一盞氣樓の泥工等にすぎないのだ。
- 二〇、——暮色が濃くなつて、空のほかほかもう何も見えなくなつたので、わたしは寝ようと思つて、洞穴の中へもぐり込んだ。わたしより前に澤山の聖者達が籠つたことのある洞穴だ。
- 二一、——と、かの宗教改革家がわたしに向つて云つた事が、紛々と頭へ浮かんで来て、わたしはひどく寝苦しかつた。
- 二二、——わたしは人間以上の一大光明を思つてゐた。と、天中に層をなすその光明が見えた。
- 二三、——『俺は神を夢に見てゐる。』
- 二四、——みんなと同じやうに。』と、さう云へるほど、わたしはまだ充分に目がさめてゐたのだ。
- 二五、——が、わたしにはそれがよく分つてゐる。
- 二六、——と、再びまつくらがりになつた。と、そのくらがりの中で一大天使がでツちあがつた。
- 二七、——それは夜中に積上つた、人間姿の一宮殿と云つたやうな、燦爛たる構造をして、光りの上に生息しつゝあるところの、ひどく丈の高い一透明體であつた。綠色と薔薇色の曙で出来た、線條のある六枚の羽翼。埃及のピラミッドの如く、その裾が地にひろがつた、紀念碑のやうな白衣。月上の雲の如く、高いところで斷續した洪大無邊の手。それから天上で半ばそむけた顔の上には、その眼

球の水晶の突起。さうして累積したこの天使の雪のやうな頂天からは、梯子が一つはじまつてゐた。と、その梯子の横木は、すべて幅廣に引伸ばされた星であつた。

二八、——全部とり拂はれた。くらやみがまたはじまつた。と、そのくらやみが諸王の起した戰場の上へひろがつて、そこに流るゝ河が熱くなり、又定形のないその影が物凄しい形ち、即ち睡りを肯んじない眼をクワツと開いた、憤怒の形相をした死人の形ちをしてゐた事が、一種異様な象徴によつてわたしにはわかつた。

二九、——が、そこには多數の死者があつた。かれ等はすべて抱き合つてゐた。

三〇、——オアシスの中へのがれる人の如く、

三一、——わたしはネヘミヤの偉大なる時代へ、

三二、——わが民族の純潔なる瞬間へ逃げ込んだ。

三三、——『昔の人々に訊ねよ。』と書き誌されてあるからだ。

三四、——が、或聲がわたしに云つた。『お前の幼時を眩惑した、かのさまぐの出来事をもつとよく見よ。』

三五、——エズラは小人物であつた。神はエルサレムに住むと云つたのはかれだ。

三六、——さうしてエズラとネヘミヤとの罪は、ユダヤ人の悔悟の摩訶不思議力へもつて行つて、

或低級な思想をくつつけた事だ。

三七、——かれ等はイスラエルが悪事を行つた事は罵らず、却つて亡命客がその土地の女と結婚した事を罵つた。

三八、——即ち民族の利己心と貪慾心に懇へたのだ。

三九、——かれ等は汚水をのましてユダヤ人の大きな渴きをとめたわけだ。

四〇、——が、たゞそればかりではなかつた。

四一、——かれ等は擧つて再興する異常なユダヤ人等の勇氣を利用して、かの戒律だとか、奉納の義務だとか、又十分の一税だ、禮金だとか云つては、金錢や初生子で、宗旨へ献金する事だとか、さうしたおどろ／＼しい一規定を設けた。で、數千の祭司どもや、又レビ人、門衛、歌隊、ネテニ人、その他神の家のあらゆる指導者等の大衆を肥した。

四二、——かれ等の目をつけたのはそこなのだ。

四三、——ユダヤ人等は立上つた。さうして同意しなかつた。

四四、——が、上層のカラクリは歴代の民よりも堅牢であつた。

四五、——抵抗力は衰へた。さうして子供等はスツカリ隷屬に馴らされて了つて、ユダヤ的儀禮のきちがひじみた離叛を好むやうになつた。

四六、——かれ等は鑄型にはまつて了つた。

四七、——信仰がお辭儀したのだ。

四八、——イスラエルは自分自身に背いて屈服した。さうしてその骸骨が血肉を御するやうになつた。

四九、——人間の純潔な瞬間、それを見よ。』

五〇、——夜はわたしの眼を遮ぎらなくなつた。と、わたしの前には、雲中にはじまつて、やがて兩斷した一物の幻影があつた。地から天へ昇るとそれ自身の上へ崩れ落ち、そのまゝに消滅して、たゞ青山の土臺ばかりとなつたバベル塔だ。わたしの幻影も同様に失樂園の如く倒潰した。

五一、——手でそれに觸はれるほどに厚いくらやみの中で、わたしは地上でもがきながら、『掟の書！』と夢中で叫んだ。

五二、——すると、その晩、わたしは夢の中で、神殿の内部を見た。まつくらではあつたけれど、たしかに神殿の内部であつた。

五三、——夜の暗を、一人の男が祭壇の方へ進んで行つた。その祭壇は一向見覚えのある祭壇ではなかつた。疑もなく、それは昔の神殿、しかも昔の、ソロモンの神殿であつたからだ、

五四、——この男は……盗賊か？ さうぢやない。かれは祭壇の上へ一書を置いて立去つたから

だ。

五五、——いや、盗賊だ。

五六、——その書はこしらへものだからだ。律師や司祭等の一團が、自分達の好き放題に調製したものだ。かれ等はユダヤ人の傳説や、とりとめのない俚諺をきき集めて、それを文字でいゝ具合に書きなほし、附加へたり、嵌込んだり、いやが上に加筆したものだ。勿論、政治上の要求に應じてだ。

五七、——その書は『掟の書』となるだらう。人は、『この書は昔からあつた。天から墮ちたものだ。神が祭壇の上へそれを置いて下さつたのだ。』と云ふのだらう。さうして『黙示』の言葉で出来てゐるこの絢爛たる文字をば、かりそめにも信じない様子など見せるものは、人は虐げるだらう又殺すだらう。

五八、——これは二代目ヤラベアムとヨシアの治世の事だ。

五九、——又エズラの時代だ。

六〇、——エズラの曰く、『モーセ書はモーセ自身から出たものだ。』かれがさう云つたにも拘らず、モーセ書は新しいものであつた。モーセから千年も後のものだ。

六一、——一悪天使が云つた。『イスラエルの律師等が、たゞ安息日を正當にするだけの目的で、こ

の創造説を案出したといふわけでもないのだ、と云つたつて、アテにやアならない。』

六二、——この一撃にひしがれた者は、よろ／＼立上つて、かうした偉大なる冒瀆、恐らく冒瀆ではなかつたところの冒瀆をば、せゝら笑ひながらぐ／＼云つてゐた。

六三、——一神殿の柱のそばで、机へもたれながら『世界創造』を創作しつゝあつた、長衣の一文士をわたしは見つけた。

六四、——燭臺が一つ暗中にもつてゐた。人間の手の指がその燭臺の前へ出て来て物を書いた。

六五、——ダニエル書やエノク書はダニエルの作でもエノクの作でもない。

六六、——或る聲は叫んだ。『聖書の中では、事件に應じて預言が製造されてゐたんだ。』

六七、——聲はもつと高くなつた。『又新しい聖書が出来て、今度は預言に應じて事件が製造されるんだ。』

六八、——と、わたしは歌ふ聲をきいた。その聲があらゆる方面で唱つてゐた。

六九、——『マリヤの子、ダビデの子、神の子イエスに榮光あれ！』

七〇、——これは空間中へ自分の空間を展開した未來の一黙示録であつた。

七一、——さうしてダマスコ道で逢つた男がその中へ干與してゐた。

七二、——又わたしは一廊の中で論じ合つてゐる、律博士、大司教、隱者、教會、宗教會議、法王廳

のあらゆる役人を見た。

一五二

七三、——すると、例の聲。「かれ等はお前の事でもちきつてゐる。かれ等は「法典をつくつてゐる。その中でお前の一生は不變不易の經文の上へ釘づけになつてゐる。その中で、お前の顔は歪められてゐる。その中で、お前の中から昔の預言や不法な教理へ荒縄でくくりつけられてゐる。」「媒介者なぞない」と云つてゐるお前を、かれ等は「媒介者」その人にしてつてゐる。かれ等はお前の名でお前を打殺してゐるのだ。

七四、——お前はイスラエルの偶像を破壊した。さうしてその中でたゞ正義の偉大なる骨組だけ残して置いたものだ。ところが、ダマスコ道の男はその美しい空地へもつて行つて、もう一つ別な神を据えつけて了つた。

七五、——そこへ生命を据えつける代りにだ。

七六、——そこでモーセの掟と希臘神話とが双方から食ひ違ふだらう。さうしてお前の事で屠殺が行はれるだらう。お前といふものが、まん中で押しつぶされて、お前はたゞお前の血の雨だけになつて了ふだらう。

七七、——人がお前をどうするか、お前には全く何もわからないだらう。それをわたしがお前に云ひつけつゝある今でさへ、お前にはそれがわからないのだ。

七八、——お前を衝る人間は一人もゐない。さうしてお前の弟子の弟子達は「アーメン」と云つてゐる。

七九、——お、お前達みんな、世間中の人間、無数の貧乏人、やつらがどんなたくらみをしてゐるか、お前達にはまるでわかつてゐない。さうしてお前達に對している／＼目算が立てゝあつた事は、お前達は一向氣がつかずゐればこそ、さうして平氣で暮らしてゐられるのだ。

八〇、——が、そのうちには、貧民と無産者とが、お前の肉片から絞り出したこの教理へ息を吹き込んで、それで世界の生きた力をつくり出す時が来るだらう。

八一、——それはかれ等がそこに自分達と寸分たがはぬ悲惨を見つけ出して、思はずそれを抱きしめるにちがひないからだ。苦痛にたへきれぬ者どもは荊の冠をかぶつた王様を愛するだらう。

八二、——かれ等は、「神は人間であるべきだ。又人間は神であるべきだ。」といふやうな、きちがひじみた事はわからうとは努めないだらう。かれ等は母親のやうな愛情で、盲目的にこの思想を愛するだらう。

八三、——だが、併し、この教理が、釘づけになつたその神と共に、世に行はれる時が来ると、この教理は金持や首斬りどもの物になるだらう。

八四、——到るところでだ。いつでもだ。」

一五三

八五、——くらやみが諸君を追ひまはしてゐる眞夜中、人間と民衆とが到るところで正氣を失つてゐる丑満時、わたしはそこで現實の戰場へ身を曝らしてゐた石の間から、一聲高くどなつた。わたしは『耶穌を信するな！』と、頭上はるかに叫ぼうと欲したので。

八六、——が、さう叫ぶには、わたしの聲は弱かつた。と、又しても例の聲をきくべく余儀なくされた。

八七、——『お前に似る人々、さうして復活したお前になる人々は、お前とは赤の他人であるところのお前の教會によつて、罪に陥されたり、殺されたりするだらう。『ナザレ人』と名乗り、或は『貧者』と名乗る人々に氣をつけよ。』

八八、——宗教はその眞實の母親なる貧民から何もかも取上げて了ふだらう。不幸者から横どりして了ふだらう。

八九、——宗教は貧民や不幸者をば地のどん底まで突き落して、かれ等から光りも喜びも奪ふだらう。

九〇、——両面ある宗教は、

九一、——地上では悪をつくつて置いて、天の下では、お前の見つけた立派な教訓をつくり返して、『善とはかういふものだ。』といふだらう。

九二、——宗教は又義人等の呪咀と憤慨とを惹起するだらう。

九三、——義人は世々の敗北者だ。

九四、——お前のやうに。』

第三十章

一、——むかし會つた民衆にまた會ふため、わたしのエルサレムへ遣入つた時は、一切が日光の布で包まれてゐた。さうして歡喜に充ちてゐた。

二、——わたしは驢馬の子に騎つてゐた。わたしの弟子達は棕櫚の葉を動かしてゐた。『何だ？ 何だ』と云ひながら、人々が駆け寄つて來た。さうしてわたしを見て嬉しさうであつた。

三、——的鏢たる日光のお蔭で、かの、わたしの、内部の暗黒な夢は消失せてゐた。

四、——石上に腰かけてゐた一名の盲人が何事かとたづねる。と、その物影の見えない顔を心持わたしの方へふり向けて、大聲でわたしを呼ぶ。又雪をかぶつたやうな癩病患者が、そのゾツとする鎧のおかげで、わたしのそばまで近づいて來る。と、もう一人の盲人が手さぐりでそばへよると、『わたしのうしろには仲間が大勢ゐます。』と云つて、わたしにその苦惱を懇へる。

五、——われ／＼が神殿へ達した時、わたしはすべてに集つてゐた司祭民族の頭領達や又イスラエ

ルの元老院議員達を見た。

一五六

- 六、——はるか離れて、羅馬人達の顔もあつた。
- 七、——と、この人達を見ると、ダマスコ道の男の言葉がわたしの心に浮んだ。
- 八、——かれ等はみんなわたしに對して反感をもつてゐた。わたしはかれ等に對して憤りを感じてゐた。一切の悪事はかれ等から來てゐるからだ。又これからも來るだらうからだ。
- 九、——立錐の余地なきまでつめかけた民衆のそばなので、かれ等は敢へて一言も發しなかつた。
- 一〇、——ヅラリと並んだこの有力者達に面と向つた大勢の民衆を顧みると、わたしは不愜でたまらなくなつた。かれ等は恰も牧者のない小羊のむれのやうに、右往左往にさまよつてゐたからだ。
- 一一、——そこでわたしはわたしのそばにゐる人々に云つた。
- 一二、——『收穫は大きいが、労働者は一向見えない。』
- 一三、——民衆は地から出る。地から出る收穫物のやうに、又その労働の作物のやうに。
- 一四、——ところが、爰にあるのは互ひにはなれぬ／＼になつてゐる。
- 一五、——群集は群集ではなくて、こな／＼の無量無邊だ。』
- 一六、——ヨハネが云つた。『全部をなすのは部分だ。』
- 一七、——わたし。』だが、部分をなすものは全部だよ。

一八、——人類全部にわたつた運動は、いやになるほどまどろっこしい。そこに群集の一大煩累がある。即ちまどろっこしさだ。

一九、——かれ等がもしその氣になつたら、何でもできるのだ。

二〇、——かれ等がもしわかつたら、その氣になるのだ。が、それについて僕は諸君に云つて置く。知解の事業は捗らない。又いやがられる。さうしてそれが全世界の悪夢なんだ。

二一、——で、かれ等の苦悶が腹立たしく、飽く事知らぬかれ等の主人等が、腹立たしく、パウロがわたしに云つた事や、又盲目的な無益な反抗を事とする連中がわたしに云つた事が、腹立たしくて。

二二、——わたしは思つた。

二三、——『命をやる必要がある。』

二四、——その事については、わたしはとうから考へてゐた。『みんなの前へわたしの犠牲をさしあげて見せる事。形にあらはしてわたしの死を提供する事。ちり／＼ばら／＼の人達を一體にするために、わたしのからだの裂けちぎれたところを見せつけてやる事。』

二五、——わたしはいろ／＼工夫して、どうかして行爲の王者たらうとしてゐたものだが、

二六、——わたしの敗北から一大捷利を引出すために、

一五七

二七、——又それによつて死者を覺醒するために、わたしの出来る行爲のうちで、わたしの死が一番大きな行爲だつたのだ。

二八、——さうしてその時が來たのだ。

二九、——わたしの血をまきちらす時が。』

三〇、——神殿の中には兩替屋や商人どもがゐた。わたしはかれ等のところへとんで行くと、かれ等の腰掛やテーブルをひつくりかへし、民衆の前で、かれ等を追ひ出してどなつた。

三一、——『こゝは祈禱の家だ。それを貴様等が盜賊の巢窟にしてつたんだ。』

三二、——と、民衆はわたしへ向つてワツと喊聲をあげた。

三三、——わたしはまた犠牲の動物や、それを賣つたり、牽いて行つたりしてゐる者どもを追ひ出して叫んだ。

三四、——『神殿はもはや一階級に管理された一大屠殺場にすぎなくなつてゐる。』

三五、——この瞬間、民衆はそれがわかつた。

三六、——わたしの舉動によつて面皮をかゝされ、又民衆の叫喚に襲はれた上層の連中は口を噤んだ。

三七、——が、かうした事を云ひ且つ行つた以上は、もうさう長くはこの世にゐられない事が、わ

たしにはよく分つてゐた。

三八、——併し、羅馬人はまだ不關焉であつた。

三九、——で、わたしはこのわたしの前で動搖しつゝある市民に向つて云つた。

四〇、——『鐵鎖から出たまへ。諸君は出たがつてゐるのだ！』

四一、——憤りを發するのに、

四二、——又諸君を自分達だけの利益中へひツばつて行く者どもに向ひ、「何の權利で？」と云つてやるのに、

四三、——又惡を善に轉するのに、諸君は何をぐづぐづしてゐる？

四四、——「人右の頬を打たば左の頬を向けよ」と、往々諸君に云ふものゝあるのを僕は耳にした。

四五、——それは似而非預言者のいふ事だ。夢をはぐらかしたり、望を奪つたりする者どもといふ事だ。

四六、——それは善人を惡人の手にわたす事だ。

四七、——この連中は、「正當であれ」とは云はずに、「善良であれ」といふ教理へ諸君を犠牲にしよと欲してゐるのだ。』

四八、——で、犠牲者たるわたしはかれ等に向つて叫んだ。『諸君犠牲になりたもふな。』

四九、——自己を犠牲にする者は善良とは云へない。

五〇、——わが身を殺す者は暗殺者だ。希望の收穫たるかれ等はよく承知してゐる。この世では仁はたゞ仁の幽霊にすぎぬものだといふ事を。又悪人の種はつきないものだといふ事を。君自ら犠牲になる事は君自ら理解しない事だ。

五一、——霹靂の如く他を壓するダニエルの大喝、又イザヤ、エレミヤ、及び永遠の神へものを云つた一切の人々はたゞ正義のみを口にしてゐる。

五二、——正義は實相だ。血だ。泉だ。肉體中の肉體なる心臓だ。正義は「愛」を語らぬ。正義は「尊敬」を語る。正義は「光明」を語る。

五三、——さう語つて、正義は天を地につきまぜる。眞理を民衆につきまぜる。

五四、——諸君に正義をかなぐりすてさせるために、諸君を雲中へ出動させるために、又それをもつて戦争を平和に、悪を善に轉じようとする諸君の無爲を防ぐために、たゞそれだけのために、人はしきりに諸君へ仁を説き立てる。

五五、——制度を立てた者は、みんなその腰に劍を帯びてゐた。かくしてかれ等は制度を立てたのだ。「わが傍には喇叭ありき」とネヘミヤが云つてゐた。」

五六、——わたしはこの會合の中へ戻つてゐた祖師ヨハネ・ザカリヤを見た。かれの面前にゐると思

ふと、わたしも叫ぶ張合ひがあつた。

五七、——『かう書き誌されてある。曰く、お前がひツこぬくと思つて、又お前が取崩すやうにと
思つて、それでわたしはお前の口へわたしの言葉を置いたのだ。』

五八、——敵があらば、敵とたゝかへ。

五九、——併しまづ敵を見知つて置け。

六〇、——それはお前が敵だと思つてる人々ぢやない。

六一、——それは外國人ぢやない。異教徒ぢやない。」

六二、——司祭のうちの誰かゝ云つた。

六三、——『あの男は割禮を受けぬ者達のために喋つてゐる。』

六四、——エキエルの突出した拳骨がわたしに叫んだ。

六五、——『お前は國民的罪惡を犯してゐる。』

六六、——群集とわたしとの間にゐたヨハネ・ザカリヤが兩腕をふり動かして、かれに答へた。

六七、——『國民的罪惡とは何だ？ お前はそれを罪惡中のどこへ置くのだ？』

六八、——わたしが云つた。『人間の眞理は二つきりだ。即ち、めい／＼とみんなとだ。』

六九、——地上の貧民は、誰だつて他の地上の貧民には赤の他人ぢやない。

- 七〇、——貧者の眞理が物を云つたら、何と云ふだらう？
- 七一、——わたしは一個の非國民だ。」
- 七二、——『イザヤが絶叫してゐた。』とわたしは叫んだ。『人間中の卑しめられたる者に向ひ、統治者等の奴隷に向ひ、エボバかく語り。われ汝を諸國民のかゞやきにせんと。』
- 七三、——エボバを認めた預言者等は、全世界の上へモーセの掟を延長したのだ。
- 七四、——かれ等のあとへ来て、敢へてその掟を縮小したり、
- 七五、——又敢へて眞理に對して、外國人だとか仇敵だとか云ふやうな、あらゆる名前をつけやうとしてゐるのは誰だ？
- 七六、——お前の本當の仇敵は、やがてお前の征服すべき者どもは、即ち富者だ。強者だ。
- 七七、——富者と強者とがお前の外國人だ。
- 七八、——自分では種も蒔かなかつたところで收穫し、自分では指を觸れようとせぬ重荷をば他人の肩に荷はせ、さうして自分等の衣の裾へ無垢の魂の血潮を染める者はかれ等だ。
- 七九、——もてる者は與へられる。さうしてかれ等はいやが上にもつ。が、もたぬ者はもてるものまで奪はれる。
- 八〇、——さうして災難は惱める者の上に襲ふであらう。

- 八一、——併し働かぬ者には食ふ權利はない。
- 八二、——他人の汗で宮殿を建てる汝等には不幸あれ！ とエノクが云つた。
- 八三、——金錢がもし生きて子を産めばバケモノだ。
- 八四、——戦争と不正の富とが姿をかくすところの、
- 八五、——労働者によつてつくられたる、又労働者のためにつくられたる、労働者の共産社會では、
- 八六、——各人は各人に等しいであらう。
- 八七、——高いものは低くされるであらう。低いものは高められるであらう。
- 八八、——諸君の中の最大なものは、諸君の奉仕者であるべきだ。
- 八九、——僕は各時代のうちに、一大民族中に立ち上つて、その奉仕者となれる、一切人間中の最大なるものを見る。
- 九〇、——さうした一集合體の中にあつては、みんなはもはやたゞ自分達自身に服従すればいゝ事になるだらう。
- 九一、——さうして正義の奴隷となる事によつて、みんな自由になるだらう。
- 九二、——僕は諸君に申上げる。そこにまだたつた一つ、不幸者等の結合した一祖國がある。それ

は墓場だ。

九三、——死躰の中で諸君の目のさめる時、さうして諸君が互に眩つきあはしてゐる事に氣のつく時、

九四、——諸君は他の墓の中と同様な牢獄中にゐる事がわかるだらう。さうしてそれが即ち諸君の同胞愛だといふ事がわかるだらう。

九五、——さア、鉄鎖から出たまへ。出ようと欲してゐる諸君ぢやないか！

九六、——お互に似るために、死人となるのを待つ必要はない！

九七、——そこに突立つてゐたヨハネ・ザカリヤがわたしを指して叫んだ。

九八、——『この男だ！』

九九、——この男だ、おれは貧民に福音を説いた。』とヨハネが云つた。『併しこの男は永遠に生命ある言葉をもつてゐる。光明の武器をもつてゐる。即ち世界の罪といふ罪を取除く神の小羊だ。』

一〇〇、——熱烈な沈黙の間を置いた後、わたしはイザヤの如く絶叫した。

一〇一、——『くらやみの中に坐つてゐた民衆は一大光明を見たのだ。』

一〇二、——民衆は今や憤然として見る。

一〇三、——正義に飢え渴く者は幸福だ。かれ等は飽くことができるからだ。僕は成熟の時代を豫

告する。眞理のために苦しむ事はやがて一つの喜びとなる時代だ。

一〇四、——但し悪牧者には従つてはいけない。

一〇五、——諸君自身！

一〇六、——求めよ。諸君は與へられる。たづねよ。諸君は発見する。叩けよ。諸君は開かれる。

一〇七、——さうして諸君が一切を所有せぬうちは、諸君は決して何物をも所有せぬだらう。』

一〇八、——永遠の正義が咆哮した。『捉はれた者達に向つて「出でよ！」と云つてもらはんがために、わたしはお前を擁護して來たのだ。』

一〇九、——民衆の一人がわたしに叫んだ。『われ／＼は革命を待つてゐます。』

一一〇、——『すると、諸君自身を待つてゐるわけだ。』

一一一、——諸君の主人等へ云つてやりたまへ。一切をつくつたのは諸君の手だ。諸君の苦悶だ。

一一二、——が、ガラリヤのユダはいけない。サドクもいけない。さうした類ひはいけない。

一一三、——弱すぎる力で強すぎる力にむかつてゆくさうした敗戦は慎しみたまへ。

一一四、——併し弱い力で強くなる用意はしたまへ。みんなかたまれば、諸君は強いのだ。』

一一五、——そこでわたしはゼロテの問題に裁斷を下して云つた。

一一六、——『人類の不幸を蠶食するのは一民族の貪欲ぢやない。』

- 一一七、——人間を人間に返すのだ。人間を人間に結合するのだ。人間の山岳をつくるのだ。
- 一一八、——やがて、たゞ一大連結だけになつて了へば、鉄鎖は否應なく落ちて了はう。
- 一一九、——まづ諸君の頭の中で××をやつてもらひたい。
- 一二〇、——××は靈からだ。
- 一二一、——××は靈に即して、あるものをばあるべき筈のものへ變ずる事だからだ。
- 一二二、——眞理はたゞ一つしきやない事をくれぐれも知つて置いてもらひたい。又靈に即して成さるべきものは、同様の事物の力によつて、やがて成されるものだといふ事を、くれぐれも知つて置てもらひたう。
- 一二三、——日々刻々の事は誰にもわからぬ。
- 一二四、——生命だ。生命だ！
- 一二五、——本當に諸君に云つて置くが、あちらの人達の名譽と財産と歡喜とは、こちらの人達の屈辱と悲惨と不幸からつくられてゐる。
- 一二六、——劍によつて維持するものは、必ず劍によつて滅ぼされる。
- 一二七、——劍は即ち諸君の道具だ。
- 一二八、——あちらの人間とこちらの人間との間は力の問題だ。

- 一二九、——道理ある者には力もあるべき筈だ。もしなければ、もつべきだ。
- 一三〇、——力のないのは、創造的配偶に何かしらん欠けてゐるのだ。
- 一三一、——力は靈の牝だ。
- 一三二、——地の塵の中に眠る者、熟睡してゐる者、或はその夢を叫ぶ者どもは、
- 一三三、——いまぐしさの極に陥つた時、目がさめるだらう。
- 一三四、——義人等は地がもう擔ひきれぬほどの蠻人になるだらう。唯一の民衆は汗と血との記號の下に身をもつて神の統一を改造するだらう。
- 一三五、——勝手に振舞つてるから諸君はきちがひだ。
- 一三六、——善人にも
- 一三七、——賢人にもなれる諸君ぢやないか！』
- 一三八、——廣場ではユダヤ人等が叫びだした。
- 一三九、——さうしてそれはカラ騒ぎではなかつた。
- 一四〇、——憤怒の大天使がかれ等の口からとび出したものだ。
- 一四一、——そこにわたしへあびせかけた愛の喊聲があつた。わたしに對して人がこの際どうする事もできなかつたほどの喊聲だ。

一四二、——色を失つた有力者達の態度や、羅馬人やユダヤ人の顔色がわたしにはよくわかつた。さうしてそこにわたしの生命の終結があり／＼と書きしるされてゐた事がわたしには讀めた。

第三十一章

一、——わたし達はわたし達の會堂へ夕飯に集つた。さうしてこれがわたしの弟子とわたしとの一緒にたべる最後の食事だといふことが、それとなしにわたし達にわかつてゐた。(が、實際は最後のひとつ前の食事だつた。)

二、——わたしはパンを割つた。で、それを分ける間、まづシンと靜まりかへつた。

三、——やがて、シモン・ペテロが聲をあげて、わたしに云つた。「あなたは命の王様です。」

四、——わたしは答へた。「君達は本當に僕の弟子であつてくれたまへ。君達は眞理を知つてくれたまへ。さうして眞理に解放されてくれたまへ。」

五、——ナタナエルが云つた。「さうすると、われ／＼には眞理がすつかりわかつてゐないのですか?」

六、——「さう。すつかりわかつてゐない。」

七、——すると、かれは奮然としてわたしにたづねた。「あなたは愛にそむいておいでになりやしま

すまいか? 伺ひたう存じます。」

八、——ジャツクもまた奮然と云つた。「人間の心を變へなけりやなりません。」

九、——食卓のあつた廣間には、古い木製の扉が開いてゐた。と、その大框からは空が見えて、入日がそれを綠色にそめてゐた。さうして光線がちぎれ／＼に這入りこんでゐた。

一〇、——で、物象の美をよそにして、わたしは答へた。「君の夢をわれ／＼がどうしたらいいのか?」

一一、——君は君の夢をば一枝の花のやうにして、君の指先でもつてゐる。さうしてそれを飾りにしてゐる。が、實際は、君はなんにも持つてゐやしない。

一二、——君は君の花をひどく有難がつてゐる。けれども理解する者は、又目のある者は、君よりもつと勇敢だ。もつと正直だ。」

一三、——わたしは尙ジャツクに云つた。かれは頭を垂れて、食卓の上の、兩手の間の、夕日にかがやいたその皿を見つめながら、わたしの言葉を熱心にきいてゐた。

一四、——「心を變へる? いけない。そんな事は人にはできないからだ。」

一五、——變へなければならぬのは心ぢやない。内部にあるものだ。

一六、——「爰にある諸君も又爰にゐない諸君も、

- 一七、——諸君はお互に理解したまへ。お互に愛したまへ。『僕が君達に云ふのはそれがためだ。』
- 一八、——これは唯一不變の訓戒だ。僕が諸君へ進呈するのはそれだ。
- 一九、——もし理解が抱擁を意味しなければ、それは何を意味するものか僕はわからない。
- 二〇、——理解は生ける言葉だ。この言葉の肉が、即ち愛だ。
- 二一、——いけないのは、理解しないうちに愛する事だ。上部から家は建てはじめてはならないからだ。理解が先だ。愛は後だ。
- 二二、——規律のない愛は地上の風に吹きさらはれるものだからだ。
- 二三、——さういふ愛は悪化する。
- 二四、——又心は啞が叫ぶやうに叫ぶ。
- 二五、——若し諸君が愛と理智とを同時に信するなら、「愛及び理智」とは云ひたまふな。「理智の愛」と云ひたまへ。
- 二六、——が、安心したまへ。愛なしには理智は成立たない。さうして若しそこに正義の大繩墨中へはいる偉大なる何物もないならば、同様に、そこに慈悲の大きな腕の中へはいる、優しい、熱烈な物もないわけた。理性はまつすぐだが、狂愚よりもつと狂的に偉大だ。』
- 二七、——ジャツクのまじめな顔がもちあがつた。かれの唇は動いた。

- 二八、——『なぜあなたはいつも愛の代りに慈悲と仰しやるのです？』
- 二九、——『それは愛の純直なものだからだ。』
- 三〇、——見る愛だ。
- 三一、——人間のための愛とは、即ちありのままに人間を見ることだ。さうして諸君がかれ等の上へかさなり、又かれ等が諸君の上へかさなることだ。人間の愛とはさういふものだ。即ち光明、節制、裨益、光明。
- 三二、——行ひ得べき事以外には熱中してはいけない。が、行ひ得べき事には熱中しなければならぬ。
- 三三、——言語は労働者であるべきだ。
- 三四、——一個の物ではないところの、自分だけの心の、吹けば飛ぶやうな悲慘に對しては人は手につけられない。
- 三五、——重たい。
- 三六、——従つて持運びのできる一個の物であるところの、一切人間の相類似せる悲慘に對しては、人は何でもできる。
- 三七、——で、離れ／＼の心が若し手さぐりしたゞけで互に結びつくとするれば、一切の他人の方へ

さしのべる手は他人に觸れる。

三八、——君ひとりの喜び、君ひとりの苦しみは、變りやすく、欺きがちだ。が、全人類の苦しみは決して君を裏切らぬ。

三九、——「人間を天使に、又世界をエデンの園に變じたい。」とは云ひたまふな。「どの道を行つたらいゝか？」と人が君に折返して訊くからだ。同様に、盲人に向つて、「あなた方に美しい光りのかたちを話してきかせませう。」とは云ひたまふな。「わたしどもは光りの正味のもがほしいのです。」とかれ等は君に叫ぶからだ。

四〇、——「この世で結びつくものゝ整理に従事したい。」と云ひたまへ。

四一、——又「幸福」とは云ひたまふな。むしろ「平和」と云つた方がよろしい。

四二、——併しあらゆる強者と、はじめから諸君と戦ふやうにつくられた、冠をかぶつた宗教と、世間の一切の力とが、諸君を敵視するだらう。

四三、——諸君は憎まれるだらう。又迫害されるだらう。又設備のいゝ強盗どもが、諸君のことを強盗だと云ふだらう。又ウソツキどもが諸君のことをウソツキだと云ふだらう。さうして強盗でもウソツキでもないところの貧民までが、諸君のことをさう繰返すだらう。

四四、——諸君の王國はこの世の中のものぢやない。

四五、——が、この世の中のものでなければならぬ。

四六、——この世の中のものなんだけれど、この時代のものではないのだ。

四七、——僕は出かけて行く。併し僕はもう一人の慰撫者を諸君へあげて置かう。即ち正義の靈といふものだ。世の中ではそれを目撃しないものだから、それを受入れることができないのだ。

四八、——一切の眞理中へその靈が諸君を導いてくれるだらう。』

四九、——『何が正義の證據です？』とデドモが云つた。

五〇、——わたしは答へた。『これが僕の肉だ。これが僕の血だ。』

五一、——これが大衆の血管中に流れる大きな河だ。

五二、——僕の血は他の人々の血だ。

五三、——それが正義の證據だ。

五四、——常に新しくてゐたまへ。諸君を憎むこの世の中の復活者でありたまへ。

五五、——さうすれば諸君がこの世の中をも復活させることができる。

五六、——僕のするほどの事は誰にでもできる。誰でもみんな、僕と同様、眞理の證人だからだ。さうしてその立證ができるからだ。

五七、——従つて魔法使ひであつてはいけない。

五八、——自分等だけの利益の右へも左へも走つてはならない。
 五九、——この世の中に若し神聖な物がたゞ一つだけ残つてゐるとすれば、それはその物だらう。
 六〇、——僕は諸君をば僕のしもべとは呼ばない。何となれば、しもべには主人のする事がわからぬからだ。

六一、——で、僕がゐなくなつた晩には、諸君、一生懸命に僕の事を考へたまへ。

六二、——孤兒にならないやうに。』

六三、——シモンは再び聲をあげた。

六四、——で、これだけ云つた。『あなたは世の中をお變へになります。さうして世の中は變りま
 す。』

六五、——弟子達は悲しさうだつた。でも、かれ等は歡喜と聖靈に充たされてゐた。

六六、——ジャツクがわたしに向つてヤコブのやうに云つた。『わたくしにはあなたのお顔がまるで神様のお顔のやうに見えました。』かれは再びわたしに向つてヤコブのやうに云つた。『わたくしはあなたに面と向ひました。さうしてわたくしの魂は解放されました。』

六七、——わたしは幼少の頃友達と出逢つた時感じた、その嬉しさを思ひ出してゐた。

六八、——わたし達が同時にわたし達を擇んだ時、さうしてわたし達がわたし達になつた時、(かれ

とわたしとが、左と右に、)言葉は肉となつたのだ。

六九、——ほゝゑみかはず二つの微笑、それが正に判然とこの世の中のたつた一つの物だ。

七〇、——この座に列する者達の唯一心が、かくして今やわたしの思想に生のよろこびを與へた。かれ等が一致結合して、わたしの如く考へる時、共鳴するわれ／＼の言葉は肉となるであらう。

七一、——この上生きてはゐられなかつたわたしが、かれ等に向つて云つた。『生きたまへ。』生きる者のためにだけに希望がある。』とは傳道の書の言葉だ。『生きた犬は死んだ獅子にまさる。』とはその書の言葉だ。』

七二、——戸口に匡どられて見えてゐた大空は薔薇色であつた。空には鳥の聲がしてゐた。

七三、——『理解せよ。靈の平和は心の平和と同様に美しい。』

七四、——理解は平和の母だ。

七五、——各自から全人類へ赴くところの、線の純潔が理解されようとしてゐる。

七六、——又生の價値が

七七、——又薔薇色がその息で領する場所が。

七八、——又鶯が夜の間に占める場所が、

七九、——又天が地に織込まるゝ場所が、

- 八〇、——又白晝と單純との奇蹟が、
- 八一、——摩訶不可思議に理解されようとしてゐる。
- 八二、——晝と夜とがわれ／＼を欺かぬからだ。
- 八三、——又たゞ一日で出来あがるすばらしい一切事が、
- 八四、——美しい死の恐怖がわれ／＼を欺かぬからだ。』
- 八五、——夜に近づく、わたしは一隅のエキエルを見た。
- 八六、——かたきになつたこの友達が、わたしを見つけると、ブル／＼顛へた。さうして頭を垂れた。
- 八七、——わたしはかれの前に立ちどまつた。すると、かれは一寸の間ジツとわたしを見まもつた。わたしはかれがわたしの腕の中へ投じて来る氣にはなれなかつた事を見てとつた。
- 八八、——わたしはかれに云つた。『ほう、君か。』
- 八九、——かれの呼吸がそつとわたしに答へた。『えゝ。』
- 九〇、——で、人が世の中でさう云つて、時の洪大無限中へ、お互に這入つて了へるところの、その一切を意味するさうした言葉をかく述べあつた後、二人は別れて了つた。

第三十二章

- 一、——そこには終日わたしに逆らふものとはなかつた。
- 二、——天氣はよかつた。野は輝いてゐた。が、わたしはもうそんなものを味はつてもゐられなかつた。
- 三、——いつものやうに夕暮が來た。さうして夕暮の來た時に、わたしは思つた。『今夜こそ一切が終るのだ。』
- 四、——わたしの前にはあまり僅かしきや時がなかつたので、どうしていゝか分らずに、重い足どりで歩いてゐた時、わたしはユダ・イスカリオテに逢つた。
- 五、——かれは齒をガチ／＼云はしつゝ、恨めしさうな暗い顔つきで、思案に耽つてゐた。
- 六、——で、わたしを見つけるや、否やかれはさつそくわたしに云つた。
- 七、——『わたしは少しあなたに申上げたいことがあります。』
- 八、——お寺で説教なさつたあなたのお言葉はいけません。既に山上でも説教なさつたことのある、即ち、「民衆は民衆自身事に當らなければならん」といふお言葉です。
- 九、——先生、あなたはむしろ黙つてお出でになつた方がよかつたんです。さもなくば、ほかの事をお話しになつた方がよかつたんです。すべてわたくしの見てゐたとほりです。わたくしがあなたに申上げてゐるとほりです。先生、あなたの御利益のため、ようツク御きゝ下さい。

一〇、——あなたの福音へカイザルをまぜてはいけません。靈の事だけ仰ツしやい。さうしてカイザルはそのまゝにしてお置きなさい。』

一一、——わたしが云つた。『君、靈とカイザルとは兩立しないよ。』

一二、——かれが云つた。『どうしてさうなるのですか？ さうは一見して思はれませんが。われ／＼は中央に居りませうよ。だが、わきへよけて歩ませうよ。』

一三、——と、わたしにはそのもつと先の、最も大きな誘惑は誘惑とは見えない誘惑だといふ事や、又この男は悪人ぢやないけれど、わたしに背き、わたしから離れてゐたといふ事がわかつた。

一四、——なぜかといふと、かれはいつでも目前の小事に没頭して、それでいゝつもりであるからだ。

一五、——かれがそこにゐる時、わたしにはわたしに反対した世間全躰がそこにゐるやうな氣がする。

一六、——まるで立木にぶつかつたやうだと、わたしは云つたけれど、

一七、——さうぢやなくて、まるで、夜、森へぶつかつたやうなものだ。

一八、——わたしの苦悶は百倍にも、千倍にも、まだもつと大きくなつた。

一九、——そこで、絶望して、わたしは子供見たいになつた。さうして母を想ひ出した。と、わた

しの足はかの女に逢ひに行くためにわたしを運んで行つた。

二〇、——母はベタニヤなる知邊の許にゐた。

二一、——村では静かなその日の營みをはつたところであつた。すべての人々の一日が充實されたのだ。かれ等は歸る。めい／＼にその棲家へ。かれ等は平和だ。かれ等の庭の匂かかれ等を出迎へる。かれ等は夕風に向つて、『吹いてくれ』といふ。

二二、——夕暮は一日の中の一番いゝ季節だ。

二三、——さうして一切が一切以上に美しくなる。

二四、——わたしは一切を擇ぶ。

二五、——が、わたしは冬であつた。わたしは冬を持ちまはつてゐた。誰でも、時々刻々、自分の姿に世界をつくりなほしてゐるものだからだ。

二六、——事々物々が美に装はれてゐるやうに見える。が、その美は畢竟過客の布施にすぎぬ。

二七、——又夜とは、目をとぢる事だ。

二八、——時がこれ等の家々の光明をともしつくして了ふには、とにかく徐々とした長い時日がかかる。

二九、——が、かれ等の楽しむかうした事どもは、一切もうわたしにはおしまひだ。

三〇、——この土も、あすこの土も、わたしはもう二度とは踏めないであらう。今こそわたしの
 一歩々々が永訣をつける時だ。

三一、——老人がゆつくりと梯子段を下りて来る。かれはその梯子段をまた昇るだらう。が、墓
 の中へ下りて行く者は、二度とは昇つて来ないであらう。

三二、——一軒の家の、戸口の幕の蔭で、幸福な歌聲が一つ、その不朽の芳香を散らしてゐる。

三三、——戸口々々を閉めきつた、この奥深い家。その内部に生きる人々にとつては、それは一個
 の物だ。通りすぎる者どもにとつては、一個の生物ではないか？ さうして雨が降つたから、あの壁
 が泣いたのだ。

三四、——一少女がわたしの方をむいて歩いて来る。が、わたしが行つて了ふので、かの女も行つ
 て了ふ。

三五、——低徊しつゝ、唯見ると、燈火が一つともつてゐるのが見える。あかりのそばで、その家
 の窓硝子と棕櫚の木がばかに青い。

三六、——世の中はなんて青いものだつたのだ！

三七、——好きだ。

三八、——神様、神様。

三九、——忽ちすぎて了ふわたしの運命を考へて、わたしは子供のやうに、思はず「神様」と叫ん
 だ。

四〇、——心ならずもさう云つたのは遺憾ながらわたしの口だ。

四一、——坐つてゐたわたしの母を見ると、わたしは母に一大事を告げた。「おかアさん。わたしは
 世間に反対して立ちました。」

四二、——いつもゐるかゐないかわからぬやうな物蔭から、母はやつと出た。で、さうした事を口
 にするのか耻かしくて、かの女は赤くなつた。

四三、——食事の用意してゐた皿小鉢までさし置いて、

四四、——母は云つた。「他人をさからつてはいけないよ。何でもない事にかどを立てゝ、お前が大
 きな聲をすると、わたしにはをかしく思はれて来る。」

四五、——なるほど人達がお前の云ふことをきいて、お前にお禮を云つてると、そりや嬉しい。

四六、——だが、そのほかの人達はお前のことを全くよくないユダヤ人だと云つてゐる。」

四七、——わたしが何も云はずにゐたので、又時がズン／＼たつたので、母はその硬ばつた指先で、
 その膝の上へ置いた鐵鍋をゴシ／＼こすりはじめた。夕方が来たので、食事の支度をしなければなら
 ないから、ぐづ／＼してはゐられなかつたのだ。

四八、——かの女は云つた。「マリヤ、お前は誰も何とも云はないイエスといふ正直な職人の母親だと、人が云つてくれたら、どんなにいゝだらう。」

四九、——ところが、人はさうは云はずに、かういふぢやないか。あのイエスは國賊だ。あの男は上つ方や物持達を有難がらない。それはコミュニニストだ。

五〇、——わたしには何の事かわからないけれど、人がさう云つてゐる。

五一、——だから、世間の事は世間のまんまにして置くがいゝよ。世間はそれでいゝんだよ。わたしはさう思ふよ。ほんとうだよ。おとなしくおしよ。」

五二、——その眼瞼の間でキラ／＼する涙で、わたしの決心を促すやうに、かの女はジツとわたしを見まもつた。

五三、——苦しくてたまらなくなつて、わたしは自分のもつてゐる一切のものを與へてくれた人の前にひれ伏した。

五四、——わたしは自分の母親を擇べなかつた。母とわたしとの間には共通な何物があるか？

五五、——面と向つてわたくしの見たのは女性だ。われ／＼の間にある共通なものはそれだ。

五六、——母親といふものは、その小さな女性の肩を折りかゞめる。

五七、——辛抱づよいその接吻は石をも和らげる。

五八、——返事はせずに、わたしはかのアナニヤのアシタロテを想ひ出してゐた。その黄金の幼児を抱いた女神が、或日わたしの母を誘惑したものであつた。

五九、——きらびやかに垂れさがつた装飾、即ち女神の人工的な凡庸な美と、それから星形に根を張つた眼に、一杯涙をためたわたしの母の貧弱な女性とを結びつけて、わたしは思はず、「女神マリヤ」と呟いた。さうして絶體絶命の底で、わたしは人知れずニツコリした。

六〇、——わたしは母に別れを告げた。かの女の顔はもう夜の暗は没してゐた。それからわたしはゲツセマネの道をとつた。村の住民は姿をかくした。死んで了つたのだ。と、さつきからわたしの咽喉の中で、出かゝつてゐた叫聲がヤツと出た。「神様、神様、あなたはなぜわたしをすてたのです？」

六一、——さうしてこれは聖書から來た一個の誘惑であつた。

六二、——かの『わが父……』として見ないわけにはゆかなかつた血屬の苦しみであつた。

六三、——「天にましますわが父上、あなたはあらゆるわれ／＼の苦しみを聴いて下さいます。」

六四、——さうしてわたしは人の神を信する所以を解した。

六五、——氣でも狂つたら、わたしは神を信するだらう。

六六、——橄欖山の上には月がまんまるく出てゐた。わたしの弟子達がそこの藁の中にゐたところの納屋には、屋根の穴から月光がまつ四角にのぞいてゐた。

六七、——で、周囲は暗かつたが、弟子達のトかたまりになつて寝てゐる姿が見えた。
 六八、——わたしがかれ等に觸ると、かれ等はいやく／＼目をさました。
 六九、——寝る前にかれ等は何を話してゐたか？かれ等は云はなかつたが、やがて白状したところによると、かれ等は自分達のうちで將來誰が一番偉くなるだらうといふ事を論じあつてゐたものだらうだ。

七〇、——かれ等は知つてゐた。かれ等はわたしと永訣の盃をしたのだ。かれ等はその事について話してゐたものだ。

七一、——そこで一日のつかれで、かれ等はぐツすり寝込んで了つたものだ。

七二、——かれ等は目をこすつた。さうして光りの末が地上に這つてゐた、そのあかるみのそばで、再びぐつたりと寝て了つた。

七三、——かれ等はこの一夜をわたしと一緒に夜あかしできなかつたものか？

七四、——わたしの一番いけない敵は、かうした鼻元思案の憐むべき人達だ。かれ等はわたしの言葉の上へもつて行つて、出来るだけ都合のいゝやうに自分達の言葉をあてはめて了つてゐたのだ。

七五、——が、かれ等はその平々凡々さのために、わたしを裏切るやうになるだらう。

七六、——シモン・ペテロはわたしを否認するだらう。大勢の前で否認するだらう。たつた一人で

も、一夜かれはわたしを否認するだらう。それでもかれはさう考へさせられる事を恐れるだらう。その夜、かれはわたしの方を向いて、ジツと見つめるだらう。さうしてわたしはかれのそばにはゐないだらう。かれにはわたしの言葉がきこえないだらうからして、その晩は、かれは自分の家でわたしがかれのいふ事をきいてゐてくれるものと思ふだらう。かれは恐がるだらう。さうしてかれにとつては、わたしといふものが、かれのゐるところだけ除いた、到るところにゐる事になるだらう。

七七、——わたしに一番似てゐるヨハネ、その眼つきが鏡のやうにどこへでもわたしの姿をもち歩いてゐるヨハネ、始終頭を垂れて、眼をあげて、ジツとわたしを見まもつたヨハネ、そのヨハネも同様にわたしを裏切るだらう。さうしてわたしの事は思ひ出しもしないだらう。

七八、——わたしは目に見えぬ眞理へ、わたしのもつてゐた、たつた一つの善、即ちわたしの生命をやつて了つたのだ。さうしてわたしの生命は今ももうわたしのものぢやない。

七九、——さう考へて、わたしはたつたひとり納屋の中で泣いた。

八〇、——さうして膝の上へ身を屈めて、わたしはふるふる自分の両手を見た。絶望した人間には苦しむ自分の顔は見えないが、その手は見えるものだ。

八一、——ところが、わたしのこれまで大して注意しなかつた、或一人の弟子が、壁のそばで目をさましてゐた。わたしは最初、「わたくしは寝てはをりませんでした。」と云つたかれの聲をば、たゞ膝